

ヲ遠隔ノ地ニ運搬セシムルハ隔離法ニ屬シ其之ヲ運搬セシムル前ニ消毒ヲ行フハ消毒法ニ屬ス其事ハ一途ニシテ前半ハ隔離法中ニ載セ後半ハ消毒法中ニ載スルカ如此心得書ニヨリ實施スル者宜ク相對照シテ其順序ヲ誤ルコト勿レ

虎列刺

虎列刺ハ異特ノ流行性傳染病ニシテ其病毒ハ病者ノ吐瀉物中ニアリ然シテ其吐瀉物ノ泡釀ニ向ハントスル時最モ傳播ノ媒介ヲナスコト甚シトス故ニ此病毒一回不潔汚穢ノ地中水中ニ入ルキハ更ニ其蕃殖ノ力ヲ加ヘ動モスレハ飲料水ニ混シ遂ニ人体中ニ入りテ發生ス其症タル暴カニ吐瀉シ生力忽チ沈衰シテ而シテ斃ル傳染病中最モ急劇ナルモノト謂フヘシ印度地方ニ於テハ毎歲發動シテ地方病トナルト雖モ人民ノ交通ニヨリ四方ニ蔓延シ到ル所或ハ三四年間流行シ或ハ全ク其痕跡ヲ絶タスシテ散發スルコトアリ總テ此病毒ハ夏月温熱ノ候ニ當リ其發動ヲ見ルモノトス眞症及ヒ類似症ノ二種アリト雖モ俱ニ傳染スルモノナリ故ニ其豫防ニ至テハ同様ノ注意ヲ要スヘシ

第一項 清潔法

第一條 虎列刺病ノ吐瀉物ハ一滴タモ汚穢ノ地ニ滲入セシムヘカラス若シ滲入スルキハ其泡釀力ヲ助ケ忽チ蕃滋増殖スルモノナリ故ニ土地ヲシテ不潔ナラシムヘキ芥溜下水廁厠魚市屠場等ハ常ニ之ヲ掃除スヘシ其掃除スル毎ニ防臭藥即チコロール石炭、明礬強溶液、

テール油等ヲ適宜ニ撒注スルヲ長トス

第二條 虎列刺病毒ハ容易ニ水土ニ滲入シテ傳播スルカ故ニ常ニ飲料水ニ注意ヲ加ヘ井戸側及ヒ敷石若クハ敷板ヲ堅牢緻密ニシテ傍地水滲透ヲ防クヘシ其他飲料ニ供スル河氷及ヒ水道ノ源ハ汚穢物ノ流入ヲ防クヘシ

第三條 虎列刺ノ病毒ハ排泄物ニヨリ傳播スルヲ以テ糞壺若クハ桶ヲ堅牢ニスヘシ且ツ常ニ注意シ糞尿ヲ汲取リテ之ヲ充滿セシムヘカラス殊ニ衆人群集スル所ノ厠園又井水若クハ水道近傍ノ厠園ノ如キハ最モ注意ヲ加フヘシ

第四條 糞壺若クハ桶等ニ罅隙アルハ糞汁之ヨリ滲漏シテ忽チ病毒ヲ地中ニ滋蔓セシム此ノ如キモノハ消毒藥ヲ施スモ其功ヲ奏スル能ハス故ニ豫メ壺桶ヲ點檢シ罅隙アルモノハ之ヲ改良スヘシ

第五條 芥溜ハ雨水滲入スルニヨリ其汚穢ヲ廣ク地中ニ浸漫セシムルヲ以テ木箱或ハ鉄葉箱等ヲ以テ其貯器トナシ板蓋等ヲ設ケ雨水ヲ禦キ且塵芥ヲ堆積セシムヘカラス

第六條 下水溝渠ハ石若クハ堅質ノ木材ヲ用テ有底ノ放水樋ヲ設ケ遠隔ノ地ニ流注セシメ汚水ノ地底ニ滲入スルヲ防クヘシ其樋上ハ蓋ヲ以テ密閉スヘシ若シ其接合密ナラサレハ却テ其間ニ腐敗氣ヲ停蓄スルカ故ニ此ノ如キモノハ寧ロ上面ヲ開放シテ大氣ニ曝スヲ以テ愈レリトス但塵芥ハ必ス溝渠ニ投棄セシムヘカラス

第七條 溝渠ハ注意シテ塵芥ヲ除キ淤泥ヲ浚フヘシ且ツ其泥芥ハ溝側ニ留置カスシテ人家遠隔ノ地ニ搬送スヘシ然レ炎熱ノ候ニ當テ日中ニ泥芥ヲ攪動スレハ惡臭ヲ發シテ空氣ヲ汚濁スルノ恐アルニヨリ必ス他ノ時候ニ於テ之ヲ浚除スヘシ

第八條 魚市屠場ニ於テハ其流出スル所ノ汚水地中ニ滲入スルノ恐アルヲ以テ第六條ニ同シキ放水掘ヲ設ケ流注セシムヘシ且屠屑腥汁ヲ培料ニ供スルカ爲メニ久ク貯積スヘカラス必ス有蓋ノ箱若クハ桶ニ入レ置キ速ニ人家遠隔ノ地ニ搬送スヘシ其他牛馬ノ厩舎及ヒ羊豚雞鶩ノ蓄場等モ亦此旨意ヲ以テ掃除スヘシ

第九條 人家稠密ノ場所ニ於テハ培料ノ置場ヲ設クヘカラス若シ止ムヲ得スシテ設クルハ久シク推積セシムヘカラス前條ノ旨意ヲ以テ人家遠隔ノ地ニ搬送スヘシ其汚汁滲入スル者ハ更ニ新土ヲ以テ之ヲ覆フヘシ但村落廣濶ノ地ニ於テハ必シモ之ヲ要セス

第十條 學校、囚獄、製造所、旅店、劇場等ハ流行ノ際更ニ清潔法ニ注意シ又避病院ニハ掃除專務ノ人夫ヲ設ケ殊ニ注意ヲ加フヘシ

第二項 攝生法

第十一條 虎列刺病ハ各人皆之ニ感スルノ素因アルニ似タリト雖モ就中不攝生ノ人之ニ感スル最多シトス故ニ流行ノ際ハ殊ニ飲食ヲ慎ミ其他不攝生ノ事ヲ戒ムルヲ以テ至要トス

第十二條 飲料水ハ必ス無色無味無臭ノモノヲ撰ヒテ之ヲ用フヘシ若シ止ムヲ得ス其稍々不良ノ疑アルモノヲ用フルハ之ヲ濾過スヘシ然レモ煮沸ノ後之ヲ用フルノ最良ナルニ如カス蓋シ病毒ハ之微ニシテ濾過力ヲ以テ盡ク之ヲ除キ去ルヘカラスト雖モ之ヲ煮沸スルハ其毒分ヲ全ク殲滅スルノ効アリトス

第十三條 氷及ヒ冷水ハ縱令其質不良ナラサルモ之ヲ適度ニ飲用スルハ之カ爲メニ下利ヲ發スルモノナリ故ニ流行ノ際ハ過量ノ飲用ヲ戒ムヘシ但不良ナリト認ムルモノハ決シテ之ヲ用フヘカラス

第十四條 酒ノ清醇ナルモノハ之ヲ適度ニ用フレハ害ナシト雖モ暴飲或ハ酸敗セルモノヲ用フレハ腸胃ヲ害シ或ハ下利ヲ發スルモノナレハ流行ノ際ハ必ス其品種ヲ撰ヒ務テ飲量ヲ節減スルヲ良トス

第十五條 食物ハ新鮮ノ肉類消化シ易キ蔬菜ヲ用ヒ平生ノ慣用ヲ改メサルヲ良トス但良好ノ食物ト雖モ之ヲ過食スレハ亦腸胃ヲ害シ此病ニ感シ易キカ故ニ流行ノ際ハ務テ適度ニ食シ不消化物ヲ避ケ殊ニ不熟ノ果實ヲ食フヘカラス

第十六條 再濕或ハ夜氣ニ胃觸シ或ハ過度勞役等皆此病ニ感シ易キヲ以テ流行ノ際ニハ殊ニ之ヲ慎ムヘシ

第十七條 流行ノ際ニ當テハ感冒下利ヲ豫防センカ爲メ紋羽木綿等ニテ小腹ヲ巻キ務テ適度ノ温暖ニ其身ヲ保持スルヲ良トス

第十八條 流行ノ際能ク此攝生法ヲ守リ腸胃健ナルキハ些少ノ病毒ヲ受クルモ猶ホ其病害ヲ免ル、コナシトセス看護人及ヒ汚穢物死體等ニ直接スルモノ、如キハ尤モ之ニ注意セサルヘカラス

第十九條 凡ソ豫防ハ平日攝生ノ謹嚴ナルヲ至要トス世間往々豫防藥ト稱スル方劑アリト雖モ多クハ無稽ノ考案ニ出テ之ヲ服用スルモ功ナキモノ多シトス

第三項 隔離法

第二十條 虎列刺病ハ患者ニ直接スルモ感染スルノ理ナシト雖モ其吐瀉物ニ汚レタル患者ニ接シ又ハ其汚染セル物品等ニ觸ル、キハ其媒介ニ因リ病毒ヲ傳フ故ニ患者ト健者トヲ隔離スルヲ以テ豫防ノ要法トス

第二十一條 虎列刺病ハ眞症ト類似トシテ論セス醫師診斷シタルキハ直チニ其家ノ門戸ニ病名票ヲ貼附スヘシ但患者治癒又ハ死亡若クハ避病院ニ送致シ其病室ニ消毒法ヲ行ヒタル後チハ即チ其病名票ヲ去ルヘシ

第二十二條 患者ノ吐瀉物ハ之ヲ金屬製成ハ陶製ノ漱盤便器等ニ承ケ(木製ノ器ハ其毒滲浸ノ恐アリトス)毎回消毒法ヲ施シ壺或ハ桶ニ入レ戶外ニ置キ之ニ密蓋ヲナシ運搬夫ニ付シ人家遠隔ノ地ニ搬送セシメ溝渠芥溜田園等ニ投棄スヘカラス且ツ患者ノ入りタル厠園ハ決シテ他人ヲシテ入ラシムヘカラス又初發嘔吐セシ地面等ノ處置ハ第八十一條消毒法

ニ依ルヘシ但吐瀉物等ヲ運搬スルキ日中ハ虎列刺吐瀉物ト表記アル號旗ヲ夜中ハ之ニ換ルニ提燈ヲ以テスヘシ

第二十三條 患者ハ其室ヲ異ニシ看護人ノ外ハ成タケ接近スヘカラス又止ムヲ得サル事故アルノ外他人ト交通ヲ絶ツヘシ但家人ニ要用アリテ來訪スル人アルキハ成タケ戶外ニ於テ之ト應接シ屋内ニ入ラシムヘカラス此時ニ於テハ家人及ヒ來訪人ニ消毒法ヲ行フヲ要セス

第二十四條 家族中ニ於テモ看護人ヲ定メ其他要用アル者ノ外老幼ハ成タケ早ク他家ニ避退セシムヘシ但看護人ハ成タケ其人ヲ更換セサルヲ良トス

第二十五條 病室ニハ不用ノ器具ヲ置クヘカラス

第二十六條 患者若シ死亡スルキハ成タケ其屍傍ニ接近シ又ハ死体ニ沐浴セシムル等ノヲチセサルヲ良トス

第二十七條 患者治癒若クハ死亡シ病室ニ消毒方ヲ行ヒシ後ハ家人其室内ニ起臥スルモ妨ケナシト雖モ若シ之ヲ用ヒサルモ日用ニ差支ナキ家ニ於テハ數日間空室ノマ、窓戶ヲ開放シ大氣ヲ流通セシムヘシ

第二十八條 西洋形船舶航海中ニテ發病者アルキハ其室ヲ異ニスヘシ或ハ之ヲ離ノ方ニ移スモ可ナリ其看護人ノ外交通ヲ絶ツテ猶ホ人家ニ於ルカ如クスヘシ

第二十九條 船舶内ノ病室ニハ看護人ヲ定メテ吐瀉物ヲ承クルヲ第二十二條ノ如クシ航海中ハ毎回海中ニ投棄スヘシ尤モ港灣河湖等ニ於テハ之ヲ投棄スヘカラス必ス最寄ノ地方ニ着シ其地警察官吏或ハ衛生委員ノ指圖ヲ受クヘシ

第三十條 船舶ヨリ患者若クハ死者ノ届ケアルキハ警察官吏衛生委員ニ於テ検査ノ上患者ハ之ヲ隔離シ死者及ヒ汚穢物ハ消毒法ヲ行ヒ第五十四條ヨリ第五十八條マテ依リ處置スヘシ

第三十一條 製造所會社學校旅店等ニ在テ發病シ引取人ナキ者並ニ狹隘不潔ノ地ニ雜居スル者等ニシテ看護消毒法行届カス病毒ノ傳播ヲ防キ難キキハ之ヲ避病院ニ送ルヘシ若シ避病院アラサルキハ適當ノ空屋ニ移シテ之ヲ隔離スヘシ

第三十二條 避病院ノ位置ハ人家ニ接近セス且ツ運搬ニ便ナル地ヲ撰フヘシ然レモ井泉河流ノ近傍或ハ往來多キ路傍等ニ設クヘカラス又監獄墓地火葬場等ノ跡ハ用ヒサルヲ良トス

第三十三條 避病院ヲ新ニ構造スルキハ空氣ノ流通ヲ主トシ善美ヲ要セス其床ヲ高クシ窓戸ヲ闊大ニシ且ツ板壁ヲ用ヒテ洗淨ニ便コスヘシ但板葺苔苔等ハ其一時ノ便ニ任シテ可ナリ

第三十四條 避病院ノ廣狹ハ大約人口千人ニ患者一人ノ割合ヲ以テシ例ヘハ人口六千人ノ町村ナレハ患者六人分ニシテ每人二坪ト見積リ十二坪ノ病室ヲ要スルノ類ナリ尤モ流行

ノ勢ニ因リテハ建坪ヲ增加スルヲ得ルノ餘地ヲ豫メ計畫シ置クヘシ

第三十五條 避病院ノ病室ハ重症輕症及ヒ快復期ノ患者ヲ區別シテ之ヲ分隔シ二坪ニ患者一人ヲ置クヲ常トシ縱令ヒ患者輻湊ストモ一坪ニ一人ノ割合ヨリ狭クスヘカラス但此他醫師詰所事務所看護人休息所等便宜ニ之ヲ設クヘシ

第三十六條 避病院ニハ簡易ノ薰蒸室ヲ設クヘシ其構造ハ凡ソ一二坪許ノ小室ニシテ薰蒸氣ノ漏散セサル様密閉シ得ヘカラス其内ニ竿ヲ架シ或ハ繩ヲ張り衣服等ヲ掛ルニ便ニス其小ナルモノハ尋常ノ戸棚等ヲ以テ之ニ當ツヘシ

第三十七條 避病院ノ門側ニハ輕易ナル風呂ヲ設ケ見舞人等外出ノ時入浴ノ用ニ供スヘシ第三十八條 避病院ニハ別ニ清淨ナル屍室ヲ設ケ患者若シ死亡シタルキハ直チニ此ニ移スヘシ但屍室ハ親族ノ吊者ヲ容ル、カ爲メ其餘地ヲ設クヘシ

第三十九條 人家稀疎ノ村落ニ於テハ必スシモ避病院ヲ設クルヲ要セス若シ相當ノ空屋等アラハ假リニ之ヲ用フヘシ

第四十條 普通病院ニハ決シテ虎列刺患者ヲ入ルヘカラス但別ニ傳染病室ノ設アルモノハ此限ニアラス

第四十一條 避病院ニ用フル看護人ノ員數ハ重症ノ患者二人ニ一人ヲ附シ輕症ノ者ニハ四人ニ一人ヲ附シ其快復ニ趣ク者ニハ六人ニ一人ヲ附スル割合ヲ以便宜斟酌シ晝夜交代セ

シムヘシ但看護人ニハ其表記アル衣服ヲ着セシメ且成タケ其人ヲ交換セシメサルヲ良トス

第四十二條 避病院ニ在ル患者ノ親族又ハ別段ノ交誼アル者看護ヲ爲サントシ望ムルハ之ヲ許スヘシ但其看護人ハ多人數ナラサルヲ要シ且ツ屢々更替スルヲ許サ、ルヘシ

第四十三條 避病院ニアル患者ノ親族又ハ別段ノ交誼アル者ハ其見舞ヲ許スヘシト雖モ室内ニ於テ飲食ヲ嚴禁シ且ツ吐瀉物ニ接觸セサル様注意スヘシ

第四十四條 避病院ニ在ル患者ノ病況危篤ニ至ルキハ速ニ其家ニ通知シ若シ死亡スルキハ入棺セサル前ニ其死體ヲ家族ニ示スヘシ

第四十五條 流行ノ勢猛烈ニ及ヒ其地ノ群集事業ヲ差止ムルキハ先ツ祭禮、劇場、寄席等ヲ差止メ止ムヲ得サル場合ニ至ラサレハ學校、製造所等ヲ差止ムヘカラス又社寺參拜等ノ爲メ多人數旅行スルヲ差止ムルコアルヘシ

第四項 消毒法

第四十六條 虎列刺ノ病毒ハ其吐瀉物ニ舍レリ故ニ吐瀉物及ヒ之ニ汚染スルモノハ嚴ニ消毒法ヲ行フヘシ就中之ヲ燒滅スルヲ以テ最良法トス患者及ヒ其死體ハ直チニ病毒ヲ傳フル者ニ非スト雖モ吐瀉物ニ汚染スルヲ以テ亦病毒汚染物ト同視スヘシ

第四十七條 消毒法ハ其物ニ從テ區別スルコト左ノ如シ

第一 患者及ヒ看護人等消毒法

第四十八條 患者治癒ノ後始テ他人ト交通シ又ハ避病院ヨリ退出ノ節ハ必ス沐浴シ石鹼水ヲ用テ全身ヲ洗ヒ他ノ衣服若クハ消毒法ヲ施シタル衣服ヲ着スヘシ吐瀉物運搬人及ヒ避病院ノ醫師、看護人、死體取扱人等ノ他人ニ接スルキモ亦此法ニ從フヘシ

第四十九條 看護人及ヒ患者死體運搬人又ハ船中ニテ患者ト同席シタル者ノ他人ト交通スルキニハ必ス沐浴更衣スヘシ

第五十條 病家ニ於テ止ムヲ得サル事故アリテ看護人其他患者ニ親接セル者ノ他出スルキハ必ス其身體ヲ洗淨シテ更衣スヘシ

第五十一條 自宅患者ヲ往診セル醫師及ヒ患者ノ家人ニシテ直接セサル者親戚朋友ノ一時見舞タル者等ハ消毒法ヲ行フヲ要セサレハ其家ヲ出ルニ臨テ鹽漱スルヲ良トス但若シ誤テ吐瀉物ノ爲メニ其衣服等ヲ汚シタルキハ稀薄石炭酸水(第二)ヲ噴注シ或ハ沸湯ヲ以テ之ヲ洗ヒ然ル後第六十二條六十三條ニ依リ消毒法ヲ行フヘシ

第二 死体及ヒ排泄物等消毒法

第五十二條 死體ハ充分ニ稀薄石炭酸水(第二)ニ浸シタル單衣若クハ綿布等ヲ以テ之ヲ包ミ成タケ速ニ棺内ニ歛ムヘシ若シ濃厚石炭酸水(第一)ヲ用テ灌腸シ然ル後綿ヲ以テ肛門ヲ塞クコトヲ得ハ最良トス

第五十三條 西洋形船舶航海中ニ死者アルキハ速ニ濃厚石炭酸水(第一)ニ浸シタル單衣若クハ綿布ヲ以テ之ニ包ミ成タケ前條ノ灌腸ヲ行ヒ假ニ棺内ニ斂メ通常屍室或ハ船中適宜ノ場所ヲ見計ヒ此ニ入レ置キ時々濃厚石炭酸水(第一)ヲ灌注スヘシ但陸地ニ著スル上ハ其地方ノ警察官吏衛生委員ニ届出處分スヘシ

第五十四條 死體ハ醫師確認ノ後速ニ火葬セシムヘシ火葬場ナキ地方ハ人家ニ離レタル所ニシテ地質鬆疎ナラサルノ地ヲ撰ヒ簡易ノ火葬場ヲ設ケテ之ヲ燒クヘシ

第五十五條 吐瀉物ハ之ヲ便器漱盤等ニ承ケ之ト同量ノ濃厚石炭酸水(第一)石炭酸若シ缺乏ノ時ニ際シテハ硫酸鐵合劑硫酸鐵合劑、亞硫酸溶液、生石灰等ヲ撰用スヘシ以下之ニ倣ヘ)ヲ灌クヘシ其屋外ニ持出ス手續ハ第二十二條ニ依ルヘシ

第五十六條 避病院及ヒ各病家ヨリ運搬シタル吐瀉物汚穢物ヲ燒却スルニハ其地方ニテ定メ置キタル地質鬆疎ナラサル所ニ適宜ノ穴ヲ掘リ厚ク灰或ハ石灰ヲ穴底ニ敷キ乾キタル藁、鈍屑、落葉、枯草ノ類ニ石炭油ヲ澆キ其上ニ置キ之ニ吐瀉物ヲ投シ再ヒ同前ノ燃料ヲ覆ヒテ火ヲ點スヘシ火勢滅スルキハ更ニ油ヲ注キテ屢々攪挑シ全ク燒盡スルヲ期スヘシ且ツ其汚汁ノ地中ニ滲透セサル様注意スルヲ要ス但燃料及裝置等ハ其地ノ便宜ニ隨フヘシ

第五十七條 患者ノ入りタル廁圍ノ糞汁ハ法ノ如ク燒却スヘキモ若シ大量ニシテ燒却シ難

キモノハ亞硫酸溶液(第十甲)(糞汁ノ二分一)石炭酸末(第四)(糞汁ノ五分一)若シ其缺乏ニ際シテハ生石灰(糞汁ノ二分一)ヲ投シテ汲取り一定ノ所ニ埋却シ其廁圍ニハ稀薄石炭酸水(第二)ヲ注入スヘシ

第五十八條 吐瀉物ノ水分多クシテ燒却シ得サルキ之ヲ埋却スルニハ多量ノ濃厚石炭酸水(第一)若クハ亞硫酸溶液(第十甲)ヲ灌キ一定ノ場所ニ於テ深ク埋却スヘシ但吐瀉物ノ埋却場ハ豫メ井泉河流及ヒ人家道路等ニ接近セサル地ヲ撰定スヘシ

第五十九條 吐瀉物汚穢物ヲ運搬スルニハ其地方ニ於テ豫メ取扱人夫ノ手續ヲ定メ流行ノ間ハ毎日二三回病家ノ吐瀉物汚穢物ヲ取集メ燒却若クハ埋却セシムヘシ尤モ其運器ハ極テ注意シ臭氣ノ洩レサル様(只臭氣ヲ恐ル、ニアラス其毒蒸發シテ空氣ニ混スルヲ恐ル、ナリ)相當ノ器ヲ用ヒ且ツ其汚汁多量ニシテ湧溢ノ恐アルキハ鋸屑、落葉、枯草等ヲ入レテ之レヲ防クヘシ但運器ノ木製ナルモノハ流行終熄ノ後盡ク燒却シ其金屬製及ヒ陶製ノモノハ稀薄石炭酸水(第二)若クハ亞硫酸溶液(第十乙)ヲ以テ洗淨スヘシ

第六十條 食料ニ供スヘキ物品ノ現ニ病毒ニ汚染シタルモノハ勿論病毒侵染ノ嫌ヒアルモノハ都テ之ヲ燒却スヘシ但現ニ病毒ニ汚染セサルモ其汚染ノ疑ヒアルモノハ「サリシル」酸溶液(二百倍)水ニ溶解セサルモノ)ヲ以テ之ヲ洗淨スヘシ

第三 衣服臥具等消毒法

第六十一條 衣服、臥具、蚊帳、疊、蓆等ノ甚シク吐瀉物ニ汚染シタルモノハ之ヲ燒却スヘシ但
船中積荷ノ吐瀉物ニ汚レタルモノモ亦之ニ倣フヘシ

第六十二條 衣服、臥具、蚊帳等吐瀉ニ汚穢スル少クシテ洗濯ニ堪フヘキモノハ之ヲ桶ニ
入レ稀薄石炭酸水(第二)ヲ灌キ浸シ置クヲ二十四時間コシテ更ニ沸湯ヲ注キ四五分時ヲ
經ルノ後水ヲ以テ清淨シ日光ニ曝スヘシ石炭酸等ノ缺乏スルキハ熱湯中ニ入レ一時以上
之ヲ煮沸スヘシ

第六十三條 衣服、臥具、蚊帳等ノ少シク吐瀉物ニ汚染シ洗濯ニ堪ヘサルモノハ其品種ニヨ
リテ亞硫酸瓦斯(第九)若クハ石炭酸蒸氣(第三)ヲ以テ薰蒸シ或ハ熱氣消毒法ヲ行ヒシ後日
光及大氣ニ曝スヘシ

第六十四條 死體ニ著セシ衣服ハ其消毒法ヲ行フヲ第六十一條第六十二條及ヒ第六十三條
ニ同シ

第六十五條 避病院ニ用ヒタル蚊帳ハ其病室ニ在ルヲ久キヲ以テ吐瀉物ニ汚染セサルモノ
ト雖モ都テ之ヲ煮沸シ或ハ熱氣消毒法ヲ施スヘシ

第六十六條 吐瀉物運搬人及ヒ避病院ノ醫師、看護人、死體取扱人等ハ患者及ヒ汚穢物ニ親
接スルヲ久ク若クハ屢次ナルヲ以テ其衣服等ニ消毒法ヲ施スヲ第六十二條第六十三條
ニ同シ但本文ニ掲クル所ノ者日々衣服ヲ更換セハ沸湯中ニ入レ一時以上之ヲ煮沸スルヲ

可トス

第六十七條 看護人及ヒ患者死體運搬人又ハ船中ニテ患者ト同席シタル者ノ衣服、手道具ハ
直ニニ病毒ニ汚染セサルモ稍々病毒浸染ノ疑ヒアルヲ以テ第六十三條ニ依リ消毒法ヲ行
フヘシ

第四 家屋船舶等消毒法

第六十八條 患者及ヒ死體ヲ置キタル室ノ疊蓆類ハ之ヲ柱若クハ壁ニ倚セ懸ケ戸棚等ヲ開
放シ室内ニアリシ諸器具ハ之ヲ排列シ窓戸ヲ密閉シテ六時乃至八時間亞硫酸瓦斯(第九)

ヲ薰シ然ル後窓戸ヲ開キ吐瀉物ニ汚染ノ嫌ヒアル板敷等ハ稀薄石炭酸水(第二)ヲ以テ之
ヲ拭淨シ其他器具ハ石鹼水又ハ沸湯ヲ以テ洗淨シ充分大氣及ヒ日光ニ曝スヘシ避病院ノ
病室及ヒ居室モ亦之ニ倣フヘシ但金銀器書畫其他彩色ヲ施セル物及ヒ絹帛等亞硫酸ノ爲
メニ其色質ヲ變化スルノ恐アルモノハ初メニ之ヲ取除ケ別ニ石炭酸蒸氣(第三)或ハ熱氣
消毒法等ヲ適宜撰用スヘシ

第六十九條 患者アリタル西洋形船舶ハ其處置尋常ノ家屋ニ大異ナシト雖モ下等客室ニ至
テハ衆多ノ乘客積荷ノ間ニ枕籍シ幾ント彼我ノ別ナキカ故ニ若シ其中ニ發病者アルト
ハ滿室ノ乘客積荷手荷物等モ皆病毒ニ汚染シタル者ト看做シ乘客手荷物ハ上陸ノ時充分
ニ消毒法ヲ行ヒ積荷其ハ其儘其室ニ於テ六時乃至八時間亞硫酸瓦斯(第九)或ハ品物ニヨ

リ石炭酸蒸氣(第三)ヲ薫スルノ後ニアラサレハ陸揚スルヲ許サス
第七十條 日本形小船ハ前條ノ方法ヲ斟酌シテ消毒法ヲ行ヒ海水ヲ以テ遍ク船身ヲ洗淨ス
ヘシ但海水モ亦消毒ノ効アルモノトス

第七十一條 避病院其他便宜ニヨリ他ノ家屋ヲ假用セシモノハ其病室ニ供セシ部分并ニ廁
房ニ亞硫酸瓦斯(第九)ヲ薫シ後稀薄石炭酸水(第二)或ハ亞硫酸溶液(第十乙)ヲ注キ石鹼水
ヲ用ヒテ洗淨スヘシ尤モ亞硫酸蒸氣法ノ充分ナルキハ石炭酸水ヲ用フルヲ必要トセス
第七十二條 病室ハ不斷換氣法ニ注意スヘシ是亦多少消毒ノ効アルモノトス

第七十三條 臨時假設ノ避病院ニシテ其保存スヘカラサルモノハ流行終ル後之ヲ取毀ツヘ
シ尤モ其前失ツ汚穢シタル板敷、板壁、及ヒ柱等ハ濃厚石炭酸水(第一)又ハ亞硫酸溶液(第
十甲)ヲ以テ充分ニ洗淨シ數日間開放シ大氣ニ曝スヘシ

第五 什具運搬器等消毒法

第七十四條 吐瀉物ヲ承ケタル嗽盤便器等ハ之ヲ用フル毎ニ稀薄石炭酸水(第二)或ハ亞硫
酸溶液(第十乙)ヲ以テ洗淨スヘシ其吐瀉物ニ汚染シタル紙屑、手拭其他之ニ類スルモノハ
悉皆取集メ第二十二條ニ載セタル壺或ハ桶ニ投シ濃厚石炭酸水(第一)或ハ亞硫酸溶液(第
十甲)ヲ注キ吐瀉物ト共ニ之ヲ運搬セシムヘシ

第七十五條 患者必要ノ手道具ヲ携ヘ避病院ニ入ル者ハ出院ノ時必ス亞硫酸瓦斯(第九)薫

蒸法ヲ行ヒ之ヲ交付スヘシ

第七十六條 患者及ヒ死体若クハ病毒ニ觸レタル物品ヲ運ヒタル舁舟車駕及ヒ運搬器等ハ
稀薄石炭酸水(第二)ヲ灌注シ更ニ石鹼水若クハ沸湯ヲ以テ洗淨スヘシ其舁舟ノ如キハ海
水ヲ以テ洗フモ可ナリ

第七十七條 病室ニ用ヒタル什具ハ總テ稀薄石炭酸水(第二)或ハ亞硫酸溶液(第十乙)ヲ灌キ
然ル後石鹼水又ハ沸湯ニテ洗淨シ乾カスヘシ其洗フヘカラサルモノハ病室ニ消毒法ヲ行
フノ際其内ニ排列シ(濕潤ニ堪フヘキモノハ之ヲ濕スヲ良トス)亞硫酸瓦斯(第九)或ハ石炭
酸蒸氣(第三)ヲ以テ一時間薫蒸スヘシ

第七十八條 書籍、新聞紙ノ類病室ニアリタルモノハ之ヲ緋展シ石炭酸蒸氣(第三)若クハ亞
硫酸瓦斯(第九)ヲ薫蒸スヘシ或ハ熱氣消毒法ヲ行フモ可ナリ

第七十九條 醫術器械及ヒ木製、金屬製、陶製、漆製等ノ諸器ハ總テ稀薄石炭酸水(第二)ヲ以
テ洗フヘシ

第六 廁圍溝渠等消毒法

第八十條 患者ノ入リタル廁圍及ヒ嘔吐シタル地ニハ充分亞硫酸溶液(第十甲)或ハ硫酸鉄
合劑(第五)ヲ注キ其廁圍ノ糞汁ハ速ニ悉皆之ヲ汲取り相當ノ消毒法ヲ行ヒ終ルノ間ハ他人
ノ入ルヲ禁シ其嘔吐シタル地ハ速ニ之ヲ掃除シ其土ヲ更換スヘシ且ツ其糞尿及ヒ嘔吐ノ

穢土ハ人家遠隔ノ地ニ於テ燒却若クハ埋却スヘシ

第八十一條 糞壺及ヒ桶ノ破壞シテ病毒滲漏ノ疑ヒアルモノハ速ニ之ヲ掘除ケ其周圍并ニ底面ノ土モ亦深ク掘取リ濃厚石炭酸水(第一)或ハ亞硫酸溶液(第十甲)ヲ十分ニ灌注シテ人家遠隔ノ地ニ埋却シ其跡ニモ同様ノ消毒藥ヲ注キ更ニ新土ヲ填ムヘシ但其消毒藥ノ量ハ其壺上糞汁ノ多少ニ因リ斟酌スヘシ大抵糞汁五分ノ一乃至三分ノ一ナルヘシ嘔吐物モ亦之ニ準ス

第八十二條 若シ誤テ吐瀉物ヲ溝渠下水等ニ投棄スルコトアルキハ十分ニ亞硫酸溶液(第十甲)或ハ硫酸硫酸鉄合劑(第六)ヲ注キ其淤泥ノ撈ヘ得ヘキモノハ之ヲ撈ヘテ人家遠隔ノ地ニ搬送シテ埋却スヘシ或ハ多量ノ水ヲ灌キテ疏通セシムヘシ但本條ノ如キ場所ニ於テ既ニ病毒ヲ混入スルキハ消毒法モ其功ヲ奏シ難ク終ニ増殖ヲ致サシムヘシ故ニ豫メ戒諭シテ誤テ之ニ投棄シ或ハ陰ニ投棄スル等ノ事ナカラシムルヲ要ス

腸室扶私

腸室扶私(英名泰裴土)ハ從來神經熱、稽留熱、腸熱、傷寒、温疫、等ト稱スルモノ多ク之ニ屬ス而シテ此病ハ時ヲ撰ハス不斷散在トナリ或ハ地方性トナリ或ハ流行性トナリテ發スト雖モ夏月早懸秋涼ノ候ニ於テ最も多ク流行スルモノナリ
此病ノ流行ハ空氣ノ不潔飲料水ノ汚濁食物ノ不良等之カ因トナルモノニシテ其病毒ハ特ニ

患者ノ糞尿ニ由リテ傳播スル者ナリ然レモ其毒發疹室扶私天然痘等ノ如ク揮發性ノモノニ非サルヲ以テ豫防ノ方法モ亦其趣ヲ異ニシ專ラ糞尿ニ注意スルヲ以テ緊要ノ目的ト爲スヘシ

第一項 清潔法

第一條 腸室扶私ノ病毒ハ汚穢ノ地ニ萌動シテ飲料水ニ混シ其毒ヲ傳播セシムルノ例少カラズ蓋シ是等ノ害ハ清潔法ヲ怠リ或ハ排泄物ヲ漫リニ放棄シ或ハ糞尿クハ桶ニ破隙アル等ノ疎漏ヨリ生スルモノニノ厠間ト飲料水トノ注意ハ最も肝要ナリ故ニ厠間、芥溜、溝渠、下水等ノ掃除ヲ忽ニスヘカラス但一處ノ水ヲ飲ム者一時ニ此病ニ罹ルコト多人數ナルキハ直ニ其水ヲ試驗シ不良ナレハ其飲用ヲ禁スヘシ

第二項 攝生法

第二條 此病ハ不潔ノ飲料水若クハ食物等ヨリ來ルモノナルカ故ニ消化シ易キ物ヲ食シ清潔ナル水ヲ飲ムヘシ若シ善良ノ水ヲ得難キハ必ス之ヲ濾過煮沸シテ用フヘシ其他胃寒疲勞ヲ戒ムヘシ

第三項 隔離法

第三條 醫師ノ腸室扶私ト診斷シタルキハ直ニ其家ノ門戸ニ病名票ヲ貼付スヘシ但患者治癒又ハ死亡若クハ避病院ニ送致シ其病室ニ消毒法ヲ行ヒタル後ハ即チ其病名票ヲ去ル

第四條 患者ハ成タケ其室ヲ異ニシ他人ト交通ヲ絶テ看護人ハ年齢四十歳以上ノ者若クハ一回此病ニ罹リシ者ヲ撰フヘシ少壯ノ者ヲ用フヘカラス但航海船中ニ於テ發病者アルキモ本條ニ從ヒ處置スヘシ

第五條 一家ニ數人此病ニ罹ル者アルキハ相當ノ看護人ヲ留メ其他ノモノハ他家ニ避退セシムヘシ

第六條 流行盛ナルニ際シ既ニ避病院ヲ設クルニ至ラハ狹隘不潔ノ地ニ雜居シ隔離行届キ難キモノハ入院セシムヘシ但避病院ノ位置廣狹及ヒ區別法等ハ虎列刺ノ部第三十二條以下第三十八條迄ニ照依シテ之ヲ斟酌スヘシ

第四項 消毒法

第七條 腸室扶私患者ノ瀉下物及ヒ之ニ汚染シタル衣服器具等并ニ其病室、廁圍、便器等ハ盡ク病毒傳播ノ恐アルヲ以テ左ノ區別ニ從ヒ消毒スヘシ

第一 患者及ヒ看護人等消毒法

第八條 患者治癒ノ後始テ他人ト交通シ又久シク此患者ニ親接セル看護人ノ他人ト交通スルキハ沐浴換衣スヘシ

第二 死體及ヒ排泄物等消毒法

第九條 死體ハ速ニ棺内ニ斂メシムヘシ若シ濃厚石炭酸水(第一)ニ浸セル綿ヲ以テ肛門ヲ塞クコトヲ得ハ最良トス

第十條 糞尿ハ之ヲ便器ニ承ケ稀薄石炭酸水(第二)ヲ注キ速ニ人家遠隔ノ地ニ搬送シテ之ヲ埋却スヘシ但埋却ノ地ハ井泉河流ノ近傍ヲ避クヘシ

第三 衣服臥具等消毒法

第十一條 衣服、臥具ノ糞尿ニ汚染シタルモノハ稀薄石炭酸水(第二)ヲ以テ洗淨シ或ハ之ヲ煮沸シテ後石鹼水ヲ以テ洗淨スヘシ

第四 家屋船舶等消毒法

第十二條 患者及ヒ死体ヲ置キタル家屋船舶及ヒ避病院ノ病室屍室ハ亞硫酸瓦斯(第九)ヲ薰シ或ハ石炭酸水(第二)ヲ以テ拭淨スヘシ但室内ハ常ニ注意シテ空氣ヲ流通スヘシ

第五 什具運搬器等消毒法

第十三條 什具運搬器ハ直ニ糞尿ニ汚穢スルニ非サレハ消毒ヲ要セサレ其汚穢セルモノハ亞硫酸溶液(第十)ヲ以テ洗滌スヘシ或ハ其品種ニヨリ熱湯ヲ注キテ後石鹼水ヲ以テ洗淨スヘシ但木製ノ便器ハ其用ヲ終ルノ後之ヲ燒却スヘシ

第六 廁圍溝渠等消毒法

第十四條 若シ誤テ患者ノ糞尿ヲ廁圍溝渠ニ混入セシキハ硫酸鉄合劑(第五)ヲ注キテ之ヲ

汲取リ人家遠隔ノ地ニ搬送シテ埋却スヘシ溝渠ハ「コロール」石灰ヲ撒布シ水ヲ以テ疏通セシムベシ

赤痢

赤痢ハ一種ノ傳染病ニシテ其病毒地中ニ萌動シ人體ヲ侵スルハ必ス大腸ニ着キテ下利ヲ發シルモノナリ然シテ此患者ノ瀉下スル所ノ糞尿ハ其病毒ヲ含有シテ水中地中或ハ氣中ニ散漫シ廣シ他人ニ浸染スルニ至ルモノトス

此病毒ノ發生ヲ助ケルハ濕熱ト濕濡トニ因ルモノナレハ熱帶地方ニ於テハ殆ント周歲絶ルコトナク且ツ多クハ惡性ナリ又暖帶地方ニ於テハ季夏初秋ノ候ニ行ハル、ヲ以テ常トス又土地ノ景況ニ從テ一地方ニ限リ流行スルアリ或ハ惡性ニシテ廣ク流行スルコトアリ此ノ如キ時ニ臨テハ務テ豫防法ニ注意シ其宜キヲ得ハ良性ノモノハ之ヲ撲滅スヘク惡性ノモノハ之ヲシテ良性ニ至ラシムルヲ得ヘシ故ニ流行ニ際シテ豫防ノ法ヲ忽ニスヘカラス

第一項 清潔法

第一條 此病毒ハ汚濕ノ土地ニ萌動シテ氣中或ハ水中ニ濕シ終ニ人體ヲ侵襲スルモノナルカ故ニ厠園、溝渠、芥溜、下水及ヒ魚市、屠場等ノ不潔ナル場所ハ勿論殊ニ監獄製造所等ノ最モ掃除ヲ嚴ニスヘシ但一處ノ水ヲ飲ム者一時ニ此病ニ罹ルコト多人數ナルキハ直チニ其水ヲ試験シ不良ナレハ其飲用ヲ禁スヘシ且清潔法ノ細目ハ能ク虎列刺ノ部ヲ參考シテ之

ヲ斟酌スヘシ

第二項 攝生法

第二條 此病ハ老少ノ別ナク皆之ニ感スルノ素因アルカ如シト雖屢就中一回之ヲ患ヘシ者及ヒ不潔ノ地所ニ住居スル者不良ノ水ヲ飲用スル者及ヒ露臥、夜行、過度ノ勞力等都テ不攝生ノ者ハ之ニ感シ易シトス又流行ノ際ニ當テハ下利秘結モ亦此病ノ誘因トナル故ニ宜ク之ニ注意シテ攝生ノ法ヲ守ルヘシ特ニ此病ニ罹リシ者快復ニ向ハントスルキハ更ニ飲食ノ攝生ヲ嚴ニスヘシ些少ノ不消化物ヲ食フモ亦此病ノ再發ヲ促スノ恐アレハナリ

第三項 隔離法

第三條 此病毒ハ專ラ其瀉下物ニ在ルヲ以テ之ニ汚染セル衣服、便器、醫術器械等ハ勿論其他ノモノモ亦皆傳播ノ媒介トナル故ニ患者ヲ隔離スルヲ以テ豫防ノ第一要法トス其惡性ノモノハ最モ此注意ヲ忽ニスヘカラス

第四條 醫師ノ赤痢ト診斷シタル時ハ直チニ其家ノ門戸ニ病名票ヲ貼付スヘシ但患者治癒

又ハ死亡若クハ避病院ニ送致シ其病室ニ消毒法ヲ行ヒタル後ハ即チ其病名票ヲ去ルヘシ

第五條 患者ハ其室ヲ異ニシ看護人ノ外ハ成タケ之ニ接近スヘカラス又老幼等ハ速ニ他家ニ避退セシムヘシ

第六條 若シ一家ニ數人此病ニ罹ル者アルキハ看護人ヲ留メ其他ノモノハ他家ニ避退セシ

第七條 患者ハ必ス他人ト厠間、便器等ヲ共用セシムヘカラス其瀉下スル所ノ糞尿ハ成タケ之ヲ便器ニ承ケ速ニ消毒法ヲ行ヒ之ヲ人家遠隔ノ地ニ搬送シテ燒却スヘシ但便宜ハ成タケ金屬製或ハ陶製等ニシテ蓋アルモノヲ良トス

第八條 患者治癒若クハ死亡ノ後ト雖モ病室ニ消毒法ヲ行フニアラサレハ其中ニ起臥スヘカラス

第九條 航海船中ニ患者アルキハ看護人ヲ定メ便器ヲ以テ其瀉下物ヲ承ケ毎回必ス海中ニ投棄スヘシ但港灣及ヒ河湖等ニ於テハ瀉下物ヲ投棄スヘカラス最寄陸地ニ於テ之ヲ燒却スヘシ

第十條 避病院ノ位置廣狹及ヒ區別法ハ虎列刺ノ部第三十二條以下第三十八條迄ニ照依シテ之ヲ斟酌スヘシ

第十一條 狹隘不潔ノ住居若クハ製造所、會社、學校、旅店等ニ於テ發病スル者ハ成タケ避病院ニ送致スヘシ

第十二條 避病院看護人ノ分配、來訪人ノ處置等ハ虎列刺ノ部第四十一條ヨリ第四十四條迄ニ照依シテ之ヲ斟酌スヘシ

第十三條 普通病院アル地方ニ於テハ院內ヲ區隔シ避病室トナシ患者ヲ入ルヘシ又人家竊

疎ノ村落ニ於テハ相當ノ空屋ヲ用フルモ可ナリ

第四項 消毒法

第十四條 患者ノ瀉下物及ヒ之ニ汚染セル衣服、臥具、等并ニ病室、厠間、便器等ハ盡ク病毒傳播ノ恐アルヲ以テ左ノ區別ニ從ヒ消毒スヘシ

第一 患者及ヒ看護人等消毒法

第十五條 患者治癒ノ後始テ他人ト交通シ又ハ避病院ヨリ退出ノ節ハ必ス沐浴シ石鹼水ヲ用テ全身ヲ洗ヒ他ノ衣服若クハ消毒法ヲ施セシ衣服ヲ着スヘシ瀉下物運搬人及ヒ避病院ノ醫師、看護人、死體取扱人等ノ他人ニ接スルキモ亦此法ニ從フヘシ

第二 看護人及ヒ患者死體運搬人ノ他人ト交通スルキモハ必ス沐浴更衣スヘシ

第二 死體及ヒ排泄物等消毒法

第十七條 死體ハ充分ニ稀薄石炭酸水(第二)ニ浸シタル單衣若クハ綿布等ヲ以テ之ヲ包ミ成タケ速ニ棺内ニ歛ムヘシ若シ濃厚石炭酸水(第一)ヲ用テ灌腸シ然ル後綿ヲ以テ肛門ヲ塞クヲ得ハ最良トス但此患者ノ死體ハ最モ腐敗シ易キヲ以テ速ニ棺内ニ歛メ且成タケ速ニ之ヲ火葬若クハ埋葬セシムヘシ

第十八條 便器ニ承ケタル瀉下物ハ濃厚石炭酸水(第一)或ハ硫酸鉄合劑(第五)硫酸硫酸鉄合劑(第六)亞硫酸溶液(第十甲)等ヲ混和シ屋外ニ持出シ壺或ハ桶ニ入レテ密蓋シ人家遠隔ノ

地ニ搬送シテ燒却スヘシ其燒却法ハ虎列刺ノ部第五十六條ヲ參照スヘシ
第十九條 甚シク瀉下物ニ汚染シタル紙及ヒ綿布等ハ悉皆取集メ之ヲ燒却スヘシ

第三 衣服臥具等消毒法

第二十條 衣服、臥具、蚊帳、疊、蓆等ノ甚シク瀉下物ニ汚染シタルモノハ之ヲ燒却スヘシ其汚穢スル少ナクシテ洗濯シ得ヘキモノハ之ヲ桶ニ入レ稀薄石炭酸水(第二)ヲ澀キ浸シ置クコト二十四時間ニシテ更ニ沸湯ヲ注キ四五分時ヲ經ルノ後水ヲ以テ洗淨シ日光ニ曝スヘシ若シ石炭酸ノ缺乏スルキハ熱湯中ニ入レ一時以上之ヲ煮沸スヘシ

第二十一條 其少ク瀉下物ニ汚染シ洗濯ス可ラサル者ハ其品種ニヨリ亞硫酸瓦斯(第九)若クハ石炭酸蒸氣(第三)ヲ以テ薰蒸シ或ハ熱氣消毒法ヲ行ヒシ後日光及ヒ大氣ニ曝スヘシ

第二十二條 死體ニ着セシ衣服ノ消毒法ハ前二條ニヨリ之ヲ施スヘシ

第二十三條 瀉下物運搬人及ヒ避病院ノ醫師、看護人、死体取扱人等ハ患者及ヒ汚穢物ヲ久シク觸接セルヲ以テ其衣服等ニ消毒法ヲ施スコト第二十條第二十一條ニ依ルヘシ但日々衣服ヲ更換スル者ハ沸湯ニ入レ一時以上之ヲ煮沸スルヲ以テ足レリトス

第二十四條 看護人及ヒ患者死體運搬人ノ衣服、手道具、等直チニ病毒ニ汚染セサルモ稍々浸染ノ疑アルモノハ石炭酸蒸氣(第三)或ハ亞硫酸瓦斯(第九)ヲ以テ薰蒸シ日光及ヒ大氣ニ曝スヘシ

第四 家屋船舶等消毒法

第二十五條 患者及ヒ死體ヲ置キタル室ノ疊、蓆類ハ之ヲ柱若クハ壁ニ倚セ掛ケ戸棚等ヲ開放シ室内ニアリシ諸器具ハ之ヲ排列シ窓戶ヲ密閉シテ六時乃至八時間亞硫酸瓦斯(第九)ヲ薰シ然ル後窓戶ヲ開キ病毒附着ノ恐アル板敷等ハ稀薄石炭酸水(第二)ヲ撒布シ更ニ之ヲ拭淨シ其他器具ハ石鹼水又ハ沸湯ヲ以テ洗淨シ充分大氣及ヒ日光ニ曝スヘシ避病院ノ病室及ヒ屍室モ亦之ニ倣フヘシ但亞硫酸ノ爲メ其色質ヲ變化スルノ恐アルモノハ石炭酸蒸氣(第三)或ハ熱氣消毒法等ヲ撰用スヘシ輕症痲病ノ如キハ必スシモ本條ノ處置ヲ要セズ醋水若クハ「コロール」水ニテ室内ヲ拭淨スルヲ以テ足レリトス

第二十六條 患者アリタル船室ノ消毒法モ亦前條ニ同シ

第二十七條 普通病院ニシテ區隔セシ病室及ヒ一時假用セシ家屋等ノ消毒法モ亦前條ニ同シ但病室ハ數多ノ患者交々此内ニ入ルヲ以テ悪性ノ痲病ナラサルモ尙ホ前條ノ消毒法ヲ用フヘシ

第五 什具運搬器等消毒法

第二十八條 便器ハ之ヲ用フル毎ニ稀薄石炭酸水(第二)亞硫酸溶液(第十乙)ヲ以テ洗滌スヘシ

第二十九條 患者及ヒ死體若クハ瀉下物ニ汚染シタル物品ヲ運ヒタル諸器ハ稀薄石炭酸水

(第二)ヲ灌注シ更ニ石鹼水若クハ沸湯ヲ以テ洗滌スヘシ
第三十條 病室内ニ用ヒタル什具及ヒ醫用器械等ハ稀薄石炭酸水(第二)或ハ亞硫酸溶液(第十乙)ヲ注キ然ル後沸湯ニテ洗淨スヘシ

第六 厠圍溝渠等消毒法

第三十一條 患者ノ入りタル厠圍ハ他人ノ入ルヲ禁シ亞硫酸溶液(第十甲)或ハ硫酸鐵合劑(第五)ヲ注キ其瀉下物ハ速ニ之ヲ汲取り人家遠隔ノ地ニ搬送スヘシ而シテ其糞壺ニハ復タ同様ノ消毒法ヲ行フヘシ

第三十二條 糞壺及ヒ桶ノ破壊シテ病毒滲漏ノ疑アルモノハ之ヲ掘除ケ其周圍ノ土ヲ掘取リ濃厚石炭酸水(第一)或ハ亞硫酸溶液(第十甲)ヲ充分ニ灌注シ人家遠隔ノ地ニ搬送シテ埋却スヘシ但消毒藥ノ量ハ其壺中糞量五分一乃至三分一ニナルヘシ

第三十三條 若シ誤テ吐瀉物ヲ溝渠下水等ニ投棄スルコトアルキハ充分ニ亞硫酸溶液(第十甲)或ハ硫酸鐵合劑(第六)ヲ注キ其淤泥ノ撈ヘ得ヘキモノハ之ヲ撈ヘテ人家遠隔ノ地ニ搬送シテ埋却スヘシ或ハ多量ノ水ヲ灌キテ疎通セシムヘシ但本條ノ如キ場所ニ於テ既ニ病毒ヲ混入スルキハ消毒法モ其功ヲ奏シ難ク終ニ増殖ヲ致サシムヘシ故ニ豫メ戒諭シテ誤テ之ニ投棄シ或ハ陰ニ投棄スル等ノ事ナカラシムルヲ要ス

實布埤利亞

實布埤利亞ハ一種ノ猛劇ナル傳染病ニシテ其毒ハ患者ノ痰唾涕汗等ニ舍トリ又呼出スル所ノ空氣モ其毒ヲ包含スルヲ以テ之ニ觸ル、時ハ老少ニ論ナク皆之ニ感スルモノナリ而シテ幼稚ノ者ハ之ニ罹ルコト最モ多クシテ且ツ危險ナリトス抑々此病毒ハ其發生時季ヲ擇ハス又風土ニ關涉スルコトナク不斷散在スルコトアリ又一時ニ廣ク流行スルコトアリ此症ハ必ス咽喉ニ發スルモノニシテ其部ノ壞爛ヲ致シ甚シキモノハ須臾ニシテ斃ル故ニ從來喉風、喉痹、馬痺風、纏喉風、咽氣トフ唱ルモノ、中亦往々之レ有リ此病ハ患者ニ觸接セサルモ尙ホ感染ノ恐アルモノニシテ且ツ其毒久ク消滅セサルカ故ニ隔離消毒ノ方法ヲ忽ニスヘカラス

第一項 清潔法

第一條 此病流行ノ際ハ務テ一般清潔法ニ注意シ既ニ發病スルキハ其室内ノ掃除ヲ怠ルヘカラス家屋、衣服等清潔ニシテ且ツ隔離法充分ナルキハ廣ク流行ニ至ラスシテ消熄スルヲ得ヘシ

第二項 攝生法

第二條 此病ハ特ニ咽喉ヲ侵スモノニシテ既ニ些少ノ咽喉炎アルモノハ自カラ侵襲ヲ被リ易シ故ニ專ラ口内、喉頭、氣管等ノ炎症ヲ誘發スヘキ事件ヲ戒メ常ニ合漱スルヲ良トス但シ其誘發スヘキ事件トハ頸圍ヲ温保セシモノ驟カニ寒冷ニ胃觸シ或ハ苛烈ノ飲食料ヲ用ヒ或ハ高談放歌シ或ハ幼稚ヲシテ頻ニ號泣セシメ及ヒ小學校ニ於テ妄ニ高聲ヲ發シ讀書唱

歌セシムル等ニシテ皆宜ク之ヲ戒シムヘシ

第三項 隔離法

第三條 醫師實布瑛利亞ト診断スルキハ其家ノ門戸ニ病名票ヲ貼付スヘシ但患者治癒或死亡若クハ避病院ニ送致シ其病室ニ消毒法ヲ行ヒタル後ハ即チ其病名票ヲ去ルヘシ

第四條 此病ハ患者ニ接觸シ或ハ患者ノ痰唾ニ汚染セル物品若クハ室内ノ空氣ヨリ傳染スルヲ以テ患者ハ速ニ之ヲ隔離シ看護人ノ外ハ漫ニ接近セシム可ラス殊ニ小兒ヲ遠サクヘシ但室内ノ空氣ハ常ニ清鮮ナラシムルヲ要ス

第五條 病兒ハ健兒ト共ニ遊戯セシムヘカラス又學校等ニ行カシムヘカラス

第六條 病室内ニハ不用ノ衣服及ヒ器具ヲ置クヘカラス

第七條 此患者ノ用ナル所ノ飲食器及ヒ玩具等ハ他人ト共用スヘカラス

第八條 若シ其流行ノ勢ヒ盛ニシテ避病院ヲ要スルコトアルキハ普通病院ヲ區隔シ或ハ相當ノ室屋ヲ以テ之ニ充ル等其便宜ニ任スヘシ

第九條 避病院ヲ設ルキハ別ニ清淨ナル屍室ヲ設ケ患者死亡シタルキ之ニ移スヘシ但屍室ハ親族ノ吊者ヲ入ルカ爲メ豫メ其餘地ヲ設クヘシ

第十條 避病院ニ在ル患者ノ親戚又ハ別段ノ交誼アル者看護ヲ爲サンコトヲ望ムキハ之ヲ許スヘシ但屢々交替スルハ許スヘカラス

第四項 消毒法

第十一條 此病毒ハ患者ノ痰唾及ヒ呼氣或ハ涕汁等皆之カ傳送物ナリ故ニ此等ノ排泄物ニ汚染シタル物ハ必ス消毒法ヲ行フヘキモノトス

第十二條 消毒法ハ其物ニ從テ區別スルコト左ノ如シ

第一 患者及ヒ看護人等消毒法

第十三條 患者治療ノ後他人ト交通シ又ハ避病院ヨリ退出ノ節ハ必ス沐浴シ石鹼水ヲ用テ全身ヲ洗ヒ他ノ衣服若クハ消毒法ヲ施シタル衣服ヲ著スヘシ看護人及ヒ避病院ノ醫師看護人死体取扱人等ノ他人ニ接スルキモ亦此法ニ從フヘシ

第十四條 自宅患者ヲ往診セル醫師及ヒ患者ノ家人ニシテ直接セサル者親戚朋友ノ一時見舞タル者等其室ヲ出ルキハ必ス盥漱スヘシ

第二 死體及ヒ排泄物等消毒法

第十五條 死體ハ醫師確認ノ後速ニ棺内ニ斂メシムヘシ若シ濃厚石炭酸水(第一)ニ浸シタル綿ヲ以テ口鼻ヲ栓塞スルコトヲ得ハ最良トス但死體ハ成クケ火葬スルヲ良トス

第十六條 痰唾及ヒ涕汁等ヲ拭ヒタル手巾及ヒ紙、綿布ノ類ハ悉皆取集メ之ヲ燒却スヘシ但水分利多ニシテ燒盡シ難キキハ稀薄石炭酸水(第二)ヲ注キ人家遠隔ノ地ニ搬送シテ埋却スヘシ

第三 衣服臥具等消毒法

第十七條 衣服、臥具ノ甚シク汚穢シタルモノハ之ヲ燒却スルヲ良トス其儘ニ穢レタルモノハ稀薄石炭酸水(第二)ヲ注キ浸シ置クヲ二十四時間ニシテ更ニ沸湯ヲ注キ且ツ洗滌シ日光ニ曝スヘシ或ハ亞硫酸瓦斯(第九)ヲ以テ薰蒸セシ後日光及ヒ大氣ニ曝スヘシ

第四 家屋船舶等消毒法

第十八條 此病毒ハ極テ頑強ニシテ善ク粗糙ナル物ニ附着スルカ故ニ最モ注意シテ下條ノ消毒法ヲ充分ニ行フヘシ

第十九條 患者及ヒ死體ヲ置タル病室ノ疊、蓆、類ハ之ヲ柱ニ倚セ掛ケ戸棚等ヲ開放シ窓戸ヲ密閉シテ六時乃至八時間亞硫酸瓦斯(第九)ヲ薰シ然ル後窓戸ヲ開キ疊、蓆、壁、障等ニハ更ニ稀薄石炭酸水(第二)ヲ撒布シ或ハ之ヲ以テ拭淨シ其他棚架及ヒ板敷等ハ石鹼水又ハ沸湯ヲ以テ洗淨シ充分大氣及ヒ日光ニ曝スヘシ避病院ノ病室、屍室及ヒ普通病院ヲ區隔セシ病室又ハ臨時假用セル家屋モ亦之ニ倣フヘシ但亞硫酸ノ爲メニ其色質ヲ變化スルノ恐アルモノハ石炭酸蒸氣(第三)或ハ熱氣消毒法等ヲ撰用スヘシ

第五 什具運搬器等消毒法

第二十條 病室ニ用ヒタル什具飲食器及ヒ玩具等ノ甚シク汚穢シタルモノハ之ヲ燒却スヘシ其燒却スヘカラサルモノハ稀薄石炭酸水(第二)或ハ亞硫酸溶液(第十甲)ヲ灌キ然ル後石

鹼水又ハ沸湯ニテ洗淨スヘシ其洗フヘカラサルモノハ病室ニ消毒法ヲ行フノ際其内ニ排列シ(濕潤ニ堪フヘキモノ)ハ之ヲ濕ヌヲ良トス亞硫酸瓦斯(第九)或ハ石炭酸蒸氣(第三)ニテ一時間薰蒸スヘシ然ラサレハ室外へ出スヘカラス

第二十一條 患者ノ玩弄セシ圖書書籍ノ類ハ之ヲ播展シ石炭酸蒸氣(第三)或ハ亞硫酸瓦斯(第九)ヲ薰蒸スヘシ

第二十二條 患者及ヒ死體ヲ運搬セシ器具等ハ稀薄石炭酸水(第二)ヲ灌注シ更ニ石鹼水若クハ沸湯ヲ以テ洗淨スヘシ其貯舟ノ如キハ海水ヲ以テ洗フモ可ナリ

第二十三條 醫術器械等ノ木製及ヒ金屬製ニテ病毒ニ接觸シタルモノ例ヘハ壓舌鏡ノ如キハ總テ稀薄石炭酸水(第二)ヲ以テ洗フヘシ

發疹室扶私

發疹室扶私(英名泰扶私)ハ特異ノ揮發性傳染病ニシテ飢饉熱、軍陣疫、囚獄熱等ノ稱アリ從來腐敗熱、神經熱、發斑熱、温疫、傷寒ト唱ヘシモノ、中ニモ亦此病アルヲ多シ其病タルヤ地方ヲ撰ハス氣候ニ關セス流行スルト雖モ多クハ衆人群集大氣流通ノ不佳ナル所ニ萌動シ衣服身體ノ不潔或ハ飲食ノ不良不足及ヒ過度ノ勞力、露臥、夜行、其他身體ヲ衰弱セシムル事項ヲ誘因トシ傳染蔓延スルモノナリ其流行スルコト及テハ貴賤老幼ノ別ナシ其誘因アルカ或ハ隔離法ノ行届サルヨリ倍々傳染ノ勢ヲ盛ニシ動モスレハ年ヲ亘リ消滅セサルコトアリ故ニ此

病ノ豫防法ハ最モ忽ニスヘカラスルモノトス

第一項 清潔法

第一條 發疹室扶私ノ病毒ハ不潔、狹隘、空氣ノ汚濁ヨリ生スルモノナレハ其發現スルニ當テ囚獄、兵營及ヒ製造所、貧院、棄兒院其他群集雜居稠密ノ場所ハ勿論一般ノ家屋タリモ掃除ニ怠ラス務テ清潔ニシテ且ツ空氣ヲ疏通セシムヘシ最モ其身體ニ切ナル清潔法ヲ至要トシ日々沐浴シ衣服ノ洗濯ヲ怠ルヘカラス殊ニ病毒ノ發生ヲ助クヘキ一切ノ汚穢物即チ廁間、芥溜、溝渠等ノ掃除ニ注意ヲ加フヘシ

第二條 避病院病室ニ於テ用フル所ノ臥具ハ無色若クハ淡色ノモノヲ要スヘシ其汚染ノ見易キカ爲メナリ自宅療養ノ者モ亦同様ノ注意ヲ要スヘシ

第二項 攝生法

第三條 此病ニ感スルノ素因ハ各人多クハ之ヲ有スト雖モ就中飢饉ノ窮民、軍陣ノ兵卒、監獄ノ囚徒等ノ如キハ其居處及ヒ攝生ノ不良ナルヨリ此病ニ罹ルモノ多シトス夫レ飢饉ノ時ニ當テハ攝生ノ事皆其宜キヲ得スト雖モ其最モ甚シキハ食物ノ不足ト不良トニアリ故ニ衛生官吏ハ務テ其食品中成ケ滋養分多キモノヲ撰ヒ有害ノ物ヲ指示シテ之ヲ避ケシムヘシ

第四條 兵卒ノ軍陣ニ在ルモ固ヨリ攝生ノ方ヲ講スルニ違ナカルヘシト雖モ若シ一人發

病スルモ直チニ全軍ニ波及スルノ虞アルヲ以テ成ルタケ無用ノ露臥過勞ヲ慎ミ且ツ飲料ノ良否ニ注意ヲ加フヘシ囚獄、懲役場ノ如キハ流行ノ際特ニ空氣ノ流通及ヒ其食物ニ注意ヲ加ヘ工役等モ過度ナラシメサルヲ要ス一旦病毒ノ蔓延スルニ至テハ高貴豪富ノ人ト雖モ猶其傳染ヲ免ル、能ハス是各人其素因アルヲ證スルニ足ル故ニ此時ニ當テハ務テ身體ノ溫度ヲ適宜ニ保持シ飲食ヲ攝シテ過度ノ勞力ヲ爲スヘカラス且ツ夜氣、風雨等ノ感冒及ヒ身體ヲ衰弱セシムルノ諸件ヲ戒ムヘシ

第三項 隔離法

第五條 醫師發疹室扶私ト診斷シタルモ直チニ其家ノ門戸ニ病名票ヲ貼付スヘシ但患者治癒又ハ死亡若クハ避病院ニ送致シ其室ニ消毒法ヲ行ヒタル後ハ即チ其病名票ヲ去ルヘシ

第六條 發疹室扶私ハ其毒揮發性ニシテ患者ノ皮膚、蒸發氣、呼氣ヨリ發スルモノナレハ直チ患者ニ接觸セサルモ尙ホ之ヲ感受スルコトアリ故ニ患者ノ身體ヲ以テ皆病毒ナリト看做スヘシ又患者數名ヲ狹隘ノ一室ニ入ルモハ病毒稠厚トナリ感染ノ勢益々烈ク此室内ニ入ルモノ忽チ其病害ヲ受クルノ恐アリ故ニ患者ハ速ニ之ヲ隔離シ且相當ノ廣室ニ移サ、ルヘカラス

第七條 病室ハ適宜ニ窓戸ヲ開キ換氣法ニ注意シ常ニ其内ノ空氣ヲ清鮮ナラシメ看護人ノ

外必ス接近セシムヘカラス

第八條 家族中ニ於テモ看護人ヲ定メ止ムヲ得サル事故アルノ外他人ト交通ヲ絶チ又老幼等ハ成クケ速ニ他家ヘ避退セシムヘシ否ラサレハ窗ニ其害ヲ受ルノミナラス之カ媒介トナリ大ニ傳播スルノ恐アレハナリ但家人ト雖モ要用アルノ外其室内ニ入ルヘカラス若シ外人ノ要用アリテ來ルキハ戶外ニ於テ之ヲ辨スヘシ且ツ看護人ハ成クケ更換スヘカラス是レ其揮發毒ノ衣服等ニ附着シテ廣ク他人ニ傳染スレハナリ

第九條 病室内ニハ不用ノ器具ヲ置クヘカラス殊ニ毛布ノ類ハ其病毒ヲ包含シ易キカ故ニ必要ノ外決シテ之ヲ置クヘカラス

第十條 此病ハ死体ヨリモ尙ホ其病毒ヲ發生シ以テ感染セシムルノ例少ナカラス故ニ死体ニハ速ニ消毒法ヲ行フヘシ死体ニ沐浴セシメ或屍傍ニ接近スル等ノコトハ決シテ爲スヘカラス

第十一條 患者治癒死亡ノ後ハ病室ヘ消毒法ヲ行ヒ數週間窓戶ヲ開放シ風氣ヲ流通スヘシ蓋シ消毒ノ後ト雖モ即チ室内ニ起臥スルキハ傳染ノ恐ナキコトアラサルカ故ナリ

第十二條 船舶中ニ此病ヲ發スル者アルキハ速ニ其室ヲ異ニシ看護人ノ外交通ヲ絶ツコト尙ホ人家ニ於ルカ如クスヘシ但此病ハ動モスレハ衆人群集セル船室ニ發シ又船中飲食ノ不食不足等其素因トナルカ故ニ若シ患者アラハ速ニ之ヲ隔離シ室内ノ清潔法ニ注意スヘシ

第十三條 製造所、會社、學校、旅店等其他衆人群集ノ處ニ於テ發病セシ者アラハ成クケ速ニ之ヲ避病院ニ送ルコト良トス若シ避病院ナク他ニ相當ノ空屋アラハ直チニ此ニ送致スヘシ然レモ其發病セシ所ノ室廣潤ニシテ且ツ他人ト充分ニ隔離スルヲ得ハ必シモ他ニ送ルヲ要セサルヘシ

第十四條 避病院ノ位置ハ人家ニ接近セス且ツ恒風ノ上ニアラサル地ヲ撰ヒ必ス往來繁多ノ路傍等ニ置クヘカラス但其門前ニ高ク病名標旗ヲ掲クヘシ

第十五條 避病院ノ建築ハ簡易ヲ旨トシ善美ヲ要セス是レ流行終熄ノ後燒却スルヲ良トスレハナリ

第十六條 避病院ノ病室ハ最モ闊大ナルヲ要スル故ニ患者一人ニ二坪半ト見積リ其人數ノ概計ハ虎列刺第三十四條ニ載セタル割合ニ從ヒ之ヲ設クヘシ其他醫師詰所、事務所、看護人休息所並ニ簡易ニ葦蒸等ヲ設クヘシ(虎列刺第三十六條參照)

第十七條 避病院ノ門側ニ輕易ナル風呂ヲ置キ看護人、見舞人等退出ノ時必ス之ニ浴セシムルヲ良トス又病室ハ空氣ヲ流通セシメンカ爲メ窓戶ヲ開キ冬時ハ暖爐ヲ置キ其溫度ヲ適宜ニシテ空氣ノ代謝ヲ助クヘシ但患者退院若シハ死亡スルノ後ハ毎回其病室内ニ消毒法ヲ行フヘシ

第十八條 避病院ニハ清淨ナル屍室ヲ設ク患者若シ死亡シタルキハ直チニ之ニ遷シ病室ニ

留置クヘカラス但其屍室ニハ親族ノ吊者ヲ入ルカ爲メ其餘地ヲ設クヘシ其吊者ハ成タケ速ニ來ルヘキ手續ヲ爲スヲ要ス此病ハ死體モ亦發毒ヲ逞フスルモノナレハ必ス久ク留置クヘカラス

第十九條 人家稀疎ノ村落ニ於テハ必スシモ避病院ヲ要セス若シ相當ノ空屋アラハ之ヲ假用シ或ハ苦苜等ノ屋舎ヲ假設スルモ可ナリ

第二十條 尋常ノ病院ニハ決シテ此患者ヲ入ルヘカラス若シ院内ニ從來傳染病室ノ設アリテ充分ニ隔離法消毒法ヲ行ヒ得ヘキノ目的アルモノハ入院ヲ許スヘシト雖モ尋常ノ病院ヲ區隔シ之ヲ用フヘカラス

第二十一條 避病院看護人ノ員數ハ重症ノ患者ニハ二人ニ一人ヲ附シ輕症ノ者ニハ四人ニ一人ヲ附シ其快復ニ趣ク者ニハ六人ニ一人ヲ附スル割合ヲ以テ便宜斟酌シ且ツ晝夜交代セシムヘシ但看護人ニハ其表記アル衣服ヲ着セシメ且ツ成タケ其人ヲ更換セシムヘカラス

第二十二條 避病院ニ在ル患者ノ親族又ハ別段ノ交誼アル者看護ヲ爲サンコトヲ望ムルハ之ヲ許スヘシ但其看護人ハ多人數ナラサルヲ要シ且ツ屢々更替ズルヲ許スヘカラス

第二十三條 避病院ニ携ヘ來リシ衣類手道具等ハ別室ニ置クヲ良トス

第二十四條 患者ノ親族又ハ別段ノ交誼アル者來訪スルモ成タケ室内ニ入ルヲ許サ、ルヲ良トス

良トス

第二十五條 此病ハ揮發性ニシテ一時ニ衆人ヲ侵シ若シ一人發病スルキハ其衣服等ニ附着セル病毒忽チ傳播シ大ニ流行ノ媒介トナルヲ以テ流行ノ際ニハ成タケ衆人群集スルノ事業ヲ差止メ且ツ社寺參拜等ノ爲メ多人數旅行スルヲ差止ルコトアルヘシ

第四項 消毒法

第二十六條 此病毒ハ患者及ヒ死者ノ身体ヨリ發シテ衣服 臥具、器具ハ勿論居室ノ疊、蓆、屏障等ニ至ルマテ盡ク附着シテ其病毒久ク潛匿スルモノナレハ病體及ヒ死體ニ近接セルモノハ都テ病毒ニ同視シ消毒法ヲ行フコトヲ要ス

第二十七條 消毒法ハ其物ニ從テ區別スルコト左ノ如シ

第一 患者及ヒ看護人等消毒法

第二十八條 患者治癒ノ後始テ他人ト交通シ又ハ避病院ヨリ退出ノ節等ハ必ス沐浴シ石鹼水ヲ以テ全身ヲ洗ヒ他ノ衣服若クハ消毒法ヲ施シタル衣服ヲ着スヘシ看護人及ヒ患者死體運搬人並ニ避病院ノ醫師死體取扱人及ヒ船中ニテ患者ト同席セシ者等他人ト交通スル時モ亦此法ニ從フヘシ

第二十九條 自宅患者ヲ往診セシ醫師及ヒ患者ノ家人ニシテ直接セサル者親戚朋友ノ一時見舞タル者ハ成タケ石鹼水若ハ醋水ニテ顔面及ヒ手ヲ洗拭スヘシ

第二 死體及ヒ排泄物等消毒法

第三十條 死体ハ充分ニ稀薄石炭酸水(第二)ニ浸シタル單衣若クハ綿布ヲ以テ之ヲ包ミ速ニ棺内ニ斂ムヘシ但死体ハ成タケ之ヲ火葬スルヲ良トス

第三十一條 西洋形船舶航海中ニ死者アルキ速ニ濃厚石炭酸水(第一)ニ浸シタル單衣若クハ綿布ヲ以テ之ヲ包ミ假ニ棺内ニ斂メ通常屍室或ハ船中適宜ノ場所ヲ見計ヒ此ニ入レ置キ時々濃厚石炭酸水(第一)ヲ灌注スヘシ但陸地ニ着スルキハ速ニ其地方ノ警察官吏衛生委員ニ届出處分スヘシ

第三十二條 此病ハ必シモ排泄物ヨリ傳染セスト雖モ空氣ヲ汚スノ恐アルヲ以テ成タケ速ニ之ヲ取除ケ病室内ニ留置スヘカラス

第三 衣服臥具等消毒法

第三十三條 患者ノ久シク着シタル衣服、臥具ノ污垢ニ染ミタル者又ハ死体ニ直接シタル臥具、避病院ニテ用ヒタル臥具、蚊帳等ハ成タケ焼却スルヲ良トス其焼却ヲ憚ルヘキモノニシテ洗濯スヘキハ之ヲ桶ニ入レ稀薄石炭酸水(第二)ヲ灌キ浸シ置ク一二十四時間ニシテ更ニ沸湯ヲ注キ四五分時ヲ經ルノ後水ヲ以テ洗淨シ日光ニ曝スヘシ石炭酸等若シ缺乏スルキハ熱湯中ニ入レ一時以上煮沸スヘシ

第三十四條 同前ノ品種ニシテ洗濯スヘカラサルモノハ亞硫酸瓦斯(第九)石炭酸蒸氣(第三)ヲ以テ蒸蒸シ或ハ熱氣消毒法ヲ行ヒシ後日光及ヒ大氣ニ曝スヘシ

第三十五條 患者及ヒ死体ヲ置キタル室ノ疊、蓆類ハ之ヲ柱若クハ壁ニ倚セ掛ケ戸柵等ヲ開放シ室内ニアリシ諸器具ハ之ヲ排列シ窓戸ヲ密閉シテ六時乃至八時間亞硫酸瓦斯(第九)ヲ薰シ然ル後窓戸ヲ開キ病毒附着ノ恐アル柱、板敷等ニ稀薄石炭酸水(第二)ヲ撒布シ更ニ之ヲ拭淨シ其他器具ハ石鹼水又ハ沸湯ヲ以テ洗淨シ充分大氣及ヒ日光ニ曝スヘシ避病院ノ病室及ヒ屍室モ亦之ニ倣フヘシ但金銀器、書畫其他彩色ヲ施セル物及ヒ絹帛等亞硫酸ノ爲メニ其色質ヲ變化スルノ恐アル者ハ初ニ之ヲ取除ケ別ニ石炭酸蒸氣(第三)或ハ熱氣消毒法等ヲ適宜撰用スヘシ

第三十六條 患者アリタル西洋形船舶ハ其處置尋常ノ家屋ニ大異ナシト雖モ下等客室ニ至テハ衆多ノ乘客皆積荷ノ間ニ枕藉シ幾シト彼我ノ別ナキカ故ニ若シ其中ニ發病者アルキハ滿室ノ乘客、積荷、手荷物ハ皆病毒ニ浸染シタル者ト看做シ乘客、手荷物ハ上陸ノ時充分ニ消毒法ヲ行ヒ積荷ハ其儘其室ニ於テ六時乃至八時間亞硫酸瓦斯(第九)或ハ品種ニヨリ石炭酸蒸氣(第三)ヲ薰スルノ後ニ非ザレハ陸揚スルヲ許サス

第三十七條 日本形小船ハ前條ヲ斟酌シテ消毒法ヲ行ヒ海水ヲ以テ善ク船身ヲ洗フヘシ
第三十八條 尋常家屋ヲ避病院ニ假用セシモノハ其病室トナセシ部分ハ亞硫酸瓦斯(第九)ヲ薰セシ後稀薄石炭酸水(第二)或ハ亞硫酸溶液(第十)ヲ洒キ石鹼水ヲ以テ洗淨スヘシ
第三十九條 病室ハ不斷換氣法ニ注意スヘシ是亦多少消毒ノ効アルモノトス

第四十條 避病院ハ流行ノ後成タケ焼却スルヲ良トス否ヲサレハ先ツ汚穢シタル板敷、板壁及ヒ柱等ハ濃厚石炭酸水(第一)又ハ亞硫酸溶液(第十甲)ヲ以テ充分ニ洗淨シ數日間開放シテ大氣ニ曝シ然ル後之ヲ取毀ツヘシ

第五 什具運搬器等消毒法

第四十一條 病室ニ用ヒタル什具ハ總テ稀薄石炭酸水(第二)或ハ亞硫酸溶液(第十乙)ヲ澆キ然ル後石鹼水又ハ沸湯ニテ洗淨スヘシ其流フヘカラサルモノハ病室ニ消毒法ヲ行フノ際其内ニ排列シ(濕潤ニ堪フヘキモノハ之ヲ濕スヲ良トス)亞硫酸瓦斯(第九)或ハ石炭酸蒸氣(第三)ヲ以テ一時間蒸蒸スヘシ

第四十二條 書籍新聞紙ノ類病室ニアリタルキハ之ヲ緋展シ石炭酸蒸氣(第三)若クハ亞硫酸瓦斯(第九)ヲ薰スヘシ或ハ熱氣消毒法ヲ行フモ可ナリ

第四十三條 醫術器械及ヒ職人手道具其他木製、金屬製、陶製、漆製、ノ諸器類ハ總テ稀薄石炭酸水(第二)ヲ以テ洗フヘシ

痘瘡

痘瘡ノ病毒ハ揮發性及ヒ固性傳染毒ニシテ全ク患者ノ身体ヨリ發出シ又ハ死体及ヒ痘漿、痘痂ニ直接シテ感染スルノミナラス其患者ニ接觸セシ衣服、臥具其他一切ノ物品ヨリモ傳染シ又其病室内ノ空氣、塵埃モ之カ媒介トナリテ其病毒ヲ傳送スルモノトス

痘瘡ハ古來ヨリ全世界ニ發現シ特ニ惡性流行スルキハ其勢猖獗ニシテ無數ノ人衆ヲ害シ良醫モ亦手ヲ束テ其術ヲ施スヘカラサルアリ但人生一回此病ニ罹ルキハ感受性ヲ脱盡シ得ルヲ以テ英國ノ醫博士シエンチル氏牛痘接種ノ法ヲ發明セシ以還其善感スル者ハ復タ天然痘ニ感スルナシ故ニ此法行ハレテヨリ大ニ患者ノ數ヲ減シ偶々流行スルモ其病性劇惡ニ至ラズ殆ント其性ヲ變スルニ至ルヲ証スルニ足ル是故ニ種痘ヲ普及スルハ全ク此病ヲ防盡スル所以ニシテ即チ豫防ノ第一トス

第一項 清潔法

第一條 此病ハ各人感受性ヲ具フル故ニ一般清潔法ヲ要スルモ他病ニ於テ緊要トスルカ如クナラス但患者ノ居室ヲ清潔ニシ痘漿等ニ汚染セル衣服ヲ屢々更換シ周圍ノ塵埃ヲ掃除シ專ラ他人ニ傳染スルヲ防クヲ要スルニアルノミ

第二項 攝生法

第二條 前條ニ載スルカ如ク牛痘ヲ接種シテ其素因ヲ脱盡スルキハ復タ天然痘ニ感スルコトナシ然レモ一回種ヲ以テ足レリトスヘキニ非ス再三接種シ其善感ノ確徵ヲ取ラサルヘカラス唯衣服、飲食等ノ攝生ヲ以テ此病ノ侵襲ヲ豫防スヘキニアラス

第三項 隔離法

第三條 醫師痘瘡ト診斷シタルキハ直チニ其家ノ門戸ニ病名票ヲ貼附スヘシ但患者治癒又

ハ死亡若クハ避病院ニ送致シ其病室ニ消毒法ヲ行ヒタル後ハ即チ其病名票ヲ去ルヘシ
第四條 痘瘡ノ毒ハ患者ノ身体又ハ其衣服、臥具等ヨリ傳染シ又患者ニ接近シタル者ノ衣服等ヨリモ傳染スルヲ以テ成タケ患者ニ接近シ又ハ患者ノ用ヒタル衣服器具等ニ觸ルヘカラス

第五條 自宅療養ノ患者ハ其室ヲ異ニシ看護人ノ外ハ成タケ接近スヘカラス已ムテ得サル事故アルノ外ハ他人ト交通ヲ絶テ殊ニ未痘者ヲ近クヘカラス

第六條 家族中ニ於テモ看護人ヲ定メ其他要用アル者ノ外成タケ之ヲ室内ニ入ラシムヘカラス但看護人ハ既痘者ニ限ルヘシ

第七條 病室内不用ノ器具ハ勿論殊ニ不用ノ毛布等ヲ置クヘカラス

第八條 患者死亡ノ後其屍傍ニ接近シ并ニ死体ニ沐浴セシムル等ハ爲サ、ルヲ良トス

第九條 縱令輕症ナル患者ト雖モ落痢後一週日ヲ經ルニアラサレハ學校其他衆人群集ノ場所ニ行カシムヘカラス

第十條 蚊蠅ハ好テ患者皮膚ニ聚リ頗ル病毒傳播ノ媒介ヲナスモノナレハ病床ニハ常ニ蚊帳ヲ張り蚊蠅及ヒ其他ノ小虫ヲ防クヘシ

第十一條 病室ニハ消毒ノ後ト雖モ數週間未痘者ヲ入ルヘカラス但同家内ニ於テ若シ復タ此病ニ罹ル者アル時ハ此病室ヲ用フルモ妨ケナシ

第十二條 西洋形船舶航海中若シ發病者アルキハ其室ヲ異ニシ看護人ノ外他人ト交通ヲ絶ツコト猶ホ人家ニ於ルカコトクスヘシ

第十三條 製造所會社學校旅店等ニ在テ發病シ引取人ナキ者并ニ狹隘不潔ノ地ニ雜居スル者等ニシテ看護消毒法行届カス病毒ノ傳播ヲ防キ難キ者ハ之ヲ避病院ニ送ルヘシ若シ避病院アラサルキハ適當ノ空屋ニ移シテ之ヲ隔離スヘシ

第十四條 避病院ノ位置ハ人家ニ接近セズ且ツ恒風ノ上ニアラサル地ヲ撰ヒ必ス往來繁多ノ路傍等ニ設クヘカラス但其門前ニ高ク病名標旗ヲ掲グヘシ

第十五條 避病院ヲ新ニ構造スルキハ空氣ノ流通ヲ主トシ善美ヲ要セズ其牀ヲ高クシ窓戶ヲ濶大ニシ且ツ板壁ヲ用ヒテ洗淨ニ便ニシ其家根ハ板葺苔草等一時ノ便ニ任シテ可ナリ且ツ其病室ハ濶大ナルヲ要スルヲ以テ凡患者一人ニ二坪半ト見積リ之ヲ建設スヘシ

第十六條 避病院ノ病室ハ重症輕症ノ患者ヲ區別シテ之ヲ分隔シ二坪半ニ患者一人ヲ置クヲ常トシ縱令輻湊スルトモ一坪若クハ一坪半ニ一人ノ割合ヨリ狭クスヘカラス但此他醫師詰所、事務所、看護人休息所便宜ニ之ヲ設ケ且ツ簡易ノ蒸氣室ヲ設クヘシ

第十七條 避病院ノ門側ニハ輕易ナル風呂ヲ設ケ看護人、見舞人等外出ノ時入浴ノ用ニ供スヘシ

第十八條 避病院ハ窓戶ヲ濶大ニシ空氣ヲ流通セシメ冬時ハ暖爐ヲ置キ室内ノ溫度ヲ適宜

ニシテ空氣ノ代謝ヲ助シヘシ但病室ハ患者治癒死亡ノ後毎回消毒法ヲ施スヘシ
第十九條 避病院ニハ別ニ清淨ナル屍室ヲ設ケ患者若シ死亡シタルトキハ直チニ此ニ移ス
ヘシ但屍室ハ親族ノ弔者ヲ入ル、カ爲メ其余地ヲ設クヘシ且ツ其弔者ハ成ダケ速ニ來ル
ノ手續ヲナスヲ要ス

第二十條 尋常病院ニハ決シテ此患者ヲ入ルヘカラス若シ院内ニ從來傳染病室ノ設ケアリ
テ充分ニ隔離法消毒法ヲ行ヒ得ヘキノ目的アルモノハ入院ヲ許スヘシト雖モ尋常ノ病院
ヲ區隔シテ之ヲ用フヘカラス

第二十一條 人家稀疎ノ村落ニ於テハ必シモ避病院ヲ設ルヲ要セス若シ相當ノ空屋アラハ
假ニ之ヲ用フヘシ

第二十二條 避病院看護人ノ員數ハ重症ノ患者ニハ一人ニ一人ヲ附シ輕症ノ者ニハ三人ニ
一人ヲ附スル割合ヲ以テ便宜斟酌シ且ツ晝夜交代セシムヘシ但看護人ハ既痘者ニ限ルヘ
シ且ツ其表記アル衣服ヲ着セシメ成ダケ其人ヲ更換セシムヘカラス

第二十三條 避病院ニ在ル患者ノ親族又ハ別段ノ交誼アル者看護ヲ爲サントキハ
既痘者ニ限リ之ヲ許スヘシ但屢々更替スルヲ許スヘカラス

第二十四條 患者ノ親族等一時見舞ヲ爲サント請フトキハ之ヲ許スト雖モ成ダケ屢々スヘ
カラス其出ル時ニハ必ス充分ノ消毒法ヲ施スヘシ

第二十五條 流行ノ勢猛烈ナルトキハ祭禮、劇場等衆人群集ノ事業ヲ差止メ學校モ成ダケ
之ヲ閉ツルヲ良トス

第四項 消毒法

第二十六條 此病毒ハ膿漿、痲痘、呼吸、津唾及ヒ死体ヨリ傳染シ又患者ノ衣服、臥具、其他
患者ニ接觸セシ器具及ヒ居室等ヨリモ傳染スルカ故ニ甚シク汚染セシモノハ成ダケ燒却
スヘシ

第二十七條 消毒法ハ其物ニ從テ區別スルヲ左ノ如シ

第一 患者及ヒ看護人等消毒法

第二十八條 患者治癒落痂ノ後一週日ヲ經テ初テ他人ト交通シ又ハ避病院ヨリ退出ノ節ハ
必ス沐浴シ石鹼水ヲ用テ全身ヲ洗ヒ他ノ衣服若シハ消毒法ヲ施シタル衣服ヲ着スヘシ看
護人及ヒ患者屍体運搬人並ニ避病院ノ醫師、死体取扱人等ノ他人ニ交接スルトキモ亦此
法ニ從フヘシ

第二十九條 自宅患者ヲ往診セル醫師及ヒ患者ノ家人ニシテ直接セサル者親戚朋友ノ一時
見舞タル者等ハ石鹼水或ハ醋水ニテ顔面及ヒ手ヲ洗フヘシ

第二 死体及ヒ排泄物等消毒法

第三十條 死体ハ充分ニ稀薄石炭酸水(第二)ヲ浸シタル單衣若シハ綿布ヲ以テ之ヲ包ミ速

ニ棺内ニ歛ムヘシ

第三十一條 死体ハ成ク火葬シタルモ其病毒數十年ヲ經ルモ消滅セサルモノトス

第三十二條 西洋形船舶航海中ニ死者アルキ速ニ濃厚石炭酸水(第一)ニ浸シタル單衣若クハ綿布ヲ以テ之ヲ包ミ假ニ棺内ニ歛メ通常屍室或ハ船中適宜ノ場所ヲ見計ヒ此ニ入レ置キ時々濃厚石炭酸水(第一)ヲ灌注スヘシ但陸地ニ著スルキハ速ニ其地方ノ警察官吏衛生委員ニ届出處分スヘシ

第三十三條 落茄及ヒ病室ノ塵埃又ハ患者ニ觸レタル綿、布、紙等ノ斷片ニ至ル迄時々收拾シテ之ヲ焼却スヘシ

第三 衣服臥具等消毒法

第三十四條 患者ノ久ク用ヒタル衣服、臥具及ヒ避病院ニ用ヒタル蚊帳ノ甚ク病毒ニ浸染シタル者并ニ避病院ノ臥具、疊、蓆等ノ之ヲ焼却スヘシ

第三十五條 患者ノ著シタル衣服、臥具及ヒ手巾、蚊帳等又ハ死体ニ著セシ衣服等ノ洗濯ニ堪フヘキモノハ之ヲ桶ニ入レ稀薄石炭酸水(第二)ヲ灌キ浸シ置クニ二十四時間ニシテ更ニ沸湯ヲ注キ四五分時ヲ經ルノ後水ヲ以テ洗浄シ日光ニ曝スヘシ石炭酸等若シ缺乏スルトキハ熱湯中ニ入レ一時以上之ヲ煮沸スヘシ其洗濯ニ堪ヘサルモノハ其品種ニヨリ亞硫酸瓦斯(第九)若クハ石炭酸蒸氣(第三)ヲ以テ薰蒸シ或ハ熱氣消毒法ヲ行ヒシ後日光及ヒ大氣ニ曝スヘシ

第三十六條 避病院ノ醫師、看護人及ヒ死体運搬人等ノ衣服ニ施スヘキ消毒法ハ前條ニ同シ

第四 家屋船舶等消毒法

第二十七條 患者及ヒ死体ヲ置キタル室ノ疊、蓆類ハ之ヲ柱若クハ壁ニ倚セ掛ケ戸棚等ヲ開放シ室内ニアリシ諸器具ハ之ヲ排列シ窓戸ヲ密閉ノ六時乃至八時間亞硫酸瓦斯(第九)ヲ薰シ然ル後窓戸ヲ開キ病毒附着ノ恐アル柱、板敷等ハ稀薄石炭酸水(第二)ヲ撒布シ更ニ之ヲ拭淨シ其他ノ器具ハ石鹼水又ハ沸湯ヲ以テ洗浄シ充分大氣及ヒ日光ニ曝スヘシ避病院ノ病室及ヒ屍室モ亦之ニ倣フヘシ但金銀器、書畫其他彩色ヲ施セル物及ヒ絹帛等亞硫酸ヲ爲メニ其色質ヲ變化スルノ恐アル者ハ初ニ之ヲ取除ケ別ニ石炭酸蒸氣(第三)或ハ熱氣消毒法等ヲ適宜撰用スヘシ

第三十八條 患者アリタル西洋形船舶ハ其處置尋常ノ家屋ニ大異ナシト雖モ下等客室ニ至テハ衆多ノ乘客皆積荷ノ間ニ枕藉シ幾ト彼我ノ別ナキカ故ニ若シ其中ニ發病者アルトキハ滿室ノ乘客、積荷、手荷物ハ皆病毒ニ浸染シタル者ト看做シ乘客手荷物ハ上陸ノ時充分ニ消毒法ヲ行ヒ積荷ハ其儘其室ニ於テ六時乃至八時間亞硫酸瓦斯(第九)或ハ品種ニヨリ

石炭酸蒸氣(第三)ヲ蒸スルノ後ニ非レハ陸揚スルヲ許サズ

第三十九條 日本形小船ハ前條ヲ斟酌シテ消毒法ヲ行ヒ海水ヲ以テ普ク船身ヲ洗淨スヘシ

第四十條 避病院或ハ便宜ニヨリ他ノ空屋ヲ假用セシモノハ其病室ニ供セシ部分ニ亞硫酸

瓦斯(第九)ヲ蒸セシ後稀薄石炭酸水(第二)或ハ亞硫酸溶液(第十乙)ヲ注キ石鹼水ヲ以テ洗

淨スヘシ但消毒ノ後モ數週間其内ニ入ルヘカラス且ツ空氣ヲ流通セシムヘシ

第四十一條 病室ハ不斷換氣法ニ注意スヘシ是亦多少消毒ノ効アルモノトス

第四十二條 臨時假設ノ避病院ニシテ其保存スヘカラサルモノハ流行熄ムノ後之ヲ取毀ツ

ヘシ尤モ其前汚穢シタル板敷、板壁及ヒ柱等ハ濃厚石炭酸水(第一)又ハ亞硫酸溶液(第十

甲)ヲ以テ充分ニ洗淨シ數日間開放シテ大氣ニ曝スヘシ

第五 什具運搬器等消毒法

第四十三條 避病院ニ携ヘ來リシ手道具、玩具等ハ治癒若クハ死亡ノ後亞硫酸瓦斯(第九)蒸

蒸法ヲ行ハサレハ之ヲ出スヘカラス

第四十四條 患者及ヒ死體ヲ運搬セシ器具等ハ稀薄石炭酸水(第二)ヲ灌注シ更ニ石鹼水若

クハ沸湯ヲ以テ洗淨スヘシ其舁舟ノ如キハ海水ヲ以テ洗フモ可ナリ

第四十五條 病室ニ用ヒタル什具、玩具ハ總テ稀薄石炭酸水(第二)或ハ亞硫酸溶液(第十乙)

ヲ灌キ然ル後石鹼水又ハ沸湯ニテ洗淨スヘシ其洗フヘカラサルモノハ病室ニ消毒法ヲ行

フノ際其内ニ排列シ(濕潤ニ堪フヘキモノ)ハ之ヲ濕ヌヲ良トス(亞硫酸瓦斯(第九)或ハ石炭酸蒸氣(第三)ヲ以テ一時間之ヲ蒸蒸スヘシ)

第四十六條 患者ノ玩弄シタル圖書、書籍、新聞紙ノ類ハ之ヲ緋展シ石炭蒸氣(第三)若クハ

亞硫酸瓦斯(第九)ヲ蒸蒸スヘシ或ハ熱氣消毒法ヲ行フモ可ナリ

第四十七條 醫術器械及ヒ木製、金屬製陶製、漆製等ノ諸器ニシテ病毒ニ觸レタルモノハ總

テ稀薄石炭酸水(第二)ヲ以テ洗フヘシ

○明治十八年三月二十四日內務省甲第九號達

種痘施術心得書

種痘術ヲ施ス者ハ種痘ノ適否接種ノ方法痘苗採收及貯蓄ノ法善感不善感ノ鑑別種痘ノ注意等ヲ詳知セサル可カラズ其要左ノ如シ

第一 種痘ノ適否

第二條 種痘バ左ニ掲クル者ニハ施サ、ルヲ可トス

一 生後七十日ヲ經サル者

二 種痘ノ爲ニ一時増進スヘキ病患アル者

三 丹毒流行ノ土地ニ居住スル者

四 蔓延性ノ皮膚病アル者

五 熱性病ニ罹リ居ル者

第二條 種痘ニ適スル時期ハ春(三月四月五月)秋(九月十月十一月)二季ヲ以テ最良トス然レモ四季共ニ之ヲ施シテ妨ナシ

第二 接種ノ方法

第三條 種痘ヲ施スハ上膊^{三稜筋越}ニ於テ各々三針乃至五針^{受痘者ノ年齢トシ各針ノ距離曲尺}五分以上ニシテ痘疱ノ暈輪互ニ密接セサル様注意スヘシ

第四條 施術ニ先テ針尖ヲ拭淨シ一時ニ數人ニ接種スルトキハ一人毎ニ之ヲ拭淨スヘシ

第五條 良性ナル痘醬ヲ採リテ移種スルヲ確實ノ良法トスレモ此法ヲ行フ能ハサルトキハ貯蓄ノ痘苗ニ成ルヘク新鮮ナル者ヲ撰ヒ用フヘシ但痴皮ハ用ヒサルヲ可トス

第三 痘苗採收及貯蓄ノ法

第六條 痘苗ハ左ニ掲クル者ヨリ採收スヘカラス

一 痘疱ノ成形過及過大ノ者 發量非常ニ大ナル者 疱縁又ハ暈部ニ水泡ヲ生スル者 痘疱非常ニ隆起シテ澄明ノ醬液ヲ漏出スル者 一種ノ疑フヘキ色例ヘハ紅藍色ヲ呈セルカ如キ者

但此等ノ異常痘疱ノ近傍ニ在ル正痘モ亦同シ

二 痘醬ノ血液ヲ混セル者 疱ノ中央ニ在ル痘醬ノ腐敗ニ向ントスル者 痘疱ノ己ニ化膿ニ傾キシ者爬搔又ハ摩擦ノ爲ニ痘疱破潰セシ者

三 梅毒腺病及ヒ皮膚病ニ罹リ居ル者 營養不良ノ者

四 丹毒ヲ併發セル者 過度不整ニシテ不善感ノ疑アル者^{第十三條ヲ參照スヘシ}

五 天然痘ヲ經ル者 再三種ノ者

第七條 痘醬ヲ採ルハ通常接種後第八日^{二十四時間ヲ以テ一日ト算ス下管同シ}ヲ以テ佳トスト雖時候ノ寒暖及各

人ノ性質ニ隨ヒ第七日又ハ第九日ヲ以テ適度トスルコアリ痘疱ハ善感良性ノ者ニシテ其含包セル所ノ漿液ハ渾濁セス粘稠露滴ノ如クナルニシ

第八條 痘醬ヲ採ルニハ痘疱ノ中心ヲ避テ疱面ヨリ斜ニ淺刺シ深ク刺シテ出血セシムヘカラス

第九條 發痘一顆ナル者ノ痘疱ハ其醬液ヲ採ルヘカラス數顆アルモ其一顆ハ傷クヘカラス

第十條 痘苗ヲ貯蓄シテ接種ノ用ニ供セントスルニハ硝子板間ニ貯ヘテ密封シ又ハ硝子製毛細管ニ吸入セシメテ其兩端ヲ固封シ日光及寒熱ノ劇度ヲ避ケ貯スヘシ(痘苗ノ貯蓄法甚宜シキヲ得ルトキハ五箇月間充分ノ効力アリ)

第四 善感不善感ノ鑑別

第十一條 種痘ノ善感不善感ヲ鑑別スルニハ左ノ各項ヲ以テ要點ト爲ス

一 接種後第二日以内ニ成形ヲ始メシヤ否

二 痘疱常形ニシテ其大サ及硬サハ皮下皮上共ニ同一ナルヤ否

三 紅暈ハ常形ナルヤ否

四 經過整然トシテ其時期ヲ誤ラサルヤ否

五 第八日ニ至リテ微熱ヲ發スルヤ或ハ然ラサルモ其他ノ徵候ヲ呈スルヤ否

六 痂皮ハ黯褐色又ハ黑色ニシテ其厚サ及硬サハ常度ナルヤ否

第十二條 種痘善感ノ徵候ハ左ノ經過ニ就キ知ルヘシ

接種後第一日第三日ノ間ハ他ノ刺傷ニ異ナルヲ無シ施術後針痕ノ周圍ニ淡紅色ノ小暈ヲ發スレモ暫時ニ消失ス(或ハ此暈ヲ見サルコトアリ)

第三日ニハ針痕ノ部ニ小ナル紅點ヲ生シ試ニ指頭ヲ以テ之ニ觸ルレハ稍々隆起セルヲ覺ユ(經過緩慢ナル者ハ第四日第五日ニ至リ始テ此紅點ヲ生スルコト有リ)

第四日ニハ紅色ニシテ硬ク且ツ隆起セル圓形若クハ橢圓形ノ小結節ヲ生ス

第五日ニハ結節細小ノ水疱ト爲リ其周圍ニ狭キ紅暈ヲ見ル

第六日ニハ水疱稍々増大シ其邊緣隆起シテ疱ノ中央ニハ陷凹ヲ呈シ疱中ニハ稀薄透明ニシテ稍々帶藍色ナル液ヲ充實シ周圍ノ紅暈稍々増大ス

第七日ニハ諸症益々増進ス

第八日ニハ痘疱全ク成形ス其大サハ豆大ニシテ周圍ハ焮腫シ微シク疼痛アリ疱中ノ液ハ倍々充實シ紅暈亦著シク増大ス此期ニ當リ(或ハ此期以前)微熱ヲ發シ或ハ全ク熱候ナク顔面ハ蒼白色ヲ呈スルコトアリ又腋下ニ疼痛ヲ覺エ水脈腺腫起スルコト有リ

第九日ニハ紅暈更ニ増大シ其色澤モ亦加ル

第十日ニハ疱液化膿シテ白濁或ハ黃色ノ濃稠液ト爲リ疱ノ中央稍々凸隆ス然レモ其形必ス扁圓ナリ

第十二日ニ至ルマテハ痘疱其形狀ヲ變スルコト無ク此日ヨリ收斂ヲ始メ疱ノ中央ヨリ邊緣ニ向ヒテ次第ニ乾固シ漸ク褐色ニ變シ周圍ノ紅暈モ亦漸ク消退ス

爾後黯褐色又ハ黑色ニシテ堅實ナル厚痂ヲ結ヒ初ハ皮膚ニ緊著シテ容易ニ剝離セス結痂後八日乃至十日ニ至リ始テ剝脫ス其剝脫ノ後ニ遺セル癍痕ハ圓形又ハ橢圓形ニシテ淺キ凹窩ヲ爲シ其窩内ニハ更ニ數多ノ小凹點ヲ呈ス但一回種痘セシ者ニ再三種シテ感染スルコトアルモ其痂顆小ニシテ七八日間ニ全ク經過スルコト常トス

第十三條 種痘不善感ノ諸徵ハ左ノ如シ

一 接種後第二日以内ニ成形ヲ始メ常形ニ達セス直ニ廣ク蔓延セル炎性ヲ發シ皮下ニ硬キヲ覺ハスノ紅暈ハ不整形ナリ痘疱ハ速ニ化膿シ其隆起ノ狀或ハ半球形或ハ圓錐形ト爲リ乾固スレハ黃色ニシテ鬆軟ナル痂皮ヲ結フ(時トシテ第二日後ニ成形ヲ始ムル者アレモ其經過總テ不整ナルヲ以テ自ラ善感ノ者ト區別スルヲ得ヘシ又不善感ノ者ト雖モ腋下ニ疼痛ヲ覺エ微熱ヲ發スルコト無キニ非ス)

面ハ蒼白色ヲ呈スルコトアリ又腋下ニ疼痛ヲ覺エ水脈腺腫起スルコト有リ

第九日ニハ紅暈更ニ増大シ其色澤モ亦加ル

第十日ニハ疱液化膿シテ白濁或ハ黃色ノ濃稠液ト爲リ疱ノ中央稍々凸隆ス然レモ其形必ス扁圓ナリ

第十二日ニ至ルマテハ痘疱其形狀ヲ變スルコト無ク此日ヨリ收斂ヲ始メ疱ノ中央ヨリ邊緣ニ向ヒテ次第ニ乾固シ漸ク褐色ニ變シ周圍ノ紅暈モ亦漸ク消退ス

爾後黯褐色又ハ黑色ニシテ堅實ナル厚痂ヲ結ヒ初ハ皮膚ニ緊著シテ容易ニ剝離セス結痂後八日乃至十日ニ至リ始テ剝脫ス其剝脫ノ後ニ遺セル癍痕ハ圓形又ハ橢圓形ニシテ淺キ凹窩ヲ爲シ其窩内ニハ更ニ數多ノ小凹點ヲ呈ス但一回種痘セシ者ニ再三種シテ感染スルコトアルモ其痂顆小ニシテ七八日間ニ全ク經過スルコト常トス

第十三條 種痘不善感ノ諸徵ハ左ノ如シ

一 接種後第二日以内ニ成形ヲ始メ常形ニ達セス直ニ廣ク蔓延セル炎性ヲ發シ皮下ニ硬キヲ覺ハスノ紅暈ハ不整形ナリ痘疱ハ速ニ化膿シ其隆起ノ狀或ハ半球形或ハ圓錐形ト爲リ乾固スレハ黃色ニシテ鬆軟ナル痂皮ヲ結フ(時トシテ第二日後ニ成形ヲ始ムル者アレモ其經過總テ不整ナルヲ以テ自ラ善感ノ者ト區別スルヲ得ヘシ又不善感ノ者ト雖モ腋下ニ疼痛ヲ覺エ微熱ヲ發スルコト無キニ非ス)

- 二 接種後第一日ニ大ナル赤色ノ疹ヲ生シ速ニ漿液ヲ充實シ上皮破レテ膿面ヲ呈シ或ハ濕潤セル淡色ノ痂皮ト爲ルヲ見ル
 - 三 紅暈速ニ増大シテ腫起シ或ハ潰瘍ニ陥ル
 - 四 第八日ニ至リ數疱相合シテ一大潰瘍ト爲リ或ハ一面ノ痂皮ヲ結ヒ其潰瘍又ハ痂皮ノ周圍ニハ廣ク赤色ヲ呈ス
 - 五 痂皮剝脱ノ後ニ遺セル癍痕ハ深ク不整形ヲ呈シ其底面平滑ナリ
- 第五 種痘ノ注意
- 第十四條 初種ノ不善感ハ痘苗ノ不良ナルカ或ハ其人一時ノ不感性ヲ有セルニ因ル者ナルカ故更ニ三四週ノ後善良ナル痘苗ヲ撰ヒテ再ヒ接種スヘシ
- 第十五條 種痘ヲ施スニ當リテハ併發症ヲ防キ特ニ天然痘流行ノ際ニハ接種後第八日ニ至ルマテハ嚴ニ其感染ヲ防禦スヘシ然レモ受痘者已ニ暗ニ天然痘ニ感染シ其潜伏期ニ於テ接種スルノ間々之アリ
- 第十六條 天然痘流行シ種痘ヲ猶豫ス可カラサル際ニハ第一條各項ニ掲クル者ト雖熱性病ヲ除クノ外ハ總テ接種スヘシ
- 第十七條 種痘中ハ寒冷ヲ避ケシメ成ルヘク清潔ノ空氣中ニ居ラシムヘシ平常慣習セル食物等ハ總テ禁忌スルニ及ハス又別ニ醫藥ヲ要セス

○明治十六年二月十四日第八號達

明治十四年^{四月}第三十號達左ノ通改正候條此旨相達候事
 傳染病ニ罹リタル者身元赤貧ニシテ資力ナキトキハ本籍寄留旅行ヲ問ハス其費ハ總テ發病地ノ地方税中衛生費ヲ以テ支辨スヘシ
 但流行ノ勢盛ナルトキハ時宜ニ依リ官費支給スルコトアルヘシ

(一六八)電信條例(明治十八年五月七日第八號布告)

但明治七年^{九月}第九十八號布告十二年^{五月}工部省第九號布達其他本條例ニ牴觸スル從前ノ布告布達ハ右施行ノ日ヨリ廢止ス

右奉 勅旨布告候事

第一章 電報

第一條 凡電報別テ三種ト爲ス

一 官報

二 局報

三 私報

第二條 官報局報私報各別テ七類ト爲ス

- 一 通常電報
 - 二 至急電報
 - 三 追尾電報
 - 四 同文電報
 - 五 照枝電報
 - 六 受信電報
 - 七 返信料前納電報
- 第三條 電報ヲ傳送スルノ順序ハ官報ヲ先トシ局報之ニ次キ私報又之ニ次クモノトス
- 第四條 電報局長ニ於テ法律規則ニ違背シ又ハ治安ヲ妨害シ風俗ヲ壞亂スルモノト認ムル私報ハ其傳送ヲ止ムヘシ
- 第五條 政府ハ時機ニ依リ線路又ハ地方又ハ語辭ヲ限リ私報ヲ停止スルコトアルヘシ
- 第二章 電報書法
- 第六條 凡電報ヲ書載スルニハ普通辭又ハ秘辭隱語ヲ問ハズ和文ハ片假名及數字ヲ用ヒ歐文ハ羅馬字及亞刺比亞數字ヲ用フヘシ
- 第七條 電信局長ニ於テ私報ニ用ラレ秘辭隱語ノ解釋又ハ其合符原本ヲ要スルトキハ之ヲ差出スヘシ

第三章 電報料

- 第八條 凡電報料ハ國內ヲ通シテ同一ト爲ス但一市内及壹岐對馬ニ發著スルモノハ此限ニテアラズ
- 第九條 電報料及手数料ノ金額ハ別ニ布達ヲ以テ之ヲ定ム
- 第十條 電報料及手数料ハ電信切手ヲ以テ納ムルモノトス其切手ハ賴信紙ニ貼付スヘシ但返信電報料ノ前納及尋問電報料ノ假納ハ貼付スルノ限ニアラス
- 第十一條 電信中央局及分局并電信切手賣下所ノ設ケアラサル地ヨリ郵便ニ付シテ電報ヲ發出スルトキハ郵便切手ヲ以テ電信切手ニ代用スルコトヲ得其郵便切手ハ賴信紙ニ貼付セサルモノトス
- 第十二條 電報料及手数料ニ用ヒタル電信切手ハ電信中央局及分局ニ於テ消印スヘシ
- 第十三條 電信及手数料ハ過納アルモ己ニ電信切手ニ消印シタル後ハ之ヲ還付セス未タ傳送セサル電報ヲ返還スルトキ己ニ消印シタルモノ亦同シ
- 第十四條 第四條ニ據リ私報ノ傳送ヲ止ムルトキハ其既ニ納メタル料金を還付セス
- 第十五條 電報取扱ノ過失ニ因テ甚シク遲延シ若クハ到達セサルモノハ其料金を還付ス照枝電報ニシテ傳送ノ際誤認ヲ生シテ其用辨ヲ闕キタルコト判然タルモノ亦同シ
- 第十六條 料金を還付ノ請求ハ發信ノ日附ヨリ六十日以内ニ電信局長ニ申出ヘシ此期限ヲ過

第十七條 電報料及手数料ニ不足アルトキハ電信中央局及分局ニ於テ其電報ヲ傳送スルモ其不足ノ料金ニ倍テ發信人ヨリ追納セシムヘシ

第十八條 發信人又ハ受信人ヨリ納ムヘキ料金ヲ七日以内ニ徵收シ難キトキハ發信人ノ納メサルモノハ受信人ヨリ受信人ノ納メサルモノハ發信人ヨリ徵收スヘシ

第四章 電信切手

第十九條 電信切手ハ日本政府ニ於テ發行セシモノタルヘシ

第二十條 電信切手ハ電報料及手数料納濟ノ證トナスモノトス

第二十一條 電信切手ヲ賣ル者ハ電信局長ノ免許ヲ受ケ電信切手賣下所ノ標札ヲ掲クヘシ

第二十二條 電信切手ハ電信中央局及分局並電信切手賣下所ノ外ニ於テ賣買スヘカラス

第二十三條 電信切手ハ其額面ヨリ低價ヲ以テ賣ルヘカラス

第二十四條 返信電報料ノ前納及尋問電報料ノ假納ニ充ツル電信切手並電信切手ニ代用スル郵便切手ヲ賴信紙ニ貼付シタルモノハ各其効用ヲ失フ

第二十五條 電信切手ノ汚斑毀損又ハ不明瞭ナルモノハ其効用ヲ失フ但其未タ使用セサルモノニ限リ二人以上ノ證人ヲ立テ其理由ヲ證明シタルトキハ電信中央局及工部卿ノ告示ヲ以テ定メタル分局ニ於テ定價十分二減ニテ買戻スヘシ

第二十六條 電信中央局工部卿ノ告示ヲ以テ定メタル分局ニ於テハ四枚以上連續シタル電信切手ヲ其所持人ノ請求ニ依リ定價十分一減ニテ買戻スヘシ

第五章 電報發送

第二十七條 電報ノ傳送ハ電信中央局及分局ニ於テ之ヲ管スルモノトス

第二十八條 電信中央局及分局ノ廢置並開局時間ハ工部卿之ヲ告示スヘシ

第二十九條 電報ヲ依托スル時間ハ開局時間ニ限ルヘシ但至急官報ハ此限ニアラス

第三十條 發信人ノ請求アルニ非サレハ電報ノ受取證書ヲ交付セス之ヲ請求スルトキハ其手数料ヲ納ムヘシ

第三十一條 官報ハ官廳又ハ官吏ノ印ヲ押捺スヘキモノトス但官報タルノ確證アルトキハ此限ニアラス

第三十二條 官報ノ原信ヲ證據トシテ差出ストキハ其返信ヲ官報トシテ發送スルコトヲ得

第三十三條 電信中央局及分局ニ於テ私報ノ發信人タルノ證據ヲ要スルトキ其發信人ハ賴信紙ノ端末ニ署名捺印スヘシ

第三十四條 電報ハ其宛名ノ家又ハ本人ニ之ヲ配達スヘシ但受取ルヘキ人名ノ指定アルモノハ此限ニアラス

第三十五條 電報ヲ受取タル者ハ電報受取紙ニ時刻ヲ記入シ記名ノ下ニ捺印シ直ニ之ヲ配

達人ニ交付スヘシ

第三十六條 宛名ノ家又ハ本人ニ屬セサル電報ノ配達ヲ受取タル者ハ其由ヲ附箋シ直ニ之ヲ着信局ニ返付スヘシ

其電報ヲ誤テ開封シタル者ハ更ニ封緘シ其事由ヲ副書スヘシ

第三十七條 電信中央局及分局ヨリ一里ヲ超ヘサル地ニ配達スル電報ハ手数料ヲ要セス但別使配達島嶼配達船配達ハ此限ニアラス

第三十八條 電信中央局及分局ヨリ一里ヲ超ヘサル地ニ配達スル電報コシテ發信人ヨリ其配達方ヲ指定セサルモノハ先拂郵便ヲ以テ遞送スヘシ

第三十九條 郵便ニテ遞送スル電報ハ其郵便稅ヲ納ムヘシ別紙又ハ解船ヲ以テ配達スル電報ハ手数料ヲ納メ島嶼ニ配達スル電報ハ實費ヲ納ムヘシ

第四十條 受信人ニ配達シ能ハサル電報ハ着信局ニ留置キ本人或ハ其委任ヲ受ケタル代人ヨリ請求スルトキハ之ヲ交付スヘシ若シ着信ノ日ヨリ六十日以内ニ請求スル者アラサルトキハ之ヲ沒書トナスヘシ

第四十一條 未タ傳送セサル電報ハ其發信人タルノ證據ヲ以テ返還ヲ請求スルトキハ之ヲ還付スルコトアルヘシ

第四十二條 電報ノ傳送ヨリ生シタル損失又ハ異議アルモ電信局ハ一切其責ニ任セズ

第六章 尋問改正

第四十三條 受信人電報ノ字句ニ疑惑アリテ尋問ヲ要スルトキハ其電報ヲ受取リタル時ヨリ二十四時以内ニ之ヲ請求スルコトヲ得但其料金ヲ假納スヘシ

電信中央局及分局ニ於テハ其請求ニ應シ電報ヲ校正シ通信上ニ誤謬ナキトキハ假納ノ料金ヲ收入シ誤謬アルトキハ之ヲ還付スヘシ

第四十四條 發信人電報ノ字句ニ改正ヲ要スルトキハ其電報ヲ依托シタル時ヨリ七十二時以内ニ之ヲ請求スルコトヲ得但發信人タルノ證據ヲ差出スヘシ

第七章 閱覽正寫

第四十五條 發信人又ハ受信人ハ電報發着ノ日ヨリ三十日以内ニ本人又ハ其代人タルノ證據ヲ以テ發着局ニアル原信ノ閱覽ヲ請求スルコトヲ得又其原信ニ相違ナキノ証印アル正寫ヲ請求スルコトヲ得其期限ヲ過キタルトキハ更ニ六十日以内ニ之ヲ電信局ニ請求スルコトヲ得此期限ヲ過シルトキハ一切之ヲ許サス原信ノ正寫ヲ請求スルトキハ其手数料ヲ納ムヘシ

第八章 電機私設

第四十六條 凡電氣ノ機器ヲ以テ通信傳話及號報ヲナサントスル者ハ工部卿ニ願出ヘシ
第四十七條 私設ノ電線ハ官設ノ電線アラサル地ニ於テ一人又ハ兩人ノ用ニ供スルモノニ

限リ許可スルモノトス但傳話又ハ鐵道ノ用ニ供スルモノハ官設ノ電線アル地ニ於テモ許可スルコトアルヘシ

第四十八條 電線私設ノ許可ヲ得タル者ハ電信局ニ於テ定メタル規約ニ從フヘシ
第四十九條 私設ノ電線ハ最寄電信分局ニ連續設置スヘシ但傳話又ハ鐵道ノ用ニ供スルモノハ此限ニアラス

第五十條 私設ノ電線ハ他人ノ電報ヲ傳送スルコトヲ許サズ

第九章 海外電報

第五十一條 海外電報ハ同盟諸國ノ會議ヲ以テ定ムル所ノ萬國條約書ニ據リテ取扱フヘシ

第十章 罰則

第五十二條 第七條ヲ犯シタル者ハ五圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第五十三條 第二十二條第二十三條ヲ犯シタル者ハ二圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第五十四條 第三十五條第三十六條ヲ犯シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第五十五條 第四十六條ヲ犯シタル者ハ二圓以上百圓以下ノ罰金ニ處シ其機械ヲ沒收ス

第五十六條 第四十八條第四十九條ヲ犯シタル者ハ二圓以上百圓以下ノ罰金ニ處シ其情狀

ニ依リ電線私設ヲ禁止ス

第五十七條 第五十條ヲ犯シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上百圓以下

ノ罰金ヲ附加シ其機器ヲ沒收ス

第五十八條 電線ヲ切斷セスト雖モ電氣ヲ吸引シ易キ物ヲ纏繞シテ不通ニ致シ若クハ其効力ヲ妨害シタル者ハ二圓以上十圓以下ノ罰金ニ處ス
其水底電線ニ係ルトキハ五圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第五十九條 疎虞懈怠ニ因リ電信ノ器械柱木條線ヲ損壞切斷シテ電氣ヲ不通ニ致シ或ハ其効力ヲ妨害シタル者ハ二圓以上十圓以下ノ罰金ニ處ス
第六十條 電信ノ柱木條線ニ紙鳶ヲ懸ケ若クハ瓦礫其他ノ雜物ヲ擲チ又ハ柱木及測量標木ニ獸畜ヲ繫キ若クハ貼紙シ戲書シ又ハ柱木ノ記號及測量標木ヲ毀棄汚穢シタル者ハ五錢

以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス

第六十一條 政府ノ指定シタル水底電信線路内ニ於テ艦舶ヲ繫泊シ又ハ漁業採藻ヲ爲シ土砂ヲ掘鑿シ又ハ電信線ノ號標ニ舟筏ヲ繫キ又ハ其號標ヲ毀棄シタル者ハ五圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

政府ノ指定シタル電信船ノ號標距離内ニ於テ前項ノ所爲ヲ行ヒ又ハ航行シタル者亦同シ
第六十二條 偽計又ハ威力ヲ以テ電報ノ傳送配達及架線其他ノ工事ヲ妨害シ若クハ之ヲ阻止シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第六十三條 己レニ屬セサル電報ヲ開封シ若クハ私用シ或ハ毀棄汚穢抑留隱匿シ若クハ受取人ニ非サル者ニ交付シ及其情ヲ知テ之ヲ收受シタル者ハ一月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第六十四條 電信切手ヲ偽造變造シ又ハ其情ヲ知テ之ヲ使用シタル者ハ一年以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第六十五條 己レ貼用シタル電信切手ヲ再ヒ貼用シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第六十六條 電信事務ヲ奉スル者前數條ノ罪ヲ犯シタルトキハ各本刑ニ照シ一等ヲ加フ

第六十七條 電信局長ノ許可ヲ得スシテ通信室ニ入りタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス之ヲ入レタル者ハ一等ヲ加フ

第六十八條 電信事務ヲ奉スル者私報ノ旨意ヲ漏泄シタルトキハ三月以上三年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス但法律規則ニ從ヒ開披説明スルハ此限ニラヌ

官報及局報ノ旨意ヲ漏泄シタル者ハ一等ヲ加フ

第六十九條 電信事務ヲ奉スル者頼信紙ニ貼用シタル切手ヲ剝取タルトキハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

其未タ消却ナサ、ル切手ヲ剝取タル者ハ刑法竊盜ノ本條ニ照シテ處斷ス

第七十條 電信事務ヲ奉スル者故ナクシテ通信ノ依托ヲ拒ミタルトキハ四圓以上四十圓以下ノ罰金ニ處ス

第七十一條 疎虞懈怠ニ因リ電報ヲ遺失シ又ハ傳送配達ヲ延滯シタル者ハ一圓以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス

第七十二條 配達人謝儀若クハ不當ノ賃錢ヲ要求シタルトキハ五十錢以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス

第七十三條 第五十八條第六十二條第六十四條第六十五條ニ記載シタル罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ刑法未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

第七十四條 第六十四條第六十九條ニ記載シタル罪ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ處シタル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ附ス

(六九)電信取扱規則(明治十八年五月七日)

第一章 電報

第一條 官報トハ各官廳ノ公信並締盟國ノ大臣長官陸海軍將帥公使及領事ノ通信ヲ云フ但商人ニシテ領事ヲ兼ムル者ヨリ發出スル電報ハ在官者ニ宛テ且公務ニ關スルモノニ非サ

レハ官報ト爲サス

第二條 局法トハ電信事務ニ關シ電信局及中央局并分局相互ニ送受スル通信ヲ云フ

第三條 私報トハ官報局報ヲ除クノ外諸般ノ通信ヲ云フ

第四條 發信人ハ條例第二條ニ記載シタル各類ノ電報ヲ單用シ又ハ併用スルコトヲ得

第五條 至急電報ハ通常電報ヨリ先ニ傳送シ同種類ノ電報ハ發信局ニ於テハ受托ノ前後ニ

由リ中繼局ニ於テハ受信ノ順序ニ從テ傳送スルモノトス

第二章 電報書法

第六條 電報ニ用フル文字及數字ハ莫爾斯字號ニ翻書スルコトヲ得ヘキモノニ限ル

第七條 莫爾斯字號左ノ如シ

(莫爾斯字號略之)

第八條 普通辭トハ和文ハ片假名歐文ハ羅句語又ハ常ニ通用スル歐洲國語ニシテ其意味ノ

通解シ易キモノヲ云フ但電報新書及電報新編ニ依リ語辭ニ代用スル數字ヲ以テ書シタル

電報ハ普通辭ト看做スヘシ

第九條 秘辭トハ普通辭ニ非ス文字又ハ數字ノ孤立或ハ聯集シテ其意味ノ通解シ難キモノ

ヲ云フ

第十條 隱語トハ每語ニハ通スヘキ意味アルモ作文全体ニ於テ通解シ難キモノヲ云フ

第十一條 普通辭中秘辭ヲ用ヒタルトキハ括弧ヲ以テ秘辭ノ前後ヲ圍ムヘシ

第十二條 秘辭ヲ用ヒタル私報ニハ文字ト數字トヲ混用スヘカラス

第十三條 普通辭ヲ用ヒタル和文ニハ數字ヲ混用スルコトヲ得

第十四條 和文ニハ普通辭秘辭隱語ヲ問ハヌ第十五條ノ場合ヲ除クノ外ハ亞刺比亞數字ヲ

插入スヘカラス

第十五條 和文ニハ歐字及之ニ附屬シタル亞刺比亞數字ヲ插入スルコトヲ得但小括弧ヲ以

テ之ヲ區別スヘシ

第十六條 受信人ノ住所氏名ハ着信地ニ於テ配達シ易キ爲メ詳ニ之ヲ肩書スヘシ若シ町村

名等他ニ類似ノ地名アルモノハ府縣名又ハ國名及郡區名ヲ記スヘシ但詳明ヲ要スルモ贅

語ヲ用フヘカラス

第十七條 宛名ノ不十分ヨリ起リタル損失ハ總テ發信人ノ負擔タルヘシ

第十八條 受信人ノ住所氏名ハ豫メ電信局ト約定シテ略號ヲ常用スルコトヲ得

第十九條 第七條ニ記載シタル略符號ハ賴信紙中受信人ノ名下ニ記スヘシ若シ普通ノ文字

ヲ以テ記シタルトキハ發信局ニ於テ之ヲ略符號ニ改書スルモノトス

第二十條 發信人ノ賴信紙中ニ記シタル略符號判然タラサルモノハ都テ通常電報ト爲シテ

取扱フヘシ

第三章 字數計算

第二十一條 和又電報ノ住所氏名ハ字數ニ算入セス歐文電報ノ住所氏名ハ語數ニ算入ス

例

ビ 二字
ハ 二字

第二十三條 和文中ニ用ヒタル數字歸除線句讀點及第十五條ニ記載シタル歐字及之ニ附屬シタル亞刺比亞數字ハ其一字又ハ一個ヲ片假名一字ニ計算スヘシ

例

八八^三_六
セキタンサン、ヒヤクエン
セキタン、サンヒヤクエン

[a. 150]

數字歸除線
合セテ五字
文字句讀點合
セテ十二字
全
小括弧歐字及亞刺比亞
數字合セテ八字

第二十四條 和文中ニ用ヒタル括弧及小括弧ハ之ヲ片假名二字ニ計算スヘシ

第二十五條 歐文ハ一語ノ聯綴十五字ヲ超ヘサルモノハ之ヲ一語ニ計算シ十五字ヲ超ヘタルモノハ又之ヲ一語ニ計算スヘシ

第二十六條 歐文中文字又ハ數字ノ孤立シタルモノハ之ヲ一語ニ計算スヘシ

第二十七條 歐文中聯記シタル數字五個ヲ超ヘサルモノハ之ヲ一語ニ計算シ五個ヲ超ヘタルモノハ又之ヲ一語ニ計算スヘシ

例

17111
17781h
一語數字文字合
セテ四個
二語 合 六個

第二十九條 歐文數字中ニ用ヒタル分數點續點及歸除線ハ一個ヲ一字ニ計算スヘシ

例

44,55
44,560
510¹₂
一語數字分數點
合セテ五個
二語 數字續點合
セテ六個
二語 數字歸除線
合セテ六個

第三十條 歐文中ニ記入シタル句讀諸點連續點略符新章ハ之ヲ語數ニ計算セス但此記號ハ必シモ傳送スルヲ要セス

第三十一條 歐文中連續點ヲ以テ繋キタル辭及略符ヲ以テ分チタル辭ハ其分辭毎ニ一語ニ計算スヘシ

例

Weston-super-mare
New-york

三語

L,ye

二語

二語

第三十二條 歐文中字下線ヲ每語ニ引キ又ハ二語以上ニ繋ケテ引クトキハ一個ヲ一語ニ計
算スヘシ

例

The matter is urgent;
leave at once

七語并字下線二個
合セテ九語

第三十三條 歐文中ニ用ヒタル括弧轉倒句讀ハ之ヲ一語ニ計算スヘシ

第三十四條 歐文普通辭中秘辭ノ雜リタルモノハ其普通辭ハ通常ノ例ヲ以テ之ヲ計算シ數
字又ハ文字ノ聯集シタルモノハ數字ノ例ニ依テ之ヲ計算シ第八條ニ記載シタル國語ニ非

第三十五條 歐文中國語ノ用法ニ返シテ語辭ノ聯綴シタルモノ若シハ省略シタルモノハ普
通辭ノ例ヲ以テ計算スルコトヲ得ス然レトモ府縣名地名其他官位氏名等及文字ニテ記載
シタル數目ハ發信人ニテ之ヲ顯明ニスル爲メ用ヒタル語數ニ因テ計算スヘシ

第三十六條 第七條ニ記載シタル略符號ハ和文ハ二字歐文ハ一語ニ計算スヘシ

第四章 電報料及手數料

第三十七條 國內一市内及壹岐對馬ヲ除クヲ通スル電報料左ノ如シ

一和文 片假名十字以内一音信金十五錢
十字以内ヲ加フル毎ニ金十錢ヲ増ス

一歐文 一語毎ニ 金十錢
五語以内ハ總テ金五十錢トス

第三十八條 一市内ニ發着スル電報料左ノ如シ

一和文 片假名十字以内一音信金五錢
十字以内ヲ加フル毎ニ金三錢ヲ増ス

一歐文 一語毎ニ 金三錢
五語以内ハ總テ金十五錢トス

第三十九條 至急官報ノ電報料ハ通常電報料ノ二倍トス

第四十條 至急私報ノ電報料ハ通常電報料ノ三倍トス

第四十一條 追尾電報料ハ追尾一回毎ニ原信電報料ノ半額ヲ増ス

第四十二條 同文電報料ハ原信ヲ除クノ外一通毎ニ和文ハ金五錢歐文ハ金十五錢トス

- 第四十三條 照校電報料ハ原信電報料ノ半額ヲ増ス
- 第四十四條 受信電報料ハ和文ハ一音信歐文ハ五語ノ料金ヲ増ス
- 第四十五條 電報料ニ一錢未滿ノ端數ノ生シタルトキ其端數ハ切捨ルモノトス
- 第四十六條 歐文電報ノ住所氏名ノ略號常用料ハ一ケ年正貨十圓トス
- 第四十七條 條例第三十條ノ電報受取證書ノ手数料ハ金三錢トス
- 第四十八條 條例第三十九條ノ別使配達料ハ九丁毎ニ金三錢トス
- 第四十九條 條例第三十九條ノ解船配達料ハ金二十錢トス
- 第五十條 條例第四十五條ノ原信正寫ノ手数料ハ和文百字以内毎ニ金貳錢歐文百語以内毎ニ金十錢トス
- 第五十一條 料金ノ還付ヲ請求スルトキハ不達ニ係ルモノハ若信局又ハ受信人ノ書面ヲ添ヘ誤謬遅延ニ係ルモノハ受信人ニ到達シタル電報ノ原書ヲ添ヘ發信人ヨリ電信局長ニ申立ヘシ但時宜ニヨリ受信人ヨリ申立ルコトヲ得
- 第五十二條 電報遅延ノ申立ハ郵便ニテ遞送スル時日ヨリモ後レテ届先ニ達シタルモノニ限ルヘシ
- 第五十三條 料金ヲ還付スルトキ前ニ電信切手又ハ郵便切手ヲ以テ納メタルモノハ電信切手ニテ還付シ通貨ヲ以テ納メタルモノハ通貨ニテ還付スヘシ
- 第五十四條 同文電報ノ内若干通ノ料金ヲ還付スルトキハ原信ノ料金及通數ニ因テ收入シタル料金ヲ併セ之ヲ總通數ニテ除算シ其得數ヲ以テ還付スヘキ一通ノ額トスヘシ
- 第五十五條 料金ノ追納方ヲ通知シタルトキハ其通知ノ日ヨリ七日以内郵便性復ノ日數ヲ除クニ納ムヘシ此期限ヲ過ルトキハ條例第十八條ニ據テ處分スヘシ
- 第五十六條 發信人又ハ受信人ヨリ料金ヲ追納スルトキハ電信中央局又ハ分局ノ追徴證書ニ據リ電信切手若シハ通貨ヲ以テスヘシ又郵便切手ヲ以テ電信切手ニ代用スルコトヲ得ヘキ地ニ在テハ郵便切手ヲ以テスルコトヲ得但其通貨又ハ郵便切手ハ電信中央局及分局ニ於テ電信切手ニ換ユルモノトス

第五章 電報發送

- 第五十七條 發信人ハ電報一通ニ三名マテ連署スルコトヲ得
- 第五十八條 受信人ノ便利ヲ圖リ電報ヲ電信中央局又ハ分局ニ預ケ置カントスルトキハ其局宛トナスモ妨ケナシ
- 第五十九條 電報ノ受取證書ニハ其手数料ニ當ル電信切手ヲ貼付シ且消印シテ交付スヘシ
- 第六十條 郵便ニテ電報ヲ發出スルトキハ電報文ト郵便切手トヲ合封シ其近傍ノ電信分局ヘ宛テ之ヲ差出スヘシ
- 第六十一條 郵便ニテ發出シタル電報ニテ閉局後ニ受取リタルモノハ翌日開局ノ時傳送ノ手續ヲナスモノトス

第六十二條 發信人速ニ返信ヲ望ミ發信局ニ在テ之ヲ待ツトキハ局待ノ略符號ヲ以テ指定スヘシ

第六十三條 發信人電報ノ受信家へ到達スル時他人ノ披見スルゴトヲ憚ルトキハ綴展ノ略符號ヲ以テ指定スヘシ

第六十四條 別使ヲ以テ配達スヘキ電報ハ別使配達ノ略符號ヲ以テ指定スヘシ

第六十五條 別使ヲ以テ配達スヘキ電報ニシテ發信局ニ於テ里程分明ナラサルトキハ發信人ニ豫算ノ金額ヲ納メシメ著信局ニ於テ實地ノ調査ヲナシ過剩アツハ發信人ニ還付シ不足アツハ受信人ヨリ徵收スヘシ

第六十六條 郵便ヲ以テ遞送スヘキ電報ハ郵便又ハ書留郵便ノ略符號ヲ以テ指定スヘシ但別配達郵便ハ之ヲ取扱ハス

第六十七條 艦船宛ノ電報ニシテ解船ヲ以テ配達スヘキモノハ解船配達略符號ヲ以テ指定スヘシ

第六十八條 艦船宛ノ電報ニシテ別使ヲ以テ配達スヘキモノハ解船配達并別使配達ノ略符號ヲ以テ指定スヘシ

第六十九條 艦船宛ノ電報ニシテ解船配達ノ指定ナク實際解船ヲ要スルトキハ其解船料ヲ受信人ヨリ徵收スヘシ

第七十條 島嶼配達ノ電報著信局ヨリ一里内外ニ拘ハラズ別使又ハ郵便ヲ用フヘキニ依リ何レカ其略符號ヲ以テ指定スヘシ但其記入ナキモノハ先拂郵便ヲ以テ遞送スヘシ

第七十一條 島嶼ノ別使配達料ハ水陸トモ實費ヲ徵收スヘキニ依リ發信人ヨリ豫算ノ金額ヲ發信局へ納ムヘシ其過不足ハ第六十五條ニ依リ處分スヘシ

第七十二條 電報ハ著信局ニ於テ受信シタル順序ニ依リ配達スヘシ

第七十三條 電報ハ送達紙ニ記シテ配達スヘシ

第七十四條 受信人ニ配達スル送達紙ニハ無手数料ニテ其發信局名及依托ノ月日時分ヲ記スルモノトス

第七十五條 送達紙ニ記載シタル宛名ノ者他所へ移轉シ其居所分明ナルモノ一里ヲ超ヘサルトキハ別ニ手数料ヲ要セスシテ配達スヘシ一里ヲ超ユルトキハ郵便ヲ以テ遞送スヘシ

第七十六條 條例第三十四條ニ依リ受信人豫テ電報ヲ受取ルヘキ人名ヲ指定スルトキハ其旨書面ヲ以テ申出置クヘシ

第七十七條 電信中央局又ハ分局ニ預リ置キ及留置ク電報ハ其發信人及受信人ノ住所氏名ヲ詳記シテ七日ヨリ少ナカラサル間其局前ニ揭示スヘシ

第六章 至急電報
第七十八條 官報私報ヲ問ハス通常電報ニ先テ傳送ヲ要スルモノハ至急電報ノ略符號ヲ

以テ指定スヘシ

第七十九條 至急電報ニシテ返信料ヲ前納シ其返信モ至急電報ト爲ストキハ至急電報ノ略符號次ニ「ヘ」シ「ン」シ「ヤ」ウ「ト」記スヘシ

第七章 追尾電報

第八十條 發信人豫メ受信人ノ轉居又ハ旅行等ヲ知リテ電報ヲ追送セントスルトキハ追尾電報ノ略符號ヲ以テ指定スヘシ

第八十一條 追尾電報ノ第一著局以外ノ料金ハ受信人ヨリ徴收スヘシ但一市内ニテ追送スルモノハ料金ヲ要セス

第八十二條 追尾電報ノ頼信紙ニハ追尾スヘキ受信人ノ居所ヲ逐次ニ記スヘシ

第八十三條 追尾電報ノ略符號アルモ追尾スヘキ居所ヲ逐次ニ記セサルモノニシテ若シ受信人不在ノトキ更ニ追尾スヘキ居所ヲ知ルコトヲ得タルトキハ直ニ之ヲ追送スヘシ若シ追送スヘキ居所不分明ナルカ又ハ之ヲ追送スルモ受信人ヲ尋得サルトキハ電報ヲ留置クヘシ

第八十四條 追尾電報ノ略符號アリテ且追尾スヘキ居所ヲ逐次ニ記シタルモノハ受信人ニ達スルマテ逐局之ヲ傳送シ若シ受信人ヲ尋得サルトキハ其終尾ノ局ニ於テ前條ニ依テ之ヲ取扱フヘシ但追尾電報ノ本文ハ固ヨリ一字モ省略セス逐局之ヲ傳送ス然レトモ逐書シ

タル居所ハ其當サニ送ルヘキモノ、ミチ存シ己ニ經過セシモノハ之ヲ削除スヘシ

第八十五條 追尾ノ指定ナキ電報ニテモ受信家ノ者ヨリ之ヲ追尾電報ト爲ストキハ更ニ改追尾電報ノ略符號ヲ以テ指定シ之ヲ逐局傳送スルコトヲ得

第八十六條 追尾電報ニシテ其返信料ヲ前納スルトキハ追尾電報ノ略符號ノ次ニ返信料前納ノ略符號ヲ記シ第一著局マテノ返信料ヲ前納スヘシ

第八十七條 返信料ヲ前納シタル電報ヲ更ニ追尾電報ト爲ストキハ返信料前納ノ略符號ノ次ニ改追尾電報ノ略符號ヲ記スヘシ其著信局ニ於テハ第一著局マテノ返信料ヲ受信人ニ交付ス

第八十八條 何人ニテモ電報ノ配達ヲ受ル所ノ電信分局へ移轉等ノ事由ヲ書面ニテ申出置キ其電報ノ到着次第追尾電報ノ規則ニ依リ再送ヲ受ント請求スルコトヲ得此電報ハ著信局ニ於テ更ニ改追尾電報ノ略符號ヲ以テ指定シ移轉ノ居所所在ノ著信局へ追送スヘシ

第八十九條 追尾電報ヲ著信局ヨリ一里ヲ超ヘタル地ニ遞送スルトキハ前拂郵便ヲ用ヒ其送達紙中ニ電報料及郵便税ノ金額ヲ記シ之ヲ追徴ス

第九十條 受信人ニ配達スル追尾電報ノ送達紙ニハ第一發信局ノ局名月日時分ヲ記スルモノトス

第九十一條 追尾電報ヲ傳送シタル後受信人ノ所在不分明ニテ配達シ得サルトキ又ハ受信

人ヨリ追尾料金を出スコト拒ムトキハ其追尾依託人ニ事實ヲ報シテ其料金を追徴ス

第八章 同文電報

第九十二條 發信人ヨリ同時ニ同文ノ電報ヲ一市内又ハ一市内ニ非サルモ著信局ヲ同クスル地方ニ住シテ居所ヲ異ニスル數名ヘ差出サントスルトキハ同文電報ノ略符號ヲ以テ指定スヘシ

第九十三條 同文電報ノ頼信紙ニハ初筆ノ受取人ノ名下ニ略符號ト受信人ノ員數ヲ記スヘシ

第九十四條 同文電報ハ原信一通ニ定則ノ電報料ヲ課シ其餘ハ一通毎ニ同文電報料ヲ課スルモノトス

第九十五條 照校電報ヲ同文電報ト爲ストキ同文電報ノ略符號ノ次ニ照校電報ノ略符號ヲ記スヘシ其電報ハ原信一通ニ照校電報料ヲ課シ其餘ハ同文電報料ノミナ課スルモノトス

第九十六條 受信電報ヲ同文電報ト爲ストキハ同文電報ノ略符號ノ次ニ受信電報ノ略符號ヲ記シ同文電報ノ外其通數ニ應ジ受信電報料ヲ納ムヘシ

第九十七條 同文電報ハ發信人ニ於テ送達紙各通ニ受信人ノ連名ヲ記スルコトヲ請求セザルトキハ一通毎ニ一名ノミナ記スルモノトス故ニ之ヲ請求スル者ハ同文電報ノ略符號ノ

次ニ「レン」ト記スヘシ

第九十八條 住居ヲ同ジスル者ニ宛タル電報ニモ同文電報ト爲スニ非サレバ電報一通ニ三名ヲ超ヘタル連名ヲ記スルコトヲ得ス

第九十九條 同文電報ヲ送達スルニ或ハ郵便ヲ以テシ或ハ別使ヲ以テスル等各配達ノ方法ヲ異ニスルモノハ受信人ノ名下ニ一々郵便配達若クハ別使配達ノ略符號ヲ以テ指定スヘシ

第九章 照校電報

第一百條 發信人ニ於テ電報中字句ノ誤謬ヲ豫防セントスルトキハ照校電報ノ略符號ヲ以テ指定スヘシ

第一百一條 照校電報ハ各局傳送ノ際全文ヲ校正スルモストス

第一百二條 返信料ヲ前納シタル照校電報ニテ其返信モ亦照校電報ト爲ストキハ照校電報ノ略符號ノ次ニ「レン」ト記スヘシ

第十章 受信電報

第一百三條 發信人電報ノ正ニ受信人ニ到達セシヤ否ヤノ報知ヲ受ゲントスルトキハ受信電報ノ略符號ヲ以テ指定スヘシ

第一百四條 受信報知ヲ要スル電報ノ發信人ニハ受信人ノ電報ヲ受取リタル時刻ヲ報知スヘシ

第五百五條 受信電報ハ其原信ノ種類ニ依テ之ヲ傳送スヘシ

第五百六條 受信報知ヲ要スル電信ヲ受信人ニ配達スル能ハサルモキハ著信局ニ於テ先ツ發信局ニ其旨ノ局報ヲ送ルヘシ然ル後電報ヲ配達スルコトヲ得タルトキハ直ニ受信電報ヲ送ルヘシ若シ局報ヲ送りタル後二十四時ヲ過クルモ尙配達スル能ハサルトキハ更ニ其事由ヲ確報スヘシ

第五百七條 受信報知ヲ要スル電報ニシテ其著信局ヨリ受信人へ別使又ハ郵便ヲ以テ配達スヘキモノハ受信電報ノ略符號ノ次ニ別使配達若シハ書留郵便配達ノ略符號ヲ記スヘシ其郵便ヲ以テ配達スヘキモノハ郵便局へ付托セシ時刻ヲ答辨ス

第五百八條 發信人配達區外ニ居住スルニ依リ別使又ハ郵便ヲ以テ受信電報ノ配達ヲ得ントスルトキハ賴信紙ノ端末ニ「別使」又ハ「郵便」ト記シ其別使料又ハ郵便稅ヲ前納スヘシ

第十一章 返信料前納
第五百九條 發信人ニ於テ受信人ヨリ納ムヘキ電報料ヲ前納シテ返信ヲ受ケントスルトキハ返信料前納電報ノ略符號ヲ以テ指定スヘシ

第六十條 一音信又ハ五語ヲ超ヘテ返信料ヲ前納スルトキハ返信料前納ノ略符號ノ次ニ其字數又ハ語數ヲ記スヘシ

例

和文 (ナツ二〇)

歐文 (R.P. 6) 又ハ (R.P. 10)

第六十一條 返信料ハ原信料ノ三倍ニ超ヘテ前納スルコトヲ得ス又歐文五語未滿ノ料金を前納スルコトヲ得ス

第六十二條 返信ノ爲メ前納スル料金は通貨ヲ以テスルモ妨ナシ但著信局ニ於テハ此料金は當ル電信切手ヲ以テ電信ト共ニ受信人ニ交付スヘシ

第六十三條 返信料前納ノ電報ヲ受信人ニ交付スルコト能ハス又ハ受信人ニ於テ返信料ヲ受領スルコトヲ拒ムトキハ其旨ヲ著信局ヨリ電報ヲ以テ發信局ヲ經テ發信人ニ報知シ其報知ノ電報ハ返信ノ代ト看做シテ前納シタル金額ヲ收入スヘシ但和文一音信以上歐文五語以上ノ料金ヲ前納シタルモノハ一音信若シハ五語前ヲ納メテ其餘ハ發信人ニ還付スヘシ

第六十四條 返信料前納ノ電報ヲ郵便ニテ送達スルトキハ著信局ニ於テ電信切手ヲ電報ト共ニ封入シ書留郵便ヲ以テ遞送スヘシ

第六十五條 前條ノ場合ニ於テハ返信料前納ノ略符號ノ次ニ書留郵便ノ略符號ヲ記スヘシ

第六十六條 返信料前納電報ノ受信人ヨリ發スル返信ハ何時何地方ニテモ隨意ニ之ヲ送ルコトヲ得

第十二章 尋問改正

第一百七條 條例第四十三條第四十四條ニ依リ既送現送ノ電報ニ關シ發信人又ハ受信人ノ依頼ニ依リ傳送スル電報ハ其種類ニ依リ取扱フモ之ヲ往復スルニハ局名ヲ以テスルモノトス

第十三章 原信正寫

第一百十八條 原信ノ正寫ニハ其手數料ニ當ル電信切手ヲ貼付シ且消印シテ交付スルベシ

○明治十六年二月十日第五號布告

水底電信線路ニ於テ投錨漁業採藻等ノ禁ヲ犯ス者ハ二圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

〔七〇〕蠶種検査規則(明治十九年八月十七日 農商務省令第九號)

蠶種微粒子病(一名黒痣病)豫防ノ爲蠶種検査規則左ノ通相定メ原種ノ検査ハ明治二十年検査期ヨリ施行シ製糸用種ノ検査ハ同二十一年検査期ヨリ施行ス

第一條 凡ソ蠶種ヲ製造シ又ハ蠶種ヲ販賣セントスル者ハ管轄廳ニ願出テ鑑札ヲ受クベシ

第二條 蠶種ヲ製造スル者ハ此規則ニ從ヒ其検査ヲ受クベシ

第三條 検査證印ナキ蠶種ハ販賣又ハ飼育スルコトヲ得ス

第四條 蠶種検査所ハ管轄廳ニ於テ管内便宜ノ地ニ之ヲ設置スベシ但地方ノ狀況ニ由リ巡

廻検査ヲナスモ妨ケナシ

第五條 蠶種検査員管轄廳ニ於テ之ヲ命スベシ但検査ノ方法ハ別ニ訓令ヲ以テ之ヲ定ム

第六條 春蠶種ノ検査ハ毎年十月一日ヨリ始メ夏蠶種秋蠶種ノ検査期日ハ管轄廳ニ於テ適宜之ヲ定ムルモノトス

第七條 蠶種ヲ製造スル者ハ春蠶種ノ掃立枚數及ヒ製造額ヲ毎年七月三十一日マテニ夏蠶種秋蠶種ノ掃立枚數及ヒ製造豫算額ヲ検査期日ヨリ三十日以前ニ管轄廳ニ届出ツベシ

第八條 蠶種ニハ製造人ノ住所氏名又ハ會社若クハ組合ノ名稱ヲ記シ之ヲ原種販賣用種ノ製造ニ用フルモノヲ云フ

ト製糸用種トニ區別シテ検査所ニ差出スベシ

第九條 病毒ノ歩合原種ニ於テハ百分ノ五以下製糸用種ニ於テハ百分ノ十五以下ノモノニ検査證印ヲ付シ其以上ニ及フモノニハ都テ廢棄證印ヲ付スルモノトス

第十條 廢棄證印アル蠶種ハ販賣又ハ飼育スルコトヲ得ス

第十一條 蠶種ヲ製造シ又ハ蠶種ヲ販賣スル者廢業スルカ他ノ管轄地ニ寄留若クハ轉籍スルトキハ其旨ヲ管轄廳ニ届出テ鑑札ヲ返納スベシ但寄留若クハ轉籍地ニ於テ營業セントスルトキハ第一條ニ據ルベシ

第十二條 第一條第三條第十條ニ違ヒタル者ハ二圓以上二十五圓以下ノ罰金ニ處ス

〔キ〕(七一)牛馬賣買免許規則(明治五年十一月四日)

牛馬賣買渡世ノ者免許稅ノ儀昨辛未十二月中大藏省ヨリ相達候處今般別紙規則書之通相定
ノ候條各管内共區々ノ取計無之様可致候事

第一條 各管轄所ニ於テ其管下牛馬賣買渡世ノ者取調牛馬壹鼻綱ニ付免許鑑札壹枚相渡可
申事

但シ壹鼻綱ハ牛馬共七匹ニ限リ鑑札壹枚ヲ所持スル者旅行ノキハ七匹以内二枚ヲ所持
スル者ハ十四匹ニ限ル可シ其餘准之可申事

第二條 (明治七年四月二十日第四十五號布告ヲ以テ左ノ通り改正ス)

一 免許鑑札新規願受候者六月以前ハ全年分七月以後ハ半年分納稅致シ廢業ノ者七月以後
ハ全年分六月以前ハ半年分納稅可致事

第三條 免許鑑札萬一燒失流盜難等ニテ失ヒ候モノ有之其段申出候ハ、事實取調鑑札相
渡可申事

第四條 免許鑑札壹枚ニ付一ヶ年稅金一圓上納可致事

○明治八年七月七日第百十五號布告ヲ以テ但書左ノ通り改正ス

但シ右稅金ハ每年二月八月兩度ニ半額宛各管廳ニ取立租稅寮ニ上納可致尤モ新規免許
ノ者ハ其都度半額直ニ取立上納可致事

第五條 免許鑑札燒印並ニ押切判ハ雛形ノ通り其管轄所ニテ製造致シ各稼人共ニ相渡可申
事

但シ鑑札相渡次第稼人共國郡町村名及ヒ名面詳細取調右鑑札印鑑相添ニ當省ニ可差出
事

第六條 右様取締相立候上ハ向後無鑑札ニテ賣買不相成萬一無鑑札ニテ密々賣買候者有之
相顯ルニ於テハ牛馬共取上免許稅十倍ノ料料可申付事

但シ密賣買候者他ヨリ見出シ訴出ルニ於テハ其訴主ニ取上ケ牛馬拂代金ノ十分ノ二
褒美トシテ被下候事

第七條 取上牛馬拂代並ニ料料金等ノ儀ハ第四條但書ニ照準上納可致事

第八條 此規則施行候ニ付諸入費ハ一ヶ年試驗ノ上可申立事

第九條 一免許鑑札ハ貸借決テ不相成候事

但免許鑑札借受ケ賣買スル者ハ規則第六條密賣買ノ廉ニ照ラシ處分可致貸渡候者ハ免
許稅五倍ノ料料可申付事

(七二)危害品積込規則(明治六年八月九日)

危害ヲ生スヘキ物品ヲ漫リニ船積致シ候テハ他ノ物品ヲ傷害シ甚タシキハ全船ヲ失ヒ人命

ヲ損シ不容易儀ニ付左ノ條件ノ法律ヲ定メ當明治六年十月一日ヨリ令施行候條此旨布告候事

一 火藥硝石硫黃ノ類及ヒ發火シ易キ製藥品其他油脂醬液並ニ腐敗シ易キ性質ニシテ他物ヲ損害スヘキ物品船積致シ候キハ其品名ヲ表包ノ外部ニ書キ記シ或ハ其送狀ニ記載致シ船主船長又ハ運漕會社危難請合會社等ノ承諾ヲ得テ後ヲ差出スヘシ若シ其手數無之尋常ノ荷物ト詐リ之ヲ船積致シ或船積セント謀ルモノハ金五百圓以内ノ罰金ニ處スヘキ事

一 尋常ノ品物トシテ差出シタル荷物ノ内ニ前條ノ如キ危害品有之ト見受候キハ船主船長運漕會社危險請合會社ハ何時ヲ限ラス何地ヲ論セス直ニ發包シテ之ヲ視查スルノ權利可有之事

但シ爲視查發包シタル荷物中ニ危害品無之キハ船主會社等ノ入費ヲ以テ故ノ如ク荷造可致然レモ其荷物中ニ危害品有之キハ其等ノ入費都テ荷主ヨリ可拂事

一 危害品ヲ船積セサル以前運漕會社又ハ危險請合會社ノ倉庫ニ於テ見出スルキハ之ヲ安全ノ場所ニ移シ置キ直ニ其管轄廳或ハ裁判所ヘ可届出事

但シ安全ノ場所ニ之ヲ移スノ費用ハ荷主ヨリ辨償可致事

一 此ノ危害品ヲ既ニ船積シタル後ヲ見出シ之レヲ安全ノ場所ニ保テ難キキハ船中ニ於テ三人以上ノ保證人ヲ立テ之ヲ海中ニ投棄シ著港上直ニ其次第書及ヒ荷主ノ姓名ヲ其地

ノ管轄廳或ハ裁判所ヘ可届出事

但投棄シタル荷物及從是生スル荷生ノ損失ヲ辨償スルニ不及事

一 船長及ヒ運送會社等荷主ト申合セ此ノ危害品ヲ尋常ノ荷物トシテ船積ミシ或ハ船積ミセント謀ルモノハ金五百圓以内又之レヲ見出スト雖官官ニ訴ヘ出サルキハ金二百圓以内ノ罰金ニ處スヘキ事

(七三) 金祿公債証書發行條例 (明治九年八月)

第百八號布告

第一條 華士族及ヒ平民トモ各自ノ家祿賞典祿給與ノ制限ヲ改メ一時ニ之ヲ下渡スト爲

シ以テ公債証書ヲ附與ス可シ

一 永世祿ノ者ヘハ

金祿元高(賞典祿アルモノハ家祿ニ合計シ元高トス)年限

七方圓以上

五ヶ年分

(七方圓未滿六萬圓以上)

五ヶ年二分五厘分

(六方圓未滿五萬圓以上)

五ヶ年半分

(五方圓未滿四萬圓以上)

五ヶ年七分五厘分

(四方圓未滿三萬圓以上)

六ヶ年分

- (三万圓未滿二萬圓以上) 六ヶ年二分五厘分
 - (二万圓未滿一万圓以上) 六ヶ年半分
 - (一万圓未滿七千五百圓以上) 六ヶ年七分五厘分
 - (七千五百圓未滿五千圓以上) 七ヶ年分
 - (五千圓未滿二千五百圓以上) 七ヶ年二分五厘分
 - (二千五百圓未滿千圓以上) 七ヶ年半分
- 右一ヶ年五分ノ利子ヲ給ス

- (千圓未滿九百圓以上) 七ヶ年七分五厘分
- (九百圓未滿八百圓以上) 八ヶ年分
- (八百圓未滿七百圓以上) 八ヶ年二分五厘分
- (七百圓未滿六百圓以上) 八ヶ年半分
- (六百圓未滿五百圓以上) 八ヶ年七分五厘分
- (五百圓未滿四百五十圓以上) 九ヶ年分
- (四百五十圓未滿四百圓以上) 九ヶ年七分五厘分
- (四百圓未滿三百五十圓以上) 九ヶ年半分

- (三百五十圓未滿三百圓以上) 九ヶ年七分五厘分
 - (三百圓未滿二百五十圓以上) 十ヶ年分
 - (二百五十圓未滿二百圓以上) 十ヶ年二分五厘分
 - (二百圓未滿百五十圓以上) 十ヶ年半分
 - (百五十圓未滿百圓以上) 十一ヶ年分
- 右一ヶ年八分ノ利子ヲ給ス
- (百圓未滿七十五圓以上) 十一ヶ年半分
 - (七十五圓未滿五十圓以上) 十二ヶ年分
 - (五十圓未滿四十圓以上) 十二ヶ年半分
 - (四十圓未滿三十圓以上) 十三ヶ年分
 - (三十圓未滿二十五圓以上) 十三ヶ年半分
 - (二十五圓未滿以下) 十四ヶ年分

一終身祿ノ者ハ

右永世祿年限十分ノ五ヲ給ス
但利子ハ永世祿ノ割合ニ同シ

一年限祿ノ者ハ

十一年以上ノ者ハ右永世祿年限十分ノ四ヲ給ス

(十年未滿八年以上ノ者ハ右永世祿年限十分ノ三五ヲ給ス

(八年未滿六年迄ノ者ハ右永世祿年限十分ノ三ヲ給ス

(六年未滿四年迄ノ者ハ右永世祿年限十分ノ二五ヲ給ス

(四年未滿三年迄ノ者ハ右永世祿年限十分ノ二ヲ給ス

二年ノ者ハ右永世祿年限十分ノ一五ヲ給ス

但利子ハ永世祿ノ割合ニ同シ

第二條 此ノ公債証書ノ利子下渡シハ明治十年分ハ十一月翌年五月ニ相渡シ以後之ニ準シ年々兩度ニ下ケ渡ストス

「但シ利子下ケ渡シ混淆セサル爲メ毎年四月一日ヨリ五月二十八日マテ十月一日ヨリ十一月廿八日マテハ証書ノ讓渡シ賣買等ノ届出(圍點ヲ施ス三字ハ明治十二年七月五日第廿六號布告ヲ以テ追加シタルモノニ係ル)ヲ見合ス可シ」

明治十一年
年第七十六
號布告ヲ
以テ但書
追加

第三條 家祿賞典祿元高ヲ附與スル年限ニヨリテ利子ノ差異ヲ生ズルキハ元高ニ向テ公債証書ヲ付與スル年限左ノ如シ

一金壹萬圓

家祿賞典祿合高

此六ヶ年半分金六萬五千圓此公債証書ノ利子一ヶ年五分金三千二百五十圓ト爲ル

一金九千九百圓

家祿賞典祿合高

此六ヶ年七分五厘分金六萬六千八百二十五圓此公債証書ノ利子一ヶ年五分金三千三百四十一圓二十五錢ト爲ル

右比較九千九百圓ノ方利子九十一圓二十五錢ノ過ト成ル然ルキハ壹萬圓ノ利子金額ニ超過セサルヲ以テ制限トナル故ニ九十一圓二十五錢ヲ引去リ利子三千二百五十圓ニ適當スル公債証書ヲ下渡スヲ以テ規則トス其他右ニ類似ノ件ハ皆之ニ準ス

第四條 此公債証書ハ利子ノ差ニヨリ區別アルト云凡其發行スル種類ハ左ノ如シ

五圓	十圓	二十五圓	五十圓	百圓
三百圓	五百圓	千圓	五千圓	

第五條 前條公債証書ヲ付與スルキニ當リテハ公債証書ニ未滿ノ端金ハ總テ通貨ニテ相渡ス

第六條 此公債証書ノ元高ハ五ヶ年間之ヲ据置キ六ヶ年目ヨリ大藏省ノ都合ニ因リ毎年抽籤ノ方法ヲ以テ之ヲ消却シ都合三十ヶ年間ニ悉皆之ヲ消却ス可シ

第七條 此公債証書發行ニ付テノ順序其外トモ此條例外ノ事件ハ都テ新舊公債証書發行條

例ノ通りタルト心得可シ

○明治九年十二月十一日第五十二號布告

家祿賞典祿改制ノ儀本年(八月)第八號ヲ以テ布告候處右ノ内舊藩廳ニ於テ祿券買賣差許有之從來現場買賣致シタル家祿ノ向ニ限リ其高ノ多寡ニ不拘總テ十ヶ年分ノ金高公債証書ヲ以テ一時ニ下賜來明治十年ヨリ年一割ノ利息下渡候條右元金消却利金下渡方等ノ儀ハ金祿公債証書發行條例ノ通り相心得此旨布告候事

○明治十三年五月三十一日大藏省甲第七十一號布達

金祿公債証書ノ内五拾圓ニ拾五圓拾圓等ノ証書多分所持致居候者ハ枚數相當ニ不便利ノ趣ニ相聞候ニ付今般右三種ノ証書ニ限リ所持高總メテ五百圓ニ滿ツル分ハ五百圓証書ト交換差許候條志願ノ者ハ明細書へ本証書相添へ管轄廳へ可願出最モ手數料トシテ五百圓証書一枚ニ付金拾一錢宛上納可致此旨布達候事

但本文布達候ニ付テハ管轄廳ニ於テ取扱方ハ明治九年(七月)當省甲第十五號布達ノ通り相心得候事

○明治十三年九月廿五日大藏省乙第三十一號達

乙第三十一號

金祿公債利子渡ノ季節ニ臨ミ(利子渡前月へ)越高表届出後)本年甲第七拾一號布達ニ依リ

五拾圓以下ノ証書五百圓証書ト交換ノ儀出願ノ分ハ該季ノ利札所有者ニ於テ切斷爲致候上交換可申出此旨相達候事

但該利金ハ切斷ノ利札ト引替可相渡儀ト可心得事

○明治十二年一月二十九日司法省丁第六號達

丁第六號

公債証書利子下渡期限中讓渡約定ノ儀別紙ノ通り太政官へ相伺候處朱書ノ通り御裁令有之候條爲心得此旨相達候事

別紙

太政官へ伺(明治十一年十二月十三日)

本年第二十六號布告公債証書讓渡見合期限中甲乙ノ間當時公ケノ手續ヲ爲ス能ハサルヲ以テ追テ其手續ヲ爲スヘキノ約定ニテ該証書ニ讓渡証書ヲ添へ交付セシ者ハ固ヨリ其効力ヲ有スヘキト存候抑モ該布告ヲ某月ヨリ某月迄見合スヘシトノ趣旨ハ現ニ讓渡買賣等致候テハ利子下渡ノ際ニ該布告ヲ生スヘキ恐レアルニ付唯々其手續ヲ見合スヘシトノ旨意ナラズ殊ニ本年第二十五號公布ヲ以テ買賣等ノ禁ヲ解カレタル以上ハ右甲乙ノ如キ契約ヲ禁セラレタルモノニ無之ヲ疑フ容レサルモノト相考候ヘテ爲念一應伺置度候條至急裁可ヲ仰シ朱書御指令(明治十二年一月十七日)

(七四)起業公債証書發行條例(明治十一年四月三十日)

今般全國中公益ノ事業ヲ興シ物産繁殖ノ道ヲ開キ内外ノ商賈ヲ盛ニスル爲メ新名_三壹千貳百五十萬圓ノ内國債ヲ起シ其費用ニ供スヘキニ被決定右募債方一切大藏卿_ハ御委任相成候條此旨布告候事

但シ詳細之儀ハ大藏卿ヨリ可及布達候事

○明治十一年五月一日大藏省甲第十三號布達

今般内國債募集ノ儀ニ付キ本年(四月)太政官第七號布告ノ旨趣ニ因リ起業公債証書發行條例別冊ノ通相定メ施行セシメ候條此旨布達候事

起業公債証書發行條例

此公債ハ明治十一年(四月)太政官第七號布告ノ旨趣ニ基ツキ費用ノ金額ヲ募集スル爲メ起ス所ニシテ是ヲ大日本政府ノ公債トシテ各債主ヘハ此公債証書ヲ交付シ年限ヲ定メテ之ヲ償却スルニ付大藏省ニ於テ制定シタル條々左ノ如シ

第一條 公債証書ノ元高種類並ニ利息ノ制限ヲ示ス

第一節 此公債ノ元高ハ壹千貳百五十萬圓ニシテ年六分(百分ノ六)ノ利付トシ其元金ハ二

箇年間据置キニケ年目(即チ明治十三年)ヨリ向二十三_年ヲ限リ(即チ明治三十五年迄)毎年大藏省ノ都合ヲ以テ(第四條ニ掲グル)抽籤ノ方法ヲ用ヒ之ヲ拂戻スヘシ而シ其利息ハ(第三條第二節ノ但書并ニ第四節ノ分ヲ除キ)募金拂込ミ皆濟ノ後ヨリ明治三十五年迄毎年六月十二月ノ兩度ニ之ヲ拂渡スヘシ(本文金額ハ總テ大藏省ノ都合ニ依リ金銀貨又ハ紙幣ヲ以テ之ヲ下渡スヘシ)

但シ明治十三年ヨリ抽籤法ヲ以テ元金ヲ拂戻スニ當テハ年六分ノ利息割(抽籤十五日以前ニ係ルハ前月迄テノ分十月六日以後ニ係レハ半ヶ月分下渡スヘキモノトス)ヲ以テ右抽籤法ヲ行ヒ時迄ノ分下渡スヘシ

第二節 此公債証書面ノ金高ヲ五百圓百圓五十圓ノ三種ニ區別シ利足_テ小札付キトス

但シ本文ノ利札ハ毎年利息渡ノキニ其渡方ヲ取扱フ銀行等ニテ切り取り引換ニ其金額ヲ得ヘキモノトス

第二條 (公債証書授受賣買等ノコト示ス)

第一節 此公債証書ハ(第六條ニ掲グル)記名ニ變改スル分ヲ除キ所有主ノ名ヲ記サス故ニ書換又ハ管廳ノ檢印ヲ受クル等ノ手續ナクシテ授受賣買等(外國人ヲ除ク)外(各自ノ隨意ナルヘシ)

但シ賣入書入(外國人ヲ除キ)及ヒ相續人ヘノ遺物モ勝手タルヘシ

第三條 (募債並ニ出金等ノ手續概略ヲ示ス)

第一節 此公債ノ募集方並ニ元利金ノ渡方トモ都テ第一國立銀行並ニ三井銀行ヘ委任シテ取扱ハシムルカ故ニ申込ノ手續引受ノ實高期限場所及ヒ利息並ニ元金ノ渡方其他必要ノ件々ハ右兩銀行本店若クハ支店及其取引中間等ヨリ追テ新聞紙等ヲ以テ廣告ニ及フ可シ

第二節 募リニ應シ出金スルノ時期ハ都合四度ト定メ最初引受方申込ノ節手付金ヲ拂込マシメ其後ハ第一第二第三ト割合ヲ以テ順次ニ出金セシムルモノトシ其時日ハ右兩銀行等ヨリ廣告ス可シ

但シ(明治十一年七月四日大藏省甲第二十三號布達ヲ以テ但書左之通改正ス)

但シ第三割拂マテノ利息ハ其出金高ニ準シ年六分ノ割合ナル月割ヲ以テ之ヲ拂渡ス可シ

第三節 右四度ノ内手附金拂込ノ節ハ該銀行ノ受取書ヲ與ヘ第一割拂ノ拂込ニハ右受取書ト引換ニ假証券ヲ與ヘ第二割拂ニハ新假証券ヲ以テ舊假証券ト取換ヘ第三割拂ノ拂込濟ミニ至リ此公証債書ヲ假証券ト引換ニ交付ス可シ

但シ公債証書ノ種類ハ大藏省ノ都合ニ依リ之レヲ交付ス可シ

第四節 (明治十一年七月四日大藏省甲第二十三號布達ヲ以テ第二節但書ノ割註「拂込十五日云々」ノ四十字ヲ移シテ本節月割」ノ下ニ挿入ス)手付金又ハ第一第二第三割拂ノ拂込金

トモ都テ其定期ノ時日ニ先ツテ入金スル者ヘハ其高ニ對シ年六分ノ割合ナル利息月割(拂込十五日以前ニ係ルハ半ク月分十六日以後ニ係ルハ翌月ノ分ニ立テ)計算スルモノトス)ヲ以テ入金ノ内ヨリ割引シテ債主ヘ拂渡ス可シ

第五節 右ノ如ク四度ニ配賦シテ拂込マシムルニ付テハ若シ初度ノ手付金相濟ミ更ニ第一割拂若クハ第二第三割拂出金ノ定期ヲ愆マツ者ハ其以前差出シタル金額ハ當人ノ損失ニ歸セシメテ返與セサルヘシ

第六節 出金未タ皆濟ニ至ラス此公債証書ヲ受取ラサル以前タリトモ當人ノ都合ニ依リ第一割拂ヨリ交付シタル假証券ヲ授受賣買買入書入ニスルハ(外國人ヲ除ク)外勝手タルヘシ尤モ授受賣買ノ節ハ其証券ノ裏面ニ讓渡人(又ハ賣主)ノ姓名住所ト讓受人(又ハ買主)ノ姓名住所ト記載シ且ツ調印スルモノトス

但シ此讓受人(又ハ買主)ニテ其次ノ割拂出金ヲ愆期スルハ本條第五節ノ通ナル可シ

第七節 若シ申込ノ出金高募集ス可キ見込高ヨリ超過スルハ該銀行コテ之ヲ總体ノ申込高ニ割付ケテ平等ニ減却シ而シテ其手付金ノ過剩トナル分ハ第一割拂ノ拂込金ニ廻スヘシ尤モ其時ノ都合ニ依テハ別ニ適宜ノ方法ヲ設ケテ之ヲ減却スルコトモアル可シ

第四條 (抽籤ノ手續概略ヲ示ス)

第一節 毎年抽籤ヲ以テ此公債ノ拂戻シテ定ムルニハ此公債ヲ取扱フ銀行本店ニ於テ其年

十月中該地方身柄ノ人ニテ此公債証書(無記名記名トモ)ヲ所持スル者五人以上ヲ撰ミ大藏省國債局ノ官員ト其地方廳ノ官員各兩名以上立會ノ上抽籤ヲ以テ其年ニ拂戻スベキ証書ノ記號番號ヲ公定シ中リ籤ノ記號番號ハ速ニ新聞紙等ヲ以テ廣告スヘシ

第五條 (証書ノ毀損紛失盜難流燒失等ノ心得方ヲ示ス) (圖點ヲ示ス七字ハ明治十一年七月四日大藏省甲第二十三號布達ヲ以テ追加セラレタルモ) (ノニ係ル)

第一節 此公債証書ハ自然垢付或ハ少々ノ損等アルトモ金高及ヒ主要ノ印部等ニ損害ナク眞正ノ証書タルヲ保認スヘキ分ハ當然ノ規則ニ隨ヒ元利金ノ渡方ヲ爲ス可シ尤モ過失ニテ此公債証書ノ一部分ヲ燒損シ又ハ金高及ヒ主要ノ印部等ヲ毀損シ或ハ之ヲ見認メ難キ程ノ墨附等アレハ速ニ其手續書ヲ添ヘテ兩銀行ノ本店又ハ大坂ニ在ル支店ニ持參シテ引換ヲ乞フヘシ兩銀行ハ其事實ヲ承明シテ後チ之ヲ大藏省ヘ具申シテ此引換ヲ爲スヘシ尤モ大藏省ニ於テハ其事實ハ勿論該証書面ニ金高番記號ノ部分必ス判然存在シ眞正ノ公債証書ニ相違ナシト見認ムル分ハ引換ヲ爲スヘシ但シ此引換ヲ乞フニハ本人ヨリ相當ノ手数料ヲ銀行ヘ拂フヘシ

○明治十一年七月四日大藏省甲第二十三號布達ヲ以テ左ノ通第二節及ヒ第三節ヲ追加ス
第二節 此公債証書紛失盜難又ハ流燒失ニ罹ル分ハ所有主ニ於テ其事實ヲ審明シ証書ノ記號番號金高枚數及ヒ所有トナリシキノ手續等詳細相認メ地方警廳ヲ經テ大藏省ヘ届出置

キ償却年限ノ末期ニ至ル迄該証書終ニ顯出致サズ全ノ消滅セシニ相違ナキニ於テハ該証書ニ對シテ積リタル利息元金トモ一同ニ之レヲ拂渡スヘシ

第三節 前事届出ノ後チ該証書顯出シ而シテ未タ犯罪人ノ手ニ在ルカ或ハ犯罪ノ情ヲ知ニ轉受セシモノカ或ハ情ヲ知ラストモ恩惠(貨幣又ハ物品ヲ渡サスシテ受取ルノ類)ノ讓與ニ係ルモノハ原所有主ニ於テ之ヲ取戻スヲ得ヘシ但シ第二節ノ場合ニ於テ事實判明致シ難キキハ都テ法官ノ裁決ニ付シ相當ノ處分ニ及フコアルヘシ

第六條 (記名公債証書ニ變改スル手續并ニ變改セシ以後ノ規則ヲ示ス)

第一節 此公債証書ハ授受買賣等ヲ便ニスル爲メ本來無記名ナレモ所有主ノ請願ニ依リテハ之ヲ變改シテ更ニ記名証書ト爲スヲ得ヘシ其變改ノ手續并ニ規則等ハ左ノ如シ
第二節 無記名証書ヲ記名ニ變改スルニハ証書ヲ引換ユルニ非ラス又証書本紙ニ記名スルニ非ラスシテ本條第四節ノ取扱ヲ以テ之ヲ定ムルモノトス

第三節 右記名ヲ請願スルニハ第三條最後出金ノ定期ヨリ七八十日乃至五六十日以前ニ其旨ヲ此公債ヲ取扱フ兩銀行ノ本店若クハ取引仲間等ニ申込ムヘシ右銀行ハ(支店並ニ取引仲間等ニ申込ミタル分ハ之ヲ取繼メ)請願人ノ姓名住所并ニ入用証書ノ金高等ヲ詳記シ大藏省ヘ具申シ記名極印濟ミノ証書ヲ(記名紙相添ヘ)受取り之ヲ其本人ニ交付シ本

人ヨリ更ニ之ヲ管應ヘ持出テ記名其他次節ノ手續ヲ受クヘシ

第四節 前節ノ如ク大藏省ヘ具申ノ上ハ同省ニ於テ該証書ニ記名シタル極印ヲ押シ之ヲ簿冊ニ登記シ置キ再ヒ之ヲ其銀行ニ送付シテ其本人ヘ交付シ本人ヨリ管應ヘ持出ルモノトス管應ニ於テハ該証書ノ種類金高記號枚數及ヒ所有主ノ姓名住所年月日等ヲ簿冊ニ登記シ該証書ニ記名紙ヲ糊付シ該應ノ繼印ヲ爲シ所有主ノ姓名住所ヲ記入シ該應ノ割印及ヒ公債掛ノ檢印ヲ捺シテ再ヒ之ヲ所有主ヘ付與ス可シ

但シ一旦無記名証書ヲ引受置追テ記名ニ改メント欲スル者ハ該証書ニ其種類金高記號番號枚數ノ目錄書及ヒ願書ヲ添ヘ管應ヘ申立ツヘシ管應ヨリハ願人ヘ証書ノ受取書ヲ渡シ置キ之ヲ大藏省ヘ具申シテ極印濟ミノ証書並ニ記名紙ヲ受取り成規ノ如ク再ヒ之ヲ其本人ヘ付與スルノ手續ヲ爲スモノトス尤モ記名紙ハ地方官ノ見込ヲ以テ豫メ之ヲ大藏省ヨリ受取り置クモ適宜ナルヘシ

第五節 前節ノ如ク無記名証書ヲ記名証書ニ變改シタル上ハ之ヲ授受賣買シ或ハ引當物ニ爲シ又ハ紛失盜難及ヒ流失等ノ廉ハ明治八年(五月)太政官第九十五號布告改正新舊公債証書發行條例第六條第七條第八條第九條第十條ヲ適用スヘシ尤モ右條例ヲ此記名公債証書ニ適用スル場合ニ於テハ右條例中換用ノ文字並ニ不用ノ廉々左ノ如シ
但シ元利金渡方等ノ手續ハ無記名公債証書ト同様ナルモノトス

右條例第六條ヨリ第十條迄ノ内ニ「新舊公債証書共」並ニ「新舊公債証書」トアルハ都テ「此記名公債証書」ト改ム

同第六條第一節但書ノ其「都度大藏省ヘ届出可シ」ヲ「置ク可シ」ニ改ム同條第二節「証書裏面ヘ形ノ通り」裏面離形」及ヒ同條第三節「証書裏面ヘ形ノ如ク(裏面離形)」ハ都テ「記名紙ヘ末ニ附スル離形ノ通り」ト改ム同條第三節「大藏省ヘハ云々」ノ十五字ヲ「置クヘシ」ニ改ム

同條第四節ノ但書ヲ削除ス

同條第五節並ニ第七節第八節ノ「証書ヘ割印」ハ都テ「記名紙ヘ割印」ニ改ム

同條第七節ノ「且大藏省ヘハ一月分翌月五日迄ニ云々」ノ二十七字ハ不用同條第九節ノ「就テハ年々元利金云々」ノ十八字ヲ「尤モ年々元利金拂方ハ此公債ヲ取扱フ銀行等ニテ拂渡スヘシ」ニ改ム

同條第十節ノ「年々元利拂及」ノ六字並ニ「年々元利受取或ハ」ト兩所ニ在ル都合十六字及ヒ第十二節ヲ削除ス

同條同節中ノ「前條」ヲ「第七節」ニ改ム

同第七條第一節ノ「其所持人ヘ下渡スヘシ云々」ノ四十七字ヲ「何人タリトモ其持參人ヘ(外國人ヲ除クノ外)相渡スヘシ」ニ改ム

同第八條割註二十一字ヲ「此公債証書記名繼足ノ手續ヲ明ニス」ニ改ム同條第一節ノ「裏面記名ノ場所」ヲ「記名紙ノ餘梓」ニ改メ「証書ノ繼足」ヲ「記名紙ノ繼足」ニ改ム
 同第九條第一節ノ但書ヲ削除ス
 同條第二節ノ「地方管廳ニテハ即右ノ旨ヲ云々」ノ六十三字ヲ削除ス
 同條第三節ノ「公布」ヲ「布達」ニ改ム
 同條第四節ノ「元利」ヲ「利金」ニ改ム

第七條 (証書贗造等ノ處分ヲ示ス)

第一節 此公債証書(無記名記名トモ)ヲ私ニ剝去リ又ハ切裂キ又ハ塗抹シ孔ヲ穿テ糊附ニスル等ノ事ヲ爲スヘカラス若シ犯ス者アレハ裁判ノ上其金高十倍以下ノ罰金ヲ命スヘシ
 第二節 此証書ヲ贗造シ又ハ人ヲシテ贗造セシメ又ハ人ノ贗造スルヲ助ケ又ハ贗造ト知リテ通用シ又ハ証書ノ圖書文字ヲ變換シ又ハ人ヲシテ變換セシメ又ハ變換セシモノト知テ之ヲ通用シ其他似寄ノ板版紙品等ヲ所持スル者ハ都テ裁判ノ上法ニ處スヘシ

第八條

第一節 政府ノ都合ニ依リ要用ノ「アレハ利息及ヒ償却年限ヲ除ク」外此條例ヲ增補シ又ハ改正スヘシ
 第二節 右增補改正等アルキハ速ニ其旨趣ヲ公告スヘシ

明治十一年五月

大藏省

(七五)金札引換公債條例(明治十三年十月廿七)

明治六年三月第百二十一號布告金札引換公債証書發行條例並改正追加ノ分共更ニ別冊ノ通改定候條此旨布告候事
 改定金札引換公債條例

第一章 總則

第一條 金札引換公債証書ハ政府發行ノ紙幣ヲ交換支消スル爲メ發行シ其元利金共ニ金銀貨幣ヲ以テ仕拂フモノトス
 第二條 金札引換公債証書ハ記名利札付ニシテ五百圓百圓五十圓ノ三種トス
 第三條 何人ニテモ(外國人ヲ除ク)前條ニ記載スル各種証書面ノ金高ノ紙幣ヲ差出シ金札引換公債証書ニ交換スルヲ得ベシ
 (本條ハ十六年第四十八號布告ヲ以テ停止ス)
 第四條 金札引換公債証書ヲ以テ交換シタル紙幣ハ大藏省ニ於テ成規ニ遵ヒ之ヲ截斷スベシ

第二章 元利金ノ仕拂

第五條 金札引換公債ノ元金ハ其証書交付ノ年ヨリ三ヶ年据置キ四ヶ年目ヨリ向十二ヶ年間政府ノ都合ニヨリ抽籤ノ法ヲ以テ消却シ利息ハ一ヶ年六分(百分ノ六)トシ元金消却ニ至ルマテ毎年五月十一月ノ兩度ニ拂渡スヘシ

但シ抽籤法ヲ以テ元金ヲ拂戻スニ當リテハ年六分ノ利息月割(抽籤十五日以前ニ係レハ前月迄ノ分十六日後ニ係レハ半ヶ月ヲ下渡スヘキ者トス)ヲ以テ右抽籤法ヲ行ヒシ時マテノ分下渡スヘシ

第三章 証書ノ交付及ヒ簿記ノ手續

第六條 紙幣ヲ以テ金札引換公債証書ニ交換セント欲スル者ハ其紙幣并ニ紙幣ノ高ヲ記載シタル交換願書ヲ其地方ノ管廳ニ差出スヘシ

第七條 地方管廳ニ於テハ紙幣ト願書トヲ受取り其受領証ヲ製シ本人ニ渡シ其紙幣ヲ大藏省出納局若クハ其出張所ニ納付シ其預リ証ト共ニ金札引換公債証書申請書ヲ大藏省國債局ニ送付スヘシ

第八條 交換願書ヲ差出シタル者ニ地方管廳ヨリ其受領証ヲ交付スルハ各月十五日以前ナレハ其月十六日以後ナレハ其翌月ヨリ計算シテ其年利ヲ拂渡スヘシ

第九條 國債局ニ於テハ申請書ニ據リ其金高ニ相當スル公債証書ノ番號記號枚數ヲ定メ其債主ノ住所姓名ヲ簿冊ニ登記シ並ニ割印シタル上ニテ其証書ヲ各債主ノ地方管廳ニ送達スヘシ

スヘシ

第十條 地方管廳ニ於テハ其債主ノ住所姓名及ヒ証書ノ金高種類枚數番號記號ヲ公債簿冊ニ簿冊ニ登記シ及ヒ証書裏面ノ右側ニ債主ノ姓名ヲ記入シ且ツ管廳ノ割印ヲ加ヘ本人ニ渡置キタル受領証ト引換ヘシ証書ヲ交付スヘシ

但シ証書交付ノ後ニ他管ニ移轉シ若クハ他管ヨリ移轉シ來ルモノハ其出入増減表ヲ製シ毎翌月五日マテニ大藏省國債局ニ届ケ出ツヘシ

第十一條 公債証書ト引換ヘタル受領証ノ裏面ニ本人ナシテ証書ノ受取ヲ記サシメ翌月五日マテニ之レヲ取總メ明細表ヲ添ヘ大藏省國債局ニ送致スヘシ

第四章 証書ノ様式及ヒ賣渡讓渡ノ手續

第十二條 此條例頒布以後ト雖モ金札引換公債証書ハ從前ノ金札引換公債証書無記名利札付ノ様式ヲ用ヒ不要矛盾ノ文字ハ朱書ヲ以テ點竄スヘシ

第十三條 金札引換公債証書ノ所有者ニ於テ始メテ之レヲ他人(外國人ヲ除ク)ニ賣渡シ若クハ讓渡サントスルハ其証書ヲ其地方管廳ニ差出シテ繼足紙ヲ請願スヘシ

管廳ニ於テハ新舊公債証書ニ用フル繼足紙ヲ該証書ノ左側ニ糊付繼印シテ請願人ニ下付シ名前書替ノ手續ヲ爲サシメタル上其捺印ヲ取計フヘシ
但シ利息渡方混淆セサル爲メ毎年四月一日ヨリ五月十五日マテ十月一日ヨリ十一月十

五日マテ証書ノ讓渡シ買賣ノ届出ヲ見合スヘシ
第十四條 此條例頒布以前交付シタル金札引換公債証書ハ記名無記名ノ分共改定ノ証書ト引換ユヘシ

第十五條 凡ソ此條例ニ明文ナキノ件ハ都テ明治八年(五月)第九十五號布告改正新舊公債証書發行條例第四條ヨリ第十二條マテ及ヒ右ニ關シ爾來改正増補ノ个條ニ準據スヘシ
○明治十三年十一月二日大藏省甲第百廿三號布達

本年十月第四十七號布告(改定)金札引換公債條例ノ内第七條第十一條中受領証申請書ノ書式並ニ紙幣納方ノ順序及ヒ從前發行セシ金札引換手續等左ノ通相定候就テハ從前發行証書ノ所有主ハ本月三十日限右ニ準據シ引換方可申出此旨布達候事

第一條 (改定)金札引換公債條例第七條地方管廳ニ於テ紙幣ト願書トヲ受取り本人ニ渡スヘキ受領証ハ第一號雛形ノ通リ又金札引換公債証書申請書ハ第二號雛形ノ通リタルヘシ而シテ紙幣ヲ出納局出張所ヘ納メ候分ハ其預リ証書ト共ニ申請書ヲ國債局ヘ送付スヘシト雖モ當省中出納局ヘ紙幣ヲ納メ候分ハ紙幣并ニ出納局宛ノ上納証書ト共ニ申請書ヲ國債局ヘ送付スルヲ得同局ニ於テハ右紙幣ヲ出納局預リ証書ト交換ノ手續ヲ爲スヘシ
第二條 同條例第十一條公債証書ト引換ヘタル受領証ノ裏面ニ本人ヲシテ記サシムル公債証書ノ受取書式ハ第三號雛形ノ通リタルヘシ

第三條 從前發行セシ金札引換公債証書ヲ所有スルモノハ其公債証書并ニ証書ノ金高種類枚數番記號及ヒ引換請願ノ旨ヲ記載シタル書面ト共ニ其地方管廳ヘ差出スヘシ管廳ニ於テハ該証書ノ預リ証書ヲ本人ヘ付與シタル上該証書并ニ請願書トモ國債局ヘ送付シテ公債証書渡方ノ請求ヲ爲スヘシ

第四條 國債局ニ於テハ右書面ニ據リ其金高ニ應シ相當ノ割合(從前發行証書千圓券ハ五百圓券ヲ以テ又五百圓券ハ都合ニ寄リ百圓券取交セ引換ヘ渡スヘシ)ヲ以テ金高枚數ヲ定メ其姓名管轄宿所族籍ヲ簿冊ニ登記シタルト其証書ヲ各債主ノ地方管廳ヘ送達スヘシ
第五條 地方管廳ニ於テハ其債主ノ名面及ヒ証書ノ金高種類枚數番記號ヲ公債掛ノ簿冊ニ登記シ証書ヘ債主ノ名面ヲ記入シ且ツ管廳ノ割印ヲ加ヘ本人ヘ最前渡シ置キタル預リ証ト引換ヘニ渡方ヲ爲スヘシ

第六條 從前發行ノ証書ニ對スル本年分ノ利金本年ニ至リ發行ノ分(月割ヲ以テ渡スヘキ金利トモ)ハ是迄ノ通り十二月一度ニ相ヒ渡シ來十四年ヨリ條例第五條ノ通り兩度ニ渡スヘシ
(雛形書式ハ略ス)

(七六)金札引換無記名公債證書條例(明治十六年十二月二十八日)

第六編 金札引換無記名公債證書條例

第一條 金札引換無記名公債証書ハ政府發行ノ紙幣ヲ交換支消スル爲メ發行シ其元利金共銀貨ヲ以テ仕拂フモノトス

此公債証書ト交換シタル紙幣ハ大藏省ニ於テ之ヲ燒却スルモノトス

第二條 此公債証書ハ望人ノ申込ニ任セ大藏卿隨時之ヲ發行スルモノトス但大藏卿ハ財政ノ都合ヲ計リ其申込ヲ拒ムコトアルヘシ

第三條 此公債証書ハ無記名利札付ニテ千圓五百圓百圓ノ三種トス

第四條 此公債ノ利子ハ年六分トス

第五條 此公債証書ハ證書額面百圓ニ付發行價格紙幣百圓ト定ム此證書ヲ引受ケシコトヲ望ムモノハ隨時日本銀行本支店又ハ代理店ヘ申出ヘシ

第六條 此公債債証書ノ見本ハ大藏卿ヨリ告示スルモノトス

第七條 此公債ノ元金ハ其證書交付ノ年ヨリ五ヶ年据置其翌年ヨリ向フ三十ヶ年ヲ限リ毎年抽籤法ヲ以テ償還スヘシ但償還ノ金高ハ抽籤ノ日ヨリ少クモ六十日以前ニ大藏卿ヨリ告示スルモノトス

此公債ノ利子ハ元金償還ニ至ルマテ毎年五月十一月ノ兩度ニ拂渡スモノトス但元金ヲ償還スルトキハ月割ヲ以テ右抽籤ヲ行フ月マテノ利子ヲ拂渡スヘシ
滿期ニ至リ償還ノ證書ニ屬スル利子ハ償還ノ月マテノ分ヲ拂渡スモノトス

第八條 此公債ノ利子ハ其元金拂込ノ日ニ從ヒ各月十五日前後ヲ以テ區別シ十五月前ナレハ其下半年分ヨリ十六日以後ナレハ其翌月分ヨリ拂渡スモノトス

第九條 此公債ノ元金償還利子拂渡ノ事務ハ總テ日本銀行ヲシテ之ヲ取扱ハシムヘシ其時期及場所等ハ抽籤ノ日ヨリ少クモ三十日以前ニ大藏卿ヨリ告示スルモノトス

第十條 此公債ノ利子ハ日本銀行本支店又ハ代理店ニ於テ利札ヲ切取り之ト引換ニ拂渡スヘシ

第十一條 此公債証書ハ何人ニテモ授受賣買スルコトヲ得

第十二條 此公債ノ元金償還ノトキハ日本銀行ニ於テ抽籤配賦計算ノ割合ヲ定メ東京橫濱居住人ニテ此公債証書ヲ多額所持スル者十名以上並大藏省國債記錄兩局ノ官員五名以上立會ノ上抽籤ヲ執行シ其當籤證會ノ記號番號種類金高等ハ大藏卿ヨリ告示スルモノトス

第十三條 此公債証書ノ所有者其證書ヲ亡失セシトキハ其事由並證書面ノ金高記號番號及所有セシトキノ手續ヲ詳記シ其亡失セシ地ノ官廳ヲ經テ大藏省ニ届出ヘシ大藏卿ハ其證書ノ授受賣買ヲ差止ムヘキ旨ヲ告示スルモノトス但發見シタルトキハ同様ノ手續ヲ以テ届出ヘシ

亡失ノ證書ヲ發見セズ其償還年限ノ末期ニ至リ證書消滅セシト認ムヘキ場合ニ於テハ該

證書ノ元利金額ヲ其届出人へ拂渡スヘシ

第十四條 此公債證書當籤ト爲リ元金ヲ拂渡スヘキ場合ニ於テ其證書ノ亡失セシコトヲ覺知シタルトキハ其當籤ノ効ヲ失フモノトス

第十五條 此公債證書汚染又ハ毀損セントキハ日本銀行本支店又ハ代理店ヲ經テ證書ノ引換ヲ大藏卿へ請求スヘシ

但其證書面金高記號番號及大藏卿ノ印章ヲ檢査シ其真正ナルヲ證認シ得ヘキモノニアラザレハ引換サルヘシ此引換ヲ得タルモノハ本人ヨリ相當ノ手数料ヲ銀行へ拂フヘシ

第十六條 此公債證書引換又ハ償還ノトキ其證書汚染毀損シ金高記號番號及大藏卿ノ印章ヲ認メ難キモノハ其元利金トモ償還方總テ亡失證書ト同一タルヘシ

第十七條 此公債ノ元利金受取方申出テス其拂期月ヨリ滿十五ケ年ヲ過ソルトキハ一切之ヲ償還セサルヘシ

第十八條 政府ノ都合ニ依リ要用ノ事ソレハ利子ノ割合及元金償還年限ヲ除クノ外此條例ヲ增補改正スルコトアルヘシ

(七七)禁裡御用菊御紋濫用禁令(明治元年三月二十八日布告)

一禁裡御用或ハ禁裡御料又ハ禁裡御内杯ト會符榜示杭標札等ニ書記シ候儀ハ有之間布事ニ

候處往々見受候ニ付以來屹度相改御用御料ト而已書記致シ候様被仰出候事但標札ハ姓名相記シ又ハ官名役名等記シ候儀不苦候事

一提燈又ハ陶器其外賣物等ニ御紋ヲ畫キ候事共如何之儀ニ候以來右之類御紋ヲ私ニ附候事急度可禁止旨被仰出候事但御用ニ付是迄被免之分モ一應伺出可申事
右之通被仰出候條未々迄不洩様可申達事

(七八)脚本樂譜條例(明治二十年十二月二十八日勅令第七十八號)

第一條 演劇脚本及樂譜ハ出版條例及版權條例ニ據リ之ヲ出版及版權ヲ所有スルコトヲ得

第二條 演劇脚本若クハ樂譜ヲ出版シテ版權ヲ所有スル者ハ版權年限中ハ其興行權(即チ利益ノ爲メ公衆ノ前ニ演スルノ權)ヲ併セ有スルコトヲ得但興行權ヲ有セントスルトキハ其脚本又ハ樂譜ニ興行權所有ノ五字ヲ記載スヘシ

第三條 演劇脚本及樂譜ノ興行權ハ制限ヲ付シ若クハ付セシテ之ヲ賣渡シ讓渡スコトヲ得

第四條 演劇脚本若クハ樂譜ノ興行權ヲ犯シタル者ハ興行權所有者ニ對シ損害賠償ノ責ニ任スヘシ著作者又ハ其相續者ノ承諾ヲ經ヌシテ未タ出版セサル脚本若クハ樂譜ヲ興行スル者亦同シ

第五條 興行ニ關スル損害賠償ノ責ハ其興行權ヲ犯シタル最終ノ月ヨリ一年ヲ以テ期滿得免ノ期トス

〔七九〕民事訴訟用印紙規則

第一條 凡民事訴訟ノ書類ニハ此規則ニ從ヒ印紙ヲ貼用スル者トス

第二條 訴狀ニハ正本一通ニ付請求ノ金額若クハ價額ニ應シ左ノ區別ニ隨ヒ其受付ノ時ニ於テ印紙ヲ貼用スヘシ

金額	五圓マテ	貳拾
價額	拾圓マテ	拾錢
同	貳拾圓マテ	拾錢
同	五拾圓マテ	六拾錢
同	七拾五圓マテ	壹圓五拾錢
同	百圓マテ	貳圓貳拾錢
同	貳百五拾圓マテ	三圓
同	五百圓マテ	六圓五拾錢
同	七百五拾圓マテ	拾圓

同	千圓マテ	拾五圓
同	貳千五百圓マテ	貳拾圓
同	五千圓マテ	貳拾五圓
同	五千圓以上ハ千圓マテ毎ニ貳圓ヲ加フ	

第三條 人事其他金額ニ見積ルヘカヲサルモノハ三圓ノ印紙ヲ貼用スヘシ其控訴上告ニ於テ加貼スルハ前條ニ同シ

但人事ニ於テハ極貧ノ者ニシテ戸長ノ證書ヲ所持スル者ハ裁判官ニ於テ印紙ノ貼用ヲ免スルコトアルヘシ

第四條 左ノ書類ニハ正本一通ニ付貳十錢ノ印紙ヲ貼用ス可シ
答辨書、證據物寫、辨駁書、辨論書、上申書、陳述書等証人、鑑定人、評價人、引合人等ノ呼出ヲ請求スル願書、審判ノ延期ヲ請求スル願書

第五條 左ノ書類ニハ正本一通ニ付五十錢ノ印紙ヲ貼用スヘシ

官吏ノ臨檢ヲ請求スル願書
財産差押又ハ物品公賣ヲ請求スル願書
執行命令書ヲ請求スル願書

十九年四月
印刷料金
不納者身
代限ナリ
求スル印
紙貼

身代限ノ處分ヲ請求スル願書

第六條 裁判言渡書ノ謄本ヲ下付スル時差出ス受取書ニハ其謄本一枚五錢其他ノ謄本ヲ下付スル時差出ス受取書ニハ其謄本一枚三錢ノ割合ヲ以テ印紙ヲ貼用スヘシ
但裁判言渡書ノ謄本ハ一枚十二行一行十二字詰其他ノ謄本ハ一枚二十行一行十八字詰トス

第七條 勸解ニ於テハ一件毎ニ勸解表ニ署名ノ時貳拾錢ノ印紙ヲ貼用スヘシ

第八條 此規則ニ依リ貼用シタル印紙ノ代價ハ曲者ヨリ直者ニ辨償スヘキモノトス

第九條 印紙ノ種類定價及ヒ貼用方ハ布達ヲ以テ之ヲ定ム

第十條 印紙ハ管轄廳ノ許可ヲ得タル賣捌所ニ於テ發賣セシム其他ニ於テ賣買スルコトヲ得ス

第十一條 官許賣捌所外ニ於テ印紙ヲ販賣シタル者ハ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處シ仍ホ現在ノ印紙ヲ沒收ス其情ヲ知テ之ヲ買取シタル者ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處シ仍ホ現在ノ印紙ヲ沒收ス

第十二條 前條ノ規則ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ不論罪及ヒ減輕再犯加重數罪俱發ノ例ヲ用ヒス

○明治十七年二月廿三日

第四號

今般第五布號告ヲ以テ訴訟用印紙規則制定候ニ付印紙ノ種類定價及ヒ貼用方左之通之ヲ定ム

淡黑色印紙	壹枚	三錢
黑色印紙	同	五錢
赭色印紙	同	拾錢
茶褐色印紙	同	五拾錢
黃色印紙	同	壹圓
青色印紙	同	五圓
橙黃色印紙	同	拾圓
綠色印紙	同	拾五圓
嬌栗色印紙	同	貳拾圓

印紙ハ訴狀其他書類ノ正本ニ貼用シ貼用者ノ印章ヲ以テ消印スヘシ

〔八〇〕銃炮取締規則(明治廿五年正月廿九)

第一則

第六編 銃砲取締規則

一大小銃並ニ彈藥類商賣ノ儀ハ府縣共定員商賣ノ外取扱致間敷右定員ノ商賣ハ其地方管廳ニ於テ精選ノ上免許狀可差遣事

但東京大坂ノ儀ハ武庫司ニ於テ管轄スヘキ事

免許商賣ノ定員

一府下 各五員

一縣下 各三員

一鎮臺本分管下 各一員

但府縣廳下開港等ニアルハ別ニ設ケス

一開港場 各五員

右免許差遣候商賣ノ姓名住所等東京武庫司ヘ届ケヘキ事

第二則

一免許商人タリ軍用ノ銃砲彈藥類ヲ竊ニ賣買不相成賣渡候節ハ買主ヨリ官ノ免手形ヲ受取其員數ヲ照ラシ賣渡可申又買入ノ節ハ其管廳ヘ願出免手形ヲ受取其員數ヲ以テ買取可申事

但東京大坂ノ儀ハ武庫司ヘ願出申事

第三則

一免許ノ商人其賣買ノ銃砲彈藥ハ多少ヲ論セス買取賣渡共其主人ノ姓名物品ノ員數等明細附記シ軍用ノ者ハ免手形相添毎月其管廳ヘ差出ス可シ其廳ヨリ毎月十日ヲ限リ管轄鎮臺ヘ差送可申事

但諸鎮臺ヨリ毎歲正月七月兩度半々年明細帳ヲ以テ東京武庫司ヘ差送リ可申尤モ南京大坂ノ儀ハ武庫司ニ於テ取締可致事

第四則

一彈藥ノ儀ハ假令些少ノ品タリトモ唯便利ノミナ計リ勝手ノ場所ヘ差置間敷兼テ其地方管廳ヘ願出差圖ヲ受相圖可申事

但東京大坂ノ儀ハ武庫司ヘ願出ヘキ事

第五則

一華族ヨリ平民ニ至ル迄免許銃類ヲ除ク外軍用ノ銃砲並彈藥類ビストールニ至ル迄私ニ貯蓄不相成就テハ是迄銘々所持致居候軍用銃砲ハ一々其管廳ニ持出東京大坂ハ武庫司ヘ持出別紙銃砲改刻印式ノ番號官印ヲ受可申他人ヘ讓與ヘ候節ハ第二則ノ手續ニ從フヘシ

但彈藥買入致シ度者モ亦二則ノ通リタルヘシ

銃砲改刻印ノ式

右所持ノ人名番號等逐一書記シ置管轄鎮臺へ届出銃臺ヨリ東京武庫司へ差送可申事
免許ノ銃類

一和銃四文目八分玉以下
一各國諸獵銃

但西洋獵銃ノ儀ハ其玉目稍大ナレモ霰彈ヲ用ユル者ハ之ヲ許ス右獵用銃所持ノ者ハ其銃名員數等巨細附記シ其管轄へ届出其應ヨリ東京武庫司へ差出可申
シ萬一軍用獵用銃ノ差別難相辨者官へ尋出候得ハ檢査ノ上免許ノ証印ヲ据へ可相渡事
第六則 (明治六年五月二十五號布告)
鳥獸獵規則ヲ以テ廢ス

第七則

一銃砲彈藥下々ニ於テ猥リニ製造不相成候尤モ新ニ奇巧便利ヲ發明シ爲試製作致度者ハ其管轄へ相願管轄鎮臺へ届出免許ヲ可受事
但製作其宜キニ適ヒ最モ便利ナル者ハ鎮臺ヨリ武庫司へ差送リ檢査ヲ遂ケ採用可相成分ハ西洋免許ノ法ニ倣ヒ何分ノ御沙汰可有之事
是迄銃砲並彈藥類買賣致來候者ハ現今所持ノ物品員數等無遺漏書記シ管轄廳へ爲指出其應ヨリ東京武庫司へ可差出事
但東京大坂ノ儀ハ賣買ノ者ヨリ直ニ武庫司へ可届出事

右之通ニ候事

○明治五年九月廿三日第二百八十二號布告

銃砲取締規則ニ違ヒ銃砲彈藥類ヲ竊ニ所持シ且致取扱候者有之節ハ各地方ニ於テ其品取上ケ更ニ五十錢ノ過料可申付候事

但取締向ニ關係無之者見當リ訴出候ニ於テハ犯人過料ノ半金ヲ可被下候事

○明治七年十二月八日第百卅二號布告

一免許ヲ得スシテ銃砲彈藥ヲ製造スル者ハ其品取上ケ更ニ三圓以内ノ過料可申付事
但書同前

○明治十三年三月廿五日第八號布告

明治五年(正月)第二十八號布告鐵砲取締規則第二則中左ノ一項增加候條此旨布告候事
一免許商人ハ陸海軍准士官以上ノ武官ヨリ其所有ノ軍用銃並ニ其彈藥類ヲ買入ントスルハ買入願書ニ其賣主ノ連書ヲ爲サシムヘキ事

○明治十一年五月廿四日第十一號布告

銃獵免許ノ者及ヒ有害ノ鳥獸威シ銃室内射の場營業免許ノ者等需用ノ彈藥雷管ニ限リ買買手續左ノ通り相定候條此旨布告候事

銃獵免許ノ者及ヒ有害ノ鳥獸威シ銃室内射の場營業免許ノ者等需用ノ彈藥ヲ買ハント欲

スル時ハ其免狀若クハ免許証ヲ以テ彈藥賣買免許商人ニ示シ以テ其免許人タルヲ証ス

彈藥賣買免許商人ハ右ノ免狀若クハ免許証ヲ認メ正確ナリトスル時ハ左ノ程限ニ照ラシ

之ヲ賣渡シ其姓名及ヒ數量等ヲ詳記シ月々其管轄廳(東京ハ警視本署)へ届出ツヘシ

西洋形獵銃用

彈藥 彈散バト 二千發

同上用

雷管 四千粒

火藥銃用

火藥 壹貫目

威シ銃用

雷管 壹萬粒

右一次賣渡シ最多ノ程限トス若シ一次此程限外ノ彈藥雷管ヲ買ハント欲スル時ハ銃砲取締規則第二則ニ從フヘシ

(八一)車稅規則(明治八年十二月廿日)

明治六年(一月)第三十一號布告(僕婢馬車人力車駕籠乘馬遊船諸稅則)昨七年十二月三十一日限リ相廢シ尤モ遊船ノ儀ハ本年一月一日ヨリ昨七年(二月)第二十一號布告(解漁船並ニ海山小廻船等船稅規則)ニ照準收稅シ車類ノ儀ハ改テ車稅規則左ノ通り相定メ同月同日ヨリ施行候條此旨布告候事

第一則

一馬車或四立以上

壹ケ年稅金三圓

一同壹匹立

壹ケ年稅金貳圓

一荷積馬車

壹ケ年稅金壹圓

一人力車或人乘

壹ケ年稅金貳圓

一同 壹人乘

壹ケ年稅金壹圓

一牛車

壹ケ年稅金壹圓

一荷積大七八車

壹ケ年稅金壹圓

一荷積中小車但大六以下

壹ケ年稅金五十錢

第二則

一新調ノ車ハ總テ其都度區戸長へ届出檢印可申受事

但シ從來所持ノ分ニテ檢印無之牛車荷積車等ハ更ニ檢印可申受事

第三則

一新調ノモノハ六月以前ハ全年分七月以後ハ半年分納稅シ破解ノ者ハ七月以後ハ全年分六月以前ハ半年分納稅候儀ト可相心得事

第四則

一右税金上納ハ年々兩度ニ區別シ半年分宛區戶長へ取集メ其管轄廳へ可相納事
但前半年分ハ其年七月三十一日限り後半年分ハ翌年一月三十一日限り其管轄廳へ可相納事

第五則

一荷積車等ノ内耕作一途ニ相用候分ハ免稅タルヘキ事

第六則

一諸車類無届ニテ營業スル歟又ハ使用スル者ハ其脫稅高ノ五倍科料タルヘキ事

○明治八年三月二十四日

乙第四十號

本年第二十七號公布車稅則中第五則荷積車ノ内耕作一途ニ相用候車類ハ車稅免除ノ檢印
免稅ヲ爲取締一車毎ニ燒記候上免稅致シ候儀ト可相心得此旨相達候事

○明治十三年六月十一日

乙第二十三號

船(商船解漁船)等車へ修繕ヲ加ヘ爲メニ稅額ニ増減ヲ生シタルキハ新調ト認メ更ニ該期ヨ
リ相當ノ税金徵收候儀ト可相必得此旨相達候事

○明治十三年十月十五日

乙第三十號

自轉車ノ儀各地取扱方區々相成居候趣相聞候處右ハ素ヨリ人力車部中ノモノニ付キ同様課
稅可致儀ニ候條爲心得此旨相達候事

○明治十一年七月十五日大藏省乙第三十五號達

車稅規則中荷積車ノ儀ハ荷臺(全ク荷物ヲ積載スル場所)ノ縱橫相乘尺積十四坪以上ヲ以テ
大七車トシテ右未滿ヲ以テ中小車(大六以下)ト相心得更ニ區別可致此旨相達候事

○明治十四年九月廿二日大藏省乙第三十二號達

八年第廿八號布告車稅規則中人力車ノ儀橫巾内法曲尺二尺未滿ヲ以テ一人乗トシ右以上ヲ
以テ二人乗ト相定メ區別可致此旨相達候事

(八二)新舊公債証書發行條例(明治八年五月廿五日)

明活五千申年マテノ間從來舊諸藩縣ニ於テ内國人民ヨリノ逋債ヲ改メテ政府ノ公債トシ
之レヲ大藏省ニ引受ケ其債主ヘハ各此公債証書ヲ交付シ定期ヲ逐テ之レヲ償却スルニ付
キ政府ニ於テ制定シタル條々左ノ如シ

第一條 (新舊公債ノ區別及ヒ証書ノ種類記號ノ品別等ヲ明ニス)

第一節 弘化元甲辰年ヨリ慶應三丁卯年マテ舊諸藩ニ於テ借用シタルモノヲ舊公債ト稱シ

明治元戊辰年太政更始以後明治四辛未年七月廢藩マテ及ヒ明治五壬申年迄ノ間舊諸縣ニ於テ借用シタルモノヲ新公債ト稱スヘシ

第二節 新舊公債トモ各其高ヲ五分シテ第一第二第三第四第五トシ証書面ノ金高ヲ五百圓三百圓一百圓五十圓二十五圓ノ五種ニ區別スヘシ

第三節 新公債証書ハ向後抽籤ノ方法ヲ以テ其元金ヲ償却スヘキニ付便宜ノ爲メ四十七部ニ別ナ(いろは)四十七字ノ記號ヲ証書面ニ命名スヘシ

第二條 (新公債償却年度及ヒ利息ノ割合ヲ明カニス)

第一節 舊公債ハ無利息ニシテ元金ハ明治五年壬申ヨリ明治五十四年迄五十年賦トシ其八年ノ拂方ニ當リタル賦金ヲ毎年十二月一日ヨリ同十五日マテノ間ニ之ヲ拂渡スヘシ

第二節 新公債ハ利息付ニシテ明治八年ヨリ明治二十九年迄二十二年ノ間ヲ限リ大藏省ノ都合ニヨリ毎年或ハ隔年ニ抽籤ノ方法ヲ以テ其年ニ拂戻スヘキ証書ノ記號ヲ公定シ其割合ニ隨テ之レヲ拂戻スヘシ其利息ハ年々元高百分ノ四分トシ明治五年壬申ヨリ明治二十九年マテ毎年六月一日ヨリ十五日迄(圍點ヲ施ス十字ハ明治九年四月十七日第(五十號)布告ヲ以テ追加シタルモノニ係ル)十二月一日ヨリ十五日迄ノ間ニ之レヲ拂渡スヘシ(本文總テ其金額ハ大藏省ノ都合ニヨリ金銀貨又ハ紙幣ヲ以テ之ヲ下渡スヘシ)

但シ明治八年ヨリ抽籤法ヲ以テ元金ヲ拂ヒ戻スニ當リテハ年四分ノ利息月割ヲ以テ右

抽籤法行ヒシ月マテノ分下ケ渡スヘシ

第三條 (公債証書ノ渡方及ヒ其簿記ノ手續ヲ明ニス)

第一節 新舊公債証書共各債主ヘ交付スルニハ大藏省ニ於テ其金高及ヒ新舊ノ區分共調査シテ後ナ之レヲ簿冊ニ登記シ証書五種ノ區別(新公債ナレハ四十七種ノ記號)中ニ於テ其金高ニ應シ相當ノ割合ヲ定メ其証書ハ簿冊ニ割印シテ各債主ノ地方管廳ニ送達ス可シ但シ此ノ公債証書ヲ其地方管廳ニ送達スルニハ勿論其債主ノ名面金高証書等ノ種類等詳明ニ目錄書ヲ添ヘテ相渡スヘシ

第二節 地方管廳ニ於テハ別ニ公債掛ノ局ヲ設ケ各種ノ簿冊ヲ備ヘ大藏省ヨリ渡サレタル証書ヲ點檢シ其債主ノ名面及ヒ証書ノ金高種類ヲ分別シテ之レヲ簿冊ニ登記シ且ツ其証書裏面ヘ悉ク債主ノ名面ヲ記入シ管廳ノ割印ヲ加ヘテ其渡方ヲ取計フヘシ

第四條 (舊公債証書元金年賦並ニ新公債証書ノ利息渡方手續等ヲ明カニス)

第一節 毎年舊公債元金年賦並ニ新公債利息下渡方ハ各地方ハ官ニ於テ各管下ノ公債証書所持人ノ數ヲ取調其年ノ渡方ニナルヘキ利息並ニ元金年賦共金額内譯合計表ヲ作り新公債上半季ノ利金表ハ五月十日マテ下半年ノ利金表及ヒ舊公債年賦金表ハ十一月十日マテ毎年大藏省ヘ差出スヘシ

第二節 大藏省ヨリ右合計表ニ從テ其下渡スヘキ金高ヲ拂場所ヘ廻送ノ手續ヲ爲シ臨時官

明治九年
五月十號
布告ヲ以
テ改正

員出張スルガ又ハ其地方官ニ委任シ都テ證書ノ下ニ附添スル其年ノ拂方ニ屬スル小札ヲ切取り引換ニ其拂方ヲ爲スヘシ

第三節 右切取りタル小札ハ其拂方ヲナシタル明細書ト共ニ直ニ之ヲ大藏省ニ送納スヘシ

第五條 (新公債証書拂方諸般ノ手續ヲ明ニス)

第一節 新公債証書ノ元金拂方ヲ爲スニハ毎年又ハ隔年大藏省ノ都合ニ從ヒ抽籤ノ法ヲ以テ拂渡ス可シ

右抽籤ノ法ハ証書ノ記號ヲ明ニシ其年拂戻ス可キ金高ヲ定メ此金高ニ証書ノ高ナ部分シテ東京或ハ大坂等証書ノ金額最モ多キ場所ヘ國債寮ノ官員出張シテ其地方ノ長官及ヒ公債掛立會ノ上管下ノ証書所持人十人以上ヲ集メ眼前ニ於テ籤ヲ抽キ其籤ニ當リシ部分ヲ其年ノ拂戻スヘキモノト定ムヘシ

第二節 抽籤ノ處置相濟ミ賦當ノ記號公定スレハ立會タル証書所持人等ヨリ其抽籤ノ方法公正ナル事ヲ保証スル爲メ書面ヲ出サシメ然ル後何記號証書ハ何月何日何處ニ於テ拂戻ス可シト云フヲ布告書又ハ新聞紙ニテ普ク世上ニ公告ス可シ

第三節 右拂場所ヘハ大藏省ヨリ拂戻スヘキ金高ノ廻送ヲ爲シ公債拂方ノ官員出張シテ(時宜ニヨリテ地方官ニ委任スルコトアル可シ)其籤ニ當リタル証書引換ニ其拂方ヲナシ其

明治十二年
第六號
追加

証書ハ拂濟ノ証ヲ印シ明細書ト共ニ直ニ大藏省ニ送納スヘシ

第四節 右拂方ノ取扱ハ(年賦又ハ利息拂方トモ)大藏省ノ都合ニヨリテ追テ各地ニ創立スヘキ國立銀行ニ命シ名代人トシテ其處置ヲ爲サシムルコトアルヘシ

第五節 凡ソ公債元金利ニ賦金拂渡ノ際其期日ヲ失シ受取方申出テス其拂渡スヘキ年ノ翌年ヨリ向五ヶ年ヲ過クルルハ一切之レヲ拂渡サス証書所持主ノ損失タルヘシ然レモ其受取難キ事由ヲ該期限内ニ其管應ニ申出テ認可ヲ經タル者ハ此限ニ在ラス

但シ起業公債証書記名無記名モ本節ニ準ス又次條改正追加ノ内第十二節ヲ除キ該公債証書ニ適用スルモノトス

第六條 (新舊公債証書受授買賣等ノ手續ヲ明ニス)

第一節 「新舊公債証書共全ク所持人ノ所有物ナレハ他人(外國人ヲ除ク)ヘ讓渡賣渡質入等都テ勝手タルヘシ尤モ死者又ハ失踪者遺留ノ公債証書并ニ養子ノ戸主離縁復籍スルル其養家ニ屬スル公債証書ハ特約アルモノ、外總テ其遺留財産ヲ相續スヘキモノ、所有ニ歸スルモノトス

但本文讓渡賣渡ハ第二節以下ノ手續ニ照準スヘク又死亡失踪離縁ニヨリ遺留セル証書ハ此條例附錄第二圖ノ振合ニ依テ名面書替ノ上管應ノ捺印ヲ受クヘシ

第二節 証書ヲ受授及ヒ賣買スルニハ双方示談整ヒシ上ニテ甲ノ方(讓リ主賣主ト云フ)ハ

明治十三年
第三號
改正

明治十四年四月十四日
加一但書

證書裏面へ形ノ(裏面離形)記名調印シテ別ニ其證書ノ種類記號番號金高枚數月日及ヒ乙(受クル者買人ヲ云フ)ノ姓名等ヲ認メ其證書ト共ニ甲ヨリ之レヲ其管廳ニ差出スヘシ
但シ裁判所ニ於テ公賣スル證書ヲ買受ケタル者又ハ裁判所ノ言渡ニヨリ流質トナリタル證書ヲ有スル者此ノ條例附録第三圖ノ振合ニ依テ名面書替ノ上裁判所ヨリ管廳ヘノ通知書ヲ添ヘ管廳ニ檢印ヲ受クヘシ

第三節 管廳ノ公債掛ハ右證書届書トテ受取り其次第ヲ承リ正シ證書裏面へ形ノ如ク(裏面離形)年號月日ヲ記シ檢印シテ之ヲ差出セシ者ハ下渡シ其趣ヲ簿冊ニ詳記シ大藏省ヘハ翌月五日迄ニ届出ヘシ

第四節 (明治十二年七月五日第二十六號布告ヲ以テ本節中「若シ遠隔ノ地方云々以下罰金ヲ命スヘシ」ノ百二字ヲ消除ス)

右ノ手續ニテ檢印濟ノ證書ヲ甲ヨリ乙ヘ渡シタルキ甲乙トモ同管下ノ者ナレハ別ニ届書ヲ出スニ及ハスト雖モ管轄違ナレハ其證書ノ種類記號番號枚數及ヒ甲ノ姓名年號月日ヲ詳記シテ乙ヨリ其管廳ヘ速ニ届出ヘシ

但シ利賦金拂方施行中ニ讓受買受ノ證書他ノ地方ヨリ増加シ來ル分ハ先ツ買主ノ届出ヲ聞届最初ノ拂方相濟シ上ニテ利賦金受取方追加表ヲ製シ尙大藏省ニ差出スヘシ
第五節 乙ノ地方管廳ニテハ右ノ届出アレハ前以テ備置キタル公債簿冊ヘ其證書ノ金高種

類記號番號枚數及ヒ其名面取引ノ年號月日ヲ登記シ且ツ證書ヘ割印シテ下渡スヘシ

第六節 右ノ手續ヲ以テ取引タル證書ヲ更ニ他人ニ(外國人ヲ除ク)讓渡スルキモ都テ前條ノ手續ニ從テ之ヲ處置スヘシ

第七節 (明治十二年七月五日第二十六號布告ヲ以テ本節中「若其送達云々違令ノ罪ニ處スヘシ」ノ四十字ヲ削去ス)

新舊公債證書ヲ管轄違ヒコテ讓渡賣買等ノ事アレハ甲ノ地方管廳ヨリハ即日乙ノ地方管廳ヘ其證書ノ種類記號金高及ヒ名面取引ノ年月日ヲ詳記シ送達スルキ直チニ公債簿上ヲ削除スヘシ尤モ此時證書ヘ割印ヲ爲スニ不及乙管廳ニテハ右送達書ヲ得タルハ直チニ其旨ヲ甲管廳ヘ回報スヘシ尤モ甲管廳ヨリ乙管廳ヘ送達ノ封書ヲ都合ニ因テ讓受買受人ヘ托シテ送達スルモ妨ケナシ且ツ大藏省ヘハ一月分翌月五日マテニ甲乙管廳ヨリ互ニ届出ヘシ

但シ乙ノ管廳ニテハ右送達之レナキ間ハ其證書賣買スルヲ差留置クヘシ

第八節 新舊公債證書所持ノ者管轄替相成ル節ハ甲ノ地方管廳ヨリ乙地方管廳ヘ相達スル儀ハ第七節ノ通りタルヘシ本人ハ所持ノ證書種類記號番號金高枚數及ヒ轉籍ノ年號月日住居ノ地名等詳記シ乙管廳ニ届出ヘシ管廳ニテハ公債簿冊ニ登記シ證書ヘ割印シテ下渡スヘシ

第九節 他ノ府縣ヨリ寄留ノモノ新舊公債證書ヲ讓受ケ買受ケントスルキハ寄留地ノ管廳ニ申立管廳ニテハ本管ノ人民同一ノ取扱ヲ爲スヘシ就テハ年々元利金モ其廳ヨリ拂渡スヘシ

但シ後日本籍へ復版スルキハ本人ヨリ即日管廳へ届出ヘシ

管廳ニテハ復歸ノ地方廳へ通達方并ニ本人届方等第八節ノ通タルヘシ

第十節 新舊公債證書所持ノモノ他ノ府縣へ寄留スルキハ年々元利拂及ヒ讓渡シ賣渡シト寄留地管廳ノ主務ト爲スニ付キ寄留セントスル者ハ證書ノ種類記號番號金高枚數トモ本管廳へ届出ヘシ本管廳ニテハ寄留地ノ管廳へ送達シ寄留地ノ管廳是ヲ受ケテ取扱ヲ爲ス手續ハ第七節第八節ニ照準スヘシ若シ其身他へ寄留スト雖モ都合ニ因テ公債證書ハ本貫へ殘シ置キ年々元利受取或ハ讓渡賣渡ヲ爲ス如キハ寄留地管廳ニテ與カルコナカルヘシ然レモ所持高ノ内都合ニ因リ幾分カ引分ケ寄留先へ携帯スルキハ其分ヲ本管廳へ届出本管廳ヨリ寄留地ノ管廳へ送達ノ手續ハ前條ニ記載セル通タルヘシ尤モ本籍へ殘シタル證書ハ本管廳ノ所轄勿論ニシテ年々元利受取或ハ讓渡賣渡等本人ヨリ委任狀ヲ與フヘシ代理人ヲ以テ其取扱ヲ爲ス妨ケナカルヘシ

但シ後日本籍へ復歸スルキハ第九節但書ノ通りタルヘシ

第十一節 「都テ讓渡シ又ハ賣買等ハ相對ノ約定ヲ以テ其所有權ヲ轉移スルヲ得ヘシ然レ

明治十二年
第廿六

號布告ヲ
以テ改正

凡前各節ノ手續ヲ了セサル間ハ其讓受ケ主買主ニ於テ假令其證書ヲ所持スルトモ利賦利金及ヒ元金ハ官簿ニ記載ノ債主ニアラサレハ下渡サヌ又證書紛失等ヨリ代リ證書ヲ願出ルモ亦同シ

第十二節 (明治九年四月十七日第五十號 布告明治十年三月二十八日第三十四號 布告明治十一年八月二十八日第二十二號 布告及ヒ明治十二年七月五日第二十六號 布告ヲ以テ本節ヲ改正並ニ追補ス乃チ左ノ如シ)

「毎年六月一日ヨリ十五日マテ新舊公債利息渡方并ニ十二月一日ヨリ十五日迄ニ新公債利息舊公債元金年賦渡方ヲ爲スニ付キ五月一日ヨリ六月十五日迄十一月一日ヨリ十二月十五日迄ハ各地方證書所持人ノ混淆セサル爲メ右證書ノ讓渡賣買ノ届出ヲ見合スヘシ」

第十三節 「公債證書ヲ諸官廳ノ所有トシ引受ル節ハ其廳主掌官ノ官名姓名ヲ記シ讓渡等ノ節ハ其官印(官印ナキモハ其實印)ヲ捺スヘシ

但シ記名者代換ノ時ハ次節ノ手續ニ照準スヘシ

第十四節 「銀行及ヒ公認シタル會社學校又ハ町村組合等ノ類共同合資ニシテ所持主一個人ニ限リ難クトモ其内主長タル者又ハ證書管保ノ責ニ任スル者等一個人ノ姓名ヲ記シ肩書ニ其責任タル名義ヲ記シ(例へハ學校ハ其取締又ハ世話掛銀行又ハ會社ハ頭取其支店ハ支配人町村組合ハ總代人等何レモ其責任タル名目ヲ肩書ニシ以テ一個人ノ私有ニ非ラ

同前

明治十三年
第三十
號ヲ以テ
但書追加
ス
同前

サレトモ明ニスルノ類)而シテ讓渡其他一切右記名者ノ實印ヲ以テ取引致スヘシ右記名者代換等ノ節ハ右ノ類ニ限リ代任ノ者ヘ引繼キ證書書換ニ及ハスト雖代換ノ譯及ヒ其肩書姓名印影ヲ管廳ヘ届出スヘシ其廳ニ於テハ簿冊ヘ其譯并ニ名面年號月日等ヲ登記シ置クヘシ

但シ是マテ銀行會社學校等ニ於テ記名者ヲ定メス所有スル向ハ證書書換ニ及ハス本節ニ照ラシ記名者ヲ定メ管廳ヘ届置ク可シ向後讓渡其他一切本節ニ照準シテ取引致ス可シ

第七條 (新舊公債證書引當物等ニナシタル處置ノ手續ヲ明ニス)

第一節 新舊公債證書借金ノ引當又ハ質物ノ證據金トシ所持人ヨリ他ニ預ケ置クコトアリトモ其拂戻ス可キ元金利息ハ其所持人ヘ下渡ス可シ尤モ本人調印ノ委任狀ヲ持參セルルルコトハ(外國人ヲ除クノ外)何人ヘナリトモ相渡ス可シ

第二節 若シ又質入流込ミトナリタル類ハ讓リ渡賣買ノ手續ヲ爲スコト第六節第二節第三節第四節ノ通タル可シ

第八條 (新舊公債證書共裏面並ニ引換等ノ手續ヲ明ニス)

第一節 新舊公債證書讓渡賣買頻繁ニシテ裏面記名ノ場所ナキニ至ル時ハ其所持人ハ書面ヲ以テ其地方管廳ニ申立證書ノ繼足ヲ願ヒ其證書ヲ差出スヘシ

第二節 地方管廳ニテハ其證書ノ假受取ヲ所持人ニ渡シ置キ證書ヘハ兼テ大藏省ヨリ渡置タル記名紙ヲ補足シ割印シテ其次第年號月日等ヲ簿冊ニ記入シ假受取ト引換ニ之レヲ其所持人ニ渡スヘシ

第九條 (新舊公債證書共紛失等ノ處置ヲ明ニス)

第一節 新舊公債證書ノ所持人若シ證書ヲ取失フカ又ハ盜難ニ逢テ證書ヲ盜取レシキハ何號何番何高ノ證書幾許ヲ紛失又ハ盜取ラレタル由ヲ直ニ其地方管廳ヘ届出管廳ヨリ之ヲ大藏省ヘ届出ヘシ

但シ管廳ニテハ大藏省ヘ届出ルルキハ管内ヘ其趣ヲ布達スヘシ

第二節 大藏省ニテ右ノ届書ヲ受取レハ速ニ其趣并ニ證書種類番記號枚數等ヲ掲ケ何月何日後日ハ右證書ヲ取引スヘカラス又何人ニ限ラヌ所持致居候ヲ見聞候者ハ速ニ管轄廳ヘ訴出管轄廳ヨリハ即チ大藏省ニ届出ヘキ旨ヲ布達ス地方管廳ニテハ即チ右ノ旨ヲ新聞紙其他ノ手續(新聞紙ナキ地ハ村町高札場ニ揭示セシム)ヲ以テ紛失又ハ盜取ラレシ月ヨリ七ヶ月間管内ヘ公布ス可シ

第三節 右公布ノ間ハ其證書ノ元金又ハ利息共之ヲ拂ヒ渡サ、ル可シ

第四節 七ヶ月ヲ過キ其證書發見セサレハ大藏省ニテ其證書ニ換フ可キ新證書ヲ作クリ其地方管廳ヲ通シテ之レヲ所持人ヘ交付ス可シ尤モ公告時間中ニ積リタル元利ノ高ハ其新

證書ヲ渡シタル次ノ拂期月ニ一同之ヲ拂渡ス可シ

但シ此ノ新證書ヲ渡ス時元證書ノ記號其外紛失又ハ盜難ニ付此條々ノ手續ヲナセシ後
ナ更ニ交付スルノ趣意ヲ大藏省及ヒ其管廳ノ簿冊ニ記入ス可シ

第十條 (新舊公債證書共燒失等ノ處置手續ヲ明カニス)

第一節 水火災ニテ證書流焼失ノ事アレハ所持人ハ前條ノ手續ニ從テ書面ニテ其由ヲ管
廳ニ申立テ新證書下渡方ヲ乞フヘシ

第二節 管廳ニテハ其流失焼失ノ次第ヲ推糺シ判然タレハ直チニ其次第及ヒ推糺ノ手續ヲ
大藏省ヘ申立ツヘシ

但シ其流焼失若シ判然タラサレハ第九條紛失ノ手續ニ從テ之ヲ處置スヘシ
第三節 大藏省ニテハ其申立ニ從テ代リ證書ヲ作り之ヲ其管廳ニ送達シテ所持人ニ交付ス
ヘシ

但シ證書流焼失ニ付キ新證書交付ノ趣旨ハ大藏省地方官ノ簿冊ニ詳記スヘシ
第四節 若シ又水火災ニテ其證書ノ部分焼切レ又ハ消滅シテ通用シ難キ程ナレハ所持人ハ

證書ノ殘紙ヲ添ヘ書面ニテ其由ヲ其管廳ニ申立證書ノ書替ヲ乞フヘシ
第五節 其管廳ニテハ其證書ノ殘紙ヲ添ヘ書面ニテ大藏省ヘ申立書替證書ヲ得テ之レヲ下
渡ス可シ

但シ其書替ノ手續ハ大藏省地方官ノ簿冊ニ詳記スヘシ

第十一條 (新舊公債證書贗造等ノ處分ヲ明ニス)

第一節 何人ニ不拘公債證書ヲ故ラニ剝去リ又ハ切裂キ又ハ塗抹シ孔ヲ穿チ糊付ニスル等
ノ事ヲ爲ス可カラズ若シ犯ス者アラハ裁判ノ上其金高十倍以下ノ罰金ヲ命ス可シ

但シ舊公債證書ハ年賦拂濟ノ金高ヲ引去リ殘餘ノ小札金額ニ依テ計算シ罰金ヲ當ル者
トス

第三節 何人ヲ論セス此ノ公債證書ヲ贗造シ又ハ人ヲシテ之ヲ模擬セシメ又ハ人ノ贗造ス
ルヲ助ケ又ハ贗造ト知リテ通用セシメ又ハ證書ノ圖畫文字ヲ變換シ又ハ人ヲシテ變換セ
シメ又ハ變換セシモノト知リテ之レヲ通用シ其他似寄ノ板版紙品雛形ノ圖畫文字等ヲ所
持スル者ハ都テ裁判ノ上法ニ處スヘシ

第十二條

第一節 政府ノ都合ニヨリテ要用ノ事アレハ利息及ヒ償却年限ヲ除クノ外正條例ヲ増補シ
又ハ之ヲ改正スルコアルヘシ

第二節 右増補改正等アレハ速ニ其由ヲ世上ニ公告スヘシ

證書讓(賣渡)裏面雛形

明治十年三月十四日
明治十年三月十四日
明治十年三月十四日
明治十年三月十四日
明治十年三月十四日
明治十年三月十四日
明治十年三月十四日
明治十年三月十四日
明治十年三月十四日
明治十年三月十四日

割 印

一此證書是迄拙者所持ノ處貴殿へ譲渡候事實正也

明治 年 月 日

何府 下何大區何小區何町何番地

乙 某 殿

本文之通相違無之者也

何府

公債掛

明治 年 月 日

何 某 印

乙某寄留人ナルキハ左ノ通

本貫何(府縣華士族カ平民カ)

何(府縣)下何大區何小區何町何番地寄留

何所何番地居留

乙 某 殿

右ノ通タルヘシ尤モ施行濟ノ分ハ此限ニ非ラス

○明治八年八月廿四日第三百三十號布告

明治七年(三月)第三十九號布告家祿引換公債證書發行條例自今相廢止候條左ノ二ヶ條ノ外諸般ノ手續總テ本年(五月)第九十五號布告新舊公債證書發行條例ノ通可相心得此旨布告候事

一家祿引換公債證書ノ元金拂渡ハ家祿引換相渡候三ヶ年目ヨリ七ヶ月ノ間ニ政府ノ都合ニ寄リ抽籤ノ法ヲ以テ拂渡ス可シ

「年八朱ノ利息ハ年々十一月一日ヨリ十五日マテニ拂渡スニ付キ證書所持人混淆セサル爲メ十月一日ヨリ十一月十五日マテ證書ノ賣買讓渡等ノ届出ヲ見合各管廳ニ於テ十月一日證書所持人ノ數ヲ取調ヘ其季ノ拂方ニナルヘキ名面並金高内譯合計表ヲ作り同月十五日マテニ大藏省ニ差出スヘシ

○明治十年三月十三日第三十二號布告

各社領朱黑印地並ニ除地收額中ヨリ從前配當受來候舊神宮ノ輩ハ右配當高ヲ別紙祿制ニ引充候上金額ニ換ヘ五ヶ年分ノ合計配當祿公債證書ヲ以テ一時ニ下賜候條右公債證書ハ明治八年(八月)第百十三號布告ノ通可相心得此旨布告候事
但配當米金受來候者ハ確正相添來ル四月三十日限リ其管轄廳へ可申出若シ右期限後ニ至ッ如何様ノ事情申出候共採用不相成候條此旨兼テ可相心得事

別紙

祿制

配當現米

- 千石以上
- 千石未滿
- 九百石迄
- 九百石未滿
- 八百石迄
- 八百石未滿
- 七百石迄
- 七百石未滿
- 六百石迄
- 六百石未滿
- 五百石迄
- 五百石未滿
- 四百石迄

祿制現米

- 三百石
- 二百八十石
- 二百六十石
- 二百四十石
- 二百二十石
- 二百石
- 百六十二石五斗

七百二

- 四百石未滿
- 三百石迄
- 三百石未滿
- 二百石迄
- 二百石未滿
- 百石迄
- 百石未滿
- 九十石迄
- 九十石未滿
- 八十石迄
- 八十石未滿
- 七十石迄
- 七十石未滿
- 六十石迄
- 六十石未滿
- 五十石迄

- 百二十五石
- 八十七石五斗
- 五十石
- 四十五石二斗二升
- 四十石四斗四升
- 三十五石六斗七升
- 三十石八斗九升
- 二十六石一斗一升

七百三

五十石未滿
四十石迄
三十石未滿
三十石迄
二十石未滿
二十石迄
十石未滿
十石迄
五石迄
五石以下

二十一石三斗三升
十六石五斗八升
十一石七斗八升
七石
五石
從前之通

(八三)社寺土地賣買質地處分方(明治九年五月十二日)

明治三年^{十二}社寺領現境內ヲ除クノ外土地ノ儀布告候處朱黑印除地上地ノ中内實ハ賣買又ハ質地ト相成候者モ有之哉ノ趣不都合ノ至ニ候得共此布告以前ニ係ルモノハ特別ノ詮議ヲ以其罪ヲ問ハス更ニ民有地トナシテ差支無之分ハ賣買地ハ買得者ハ流質地ハ質取主ハ其儘

無代價ニテ下渡シ其民有地トナシ差支アルモノ並賣地年限中ノ分ハ土地セシムヘク若シ此布告以後ニ係ルモノハ律ニ照シ處分スヘク候條此旨布告候事

(八四)集會條例(明治十三年四月五日)

第一條 政治ニ關スル事項ヲ講談論議スル爲メ公衆ヲ集ムル者ハ開會三日前ニ講談論議ノ事項講談論議スル人ノ姓名住所會同ノ場所年月日ヲ詳記シ其會主又ハ會長幹事等ヨリ管轄警察署ニ届出テ其認可ヲ受クヘシ

第二條 「政治ニ關スル事項ヲ講談論議スル爲メ結社(何等ノ名義ヲ以テスルモ其實政治ニ關スル事項ヲ講談論議スル爲メ結合スルモノヲ併稱ス)スル者ハ結社前其社名社則會場及ヒ社員名簿ヲ管轄警察署ニ届出テ其認可ヲ受クヘシ其社則改正シ及ヒ社員ノ出入アリタルトキモ同業タル可シ此届出ヲ爲スニ當リ警察署ヨリ尋問スルコトアレハ社中ノ事ハ何事タリ用之ニ答辯スヘシ

前項ノ結社及其他ノ結社ニ於テ政治ニ關スル事項ヲ講談論議スル爲メニ集會ヲ爲サントスル片ハ尙ホ第一條ノ手續ヲ爲ス可シ

第三條 講談論議ノ事項講談論議スル人員會場及ヒ會日ノ定規アル者ハ其定規ヲ初會ノ三日前ニ警察署ニ届出認可ヲ受クル片ハ爾後ノ例會ハ届出ニ及ハスト雖^凡之ヲ變更スル片

明治十五年
第七號
正告
以テ

同前

ハ第一條ノ手續ヲ爲ス可ヘシ

第四條 「管轄警察官ハ第一條第二條第三條ノ届出ニ於テ治安ニ妨害アリト認ムルハ之ヲ認可セズ又ハ認可スルノ後ト雖モ之ヲ取消ス可アル可シ」

第五條 警察署ヨリハ正服ヲ着シタル警察官ヲ會場ニ派遣シ其認可ノ証ヲ検査シ會場ヲ監視セシムルコアル可シ

「警察官會場ニ入ルキハ其求ムル所ノ席ヲ供シ且其尋問アルキハ結社集會ニ關スル事ハ何事ヲリテ之ニ答辯ス可シ」

第六條 派出所警察官ハ認可ノ証ヲ開示セサルハ講談論議ノ届書ニ掲ケサル事項ニ亘ルキ又ハ人ヲ罪戾ニ教唆誘導スルノ意ヲ含ミ又ハ公衆ノ安寧ニ妨害ナリト認ムルキ及ヒ集會ニ臨ムヲ得サル者ニ退去ヲ命シテ之ニ從ハサルキハ全會ヲ解散セシム可シ

「前項ノ場合ニ於テ解散ヲ命シタルキ地方長官(東京ハ警視長官)ハ其情狀ニ依リ演說者ニ對シ一箇年以内管轄内ニ於テ公然政治ヲ講談論議スルヲ禁止シ其結社ニ係ルモノハ仍ホ之ヲ解散セシムルコトヲ得内務卿ハ其情狀ニ依リ更ニ其演說者ニ對シ一箇年以内内國內ニ於テ公然政治ヲ講談論議スルヲ禁止スルコトヲ得」

第七條 政治ニ關スル事項ヲ講談論議スル集會ニ陸海軍人常備像備後備ノ名籍ニ在ル者警察官官立公立私立學校ノ教員生徒農業工藝ノ見習生ハ之ニ臨會シ又ハ其社ニ加入スルコトヲ得ス

同前

第八條 「政治ニ關スル事項ヲ講談論議スル爲メ其旨趣ヲ廣告シ又ハ委員若クハ文書ヲ發シテ公衆ヲ誘導シ又ハ支社ヲ置キ若クハ他ノ社ト連絡通信スルコトヲ得ス」

第九條 政治ニ關スル事項講談論議スル爲メ屋外ニ於テ公衆ノ集會ヲ催ストキ得ス

第十條 第一條ノ認可ヲ受ケシメテ集會ヲ催スモノ會主ハ貳圓以上二十圓以下ノ罰金若クハ十一日以上三月以下ノ禁獄ニ處シ其會席ヲ賃シタル者並ニ會長幹事及ヒ其講談論議者ハ各貳圓以上貳十圓以下ノ罰金ニ處シ第三條ノ規程ヲ犯シタル者モ亦本條ニ依ル

同前

第十一條 「第二條第一項ノ規程ニ背キテ届出ヲ爲サズ又ハ尋問スル所ノ事項ヲ問答セザルキ社長ハ貳圓以上貳拾圓以下ノ罰金ニ處シ詐欺ノ届出ヲ爲シ或ハ尋問ヲ得テ偽答スルキハ社長ハ右罰金ノ外尙ホ十一日以上三月以下ノ輕禁錮ニ處ス」

同前

第十二條 「第五條ノ規程ニ背キテ派出所警察官ノ臨席ヲ肯セズ又ハ其求ムル所ノ席ヲ供セザルキ會主會長及社長幹事ハ各五圓以上五十圓以下ノ罰金若クハ一月以上一年以下ノ輕禁錮ニ處シ警察官ノ尋問ニ答ヘズ又ハ偽答スル者ハ同罪ニ處ス再犯ニ當ル者ハ拾圓以上百圓以下ノ罰金若クハ二月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處ス」

第十三條 派出所警察官ヨリ解散ヲ命シタル後尙ホ退散セサル者ハ貳圓以上貳拾圓以下ノ罰金若クハ十一日以上六月以下ノ禁獄ニ處ス

第十四條 第七條ノ制限ヲ犯シタルハ會主會長及ヒ社長幹事ハ貳圓以上貳十圓以下ノ罰金
若クハ十一日以上三月以下ノ禁獄ニ處シ其他情狀ノ重キモノアレハ其社ヲ解散セシム其
制限ヲ犯シテ入社シ又ハ臨會スル者ハ貳圓以上貳拾圓以下ノ罰金ニ處ス

第十五條 第八條ノ制限ヲ犯シタルハ會主及會長及ヒ社長幹事ハ五圓以上五十圓以下ノ罰
金若クハ一月以上一年以下ノ禁獄ニ處シ其社ヲ解散セシム此事ニ關スル者モ亦同罪ニ處
シ脅迫スル者及ヒ罪再犯ニ當ル者ハ拾圓以上百圓以下ノ罰金若クハ二月以上二年以下ノ
禁獄ニ處シ其社長幹事ハ一年以上五年以下ノ結社又ハ入社ヲ禁ス

第十六條 「學術會其他何等ノ名義ヲ以テスルニ拘ハラヌ多衆集會スル者警察官ニ於テ治
安ヲ保持スルニ必要ナリト認ムルハ之ニ監臨スルヲ得若シ其監臨ヲ肯セサルハ第
十二條ニ依テ處分ス」

第十七條 前條ノ場合ニ於テ治安ヲ妨害スト認ムルハ第六條ニ依テ處分ス

第十八條 「凡ソ結社若クハ集會スル者内務卿ニ於テ治安ニ妨害アリト認ムルハ之ヲ禁
止スルヲ得若シ禁止ノ命ニ從ハヌ又ハ仍ホ秘密ニ結社若クハ集會スル者ハ拾圓以上百
圓以下ノ罰金若クハ二月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處ス」
第十九條 成法ニ制定スル所ノ集會ハ此限ニ在ラス

同前

同前

同前

○明治十三年四月六日第三號布告
今般第十貳號布告ノ通り集會條例被定候ニ付テハ從前集會結社候者モ右條例ニ依リ更ニ届
出ヘシ此旨布告候事

○明治十五年十二月二十八日第七十號布告
府縣會議員會議ニ關スル事項ヲ以テ他ノ府縣會議員ト聯合集會シ又ハ往復通信スルコトヲ
許サス

其集會スルモノ何等ノ名義ヲ以テスルモ府知事縣令ニ於テ此禁令ヲ犯ス者ト認ムルハキハ
直ニ解散ヲ命スヘシ
前項ノ場合ニ於テ解散ノ命ニ從ハサルモノハ集會條例第十三條ニ依テ處ス

○明治十三年五月五日内務省乙第三十二號達
今般集會條例御發行相成候ニ付テハ陸軍々人并諸生徒ニシテ右條例ノ制限ヲ犯スモノハ總
テ地方裁判所ノ處分ニ屬スル儀ト心得フヘシ

(八五)酒造稅則(明治十三年九月廿七日)
今般酒造稅則別冊ノ通相定本年十月一日ヨリ施行シ從前ノ酒類稅則ハ同日ヨリ廢止候條此
旨布告候事

第一章 免許鑑札 税率

第一條 凡ソ酒類ヲ製造シテ營業セント欲スル者ハ其旨管廳ニ願出酒造場一ヶ所毎ニ免許鑑札ヲ受クヘシ

第二條 酒類ヲ分テ左ノ三種トシ免許ヲ受ケタル者ハ總テ之ヲ製造スルヲ得ヘシ

一類 釀造酒 清酒濁酒其他釀造

二類 蒸溜酒 燒酎「酒精再溜酒精」其他

三類 再製酒 蒸溜シタルモノヲ云フ (第十七號布告ヲ以テ加入ス)

第三條 「免許ヲ受ケタル者ハ免許稅及ヒ造石稅ヲ納ムヘシ其額左ノ如シ

酒造免許稅

酒造場一ヶ所ニ付

金三拾圓

酒類造石稅

一類壹石ニ付

金四圓

二類壹石ニ付

金五圓

三類壹石ニ付

金六圓

第四條 免許ハ其年十月一日ヨリ翌年九月三十日迄ヲ以テ一期トス

明治十五年十月一日施行
正以テ加テ
ナ月十六日
十月一日

「酒類製造新規願ノ者ハ造石高左ノ制限以上ニアラサレハ免許セズ

清酒

百石

濁酒

拾石

一類 清酒濁酒 二類 三類

五石

新ニ酒造營業ヲサントスル者ハ其地方同業者五人以上ノ連印ヲ以テ願出ヘシ

第五條 酒造營業人不在又ハ事故アル時ハ代人ヲ置キ此規則ニ關スル諸般ノ事ヲ辨セシム

ヘシ

第六條 免許鑑札賣買讓與スル時ハ双方連印ノ願書ニ管廳ニ差出シ書換ヲ請フヘシ

第七條 免許鑑札ヲ失却毀損スルカ或ハ替改名轉居セシキハ其旨管廳ニ願出再渡又ハ書換

ヲ請フヘシ

第二章 納稅 造石檢査

第九條 造石稅ハ右ノ三期ニ納ムヘシ

第一期 「四月二十日限

十月一日ヨリ二月中檢査濟石數ニ係ル稅額ノ半數

第二期 七月三十一日限

三月一日ヨリ六月中檢査濟石數ニ係ル稅額ノ半數

明治十五年十月一日施行
號布告
以テ改正

「第三期 十月三十一日限」

七月一日ヨリ皆造検査済石數ニ係ル税額並前納額ノ殘數
第十條 造酒ノ石數ハ總テ管廳へ申出テ検査ヲ受クヘシ

「廢業ノ際未製成ノ酒類ヲ所持スルモノハ其節管廳へ申出検査ヲ受ケ現石數ニ付納税スヘシ

但未製成ノ酒類ヲ營業者ニ賣渡シ又ハ二個所以上免許ノ者其一個所以上ヲ廢シ尙存セル
酒造場へ其酒類ヲ移スルハ管廳へ届出且製成ノ上検査ヲ受クヘシ

第十一條 前條ノ酒類ハ八月三十一日迄ニ皆造スヘシ

第十二條 自家用料又ハ造酒保存ノ料ニ充テ製造スル酒類ト雖モ總テ管廳ノ検査ヲ受ケ其
造石税ヲ納ムヘシ

第十三條 検査未済ノ酒類へ検査済ノ酒類又ハ古酒買入酒等ヲ混和スル者モ其造石税ハ總
石數ヲ以テ之ヲ納ムヘシ

第十四條 検査未済ノ酒類ヲ届出ノ上他ノ酒類ニ變製(第一章第二條中一類ノ酒ヲ二類ニ
二類ヲ三類ニ變製スル類)スル時ハ造石税ハ其變製シタル酒類ニ就キ之ヲ納ムヘシ

第十五條 検査済ノ酒類ヲ他ノ酒類ニ變製スル時ハ既ニ検査済ノ石數ニ係ル造石税ヲ納ム
更ニ變製ノ石數ニ就キテ造石税ヲ納ムヘシ

但シ變製ノ節ハ必ス管廳へ届出テ検査ヲ受クヘシ且製成ノ上ハ第十條ノ手續ニ據リ
検査ヲ受クヘシ

第十六條 皆造期限前ニ於テ非常ノ損害ニ罹リタル酒類ハ直ニ管廳へ申出検査ヲ受クヘシ
第十七條 前條検査ノ上再ヒ酒類ニ製成スル者ハ其石數ニ應シ造石税ヲ納ムヘシ其製成ス
ルヲ得サル者及ヒ廢棄シタル者ハ其石數ニ係ル造石税ヲ免除ス

第十八條 葡萄酒及ヒ麥酒ノ類ヲ製造スル者ハ免許税ヲ納ムヘシト雖モ造石税ハ之ヲ免除
ス

第十九條 酒造中ハ管廳主任官員時々巡回スヘキニ付何酒類ヲ問ハス其仕込タル酒もと其
他仕込米及ヒ營業ニ關スル諸帳簿等ノ検査ヲ受クヘシ

第二十條 「酒造生諸器械ハ使用以前管廳へ申出検査ヲ受ケ其賣買讓與貸借ハ其時々管廳
へ届出ツヘシ

造酒着手後造石税完納以前ニ於テハ管廳ノ許可ヲ得ヌシテ諸器械ヲ酒造場外へ移スルヲ
許サス

酒造用諸器械ヲ賣與讓與貸與及ヒ所持主へ返却スルトキハ第九條ノ納期ニ拘ハラズ検査
済ニ係ル造石税ヲ完納ス可シ

第三章 禁令 雜令

第二十一條 酢及ヒ酒モトヲ販賣スルヲ許サス

「但事故アリテ酒もとノ不用ニ屬シタルモノヲ同業ノ者ニ限り賣渡スハ此限ニ在ラス」
第二十二條 「他ノ依托ヲ受ケテ酒類ヲ代造シ又ハ酒造營業人ニ非サルモノニ酢及ヒ酒類

ヲ製造スル爲メ酒釀場ヲ貸スヲ許サス」

第二十三條 檢査未済ノ種類ヲ賣捌キ貸與讓與若クハ自家ノ所用ニ消糜スルヲ許サス

檢査既済ノ酒類へ檢査未済ノ酒類ヲ混和スルヲ許サス

第二十四條 免許鑑札ハ貸借スルヲ許サス

第二十五條 造酒(搾リ蒸溜)器ニハ管廳主任官員ノ封緘ヲ受ケ置キ使用スルトキハ其旨申

出開封ヲ請フヘシ

但シ過誤等ニテ封緘ヲ毀損シタルトキハ直ニ管廳へ届出再封ヲ請フヘシ

第二十六條 免許ヲ受ケタル者ハ其節管廳へ該一期造酒見込ノ種目石數並ニ其造リ方法共
届出ヘシ

但種目變換並ニ見込石數ノ増減等ハ其時々届出可シ

第二十七條 酒造ニ屬スル倉庫納屋並ニ諸器械共豫テ管廳へ届出ヘシ

但増減ハ其時々届出ヘシ

第二十八條 一期造酒届出ノ石數何酒何石造ト書シタル標札ニ免許鑑札ノ番號ヲ書載シ之

ヲ戸外ニ掲出スヘシ

第四章 罰令

第二十九條 免許鑑札ヲ受ケヌシテ製造シタル者ハ其酒類及ヒ製造諸器械共沒收シ免許稅

額ニ倍ノ金額ヲ稅シ之ヲ賣捌キタル者ハ其石數ニ相當スル造石稅三倍ノ金額ヲ併セ科ス

ヘシ

但シ本文酒類並ニ諸器械ヲ已ニ賣捌キタル者ハ其代價ヲ追徴スヘシ

第三十條 免許鑑札ヲ借受ケ製造スル者ハ第二十九條ニ據テ處分シ之ヲ貸與ヘタル者ハ其

鑑札取揚ケ免許稅相當ノ金額ヲ科スヘシ

第三十一條 「酒類石數ノ檢査ヲ受ケヌシテ之ヲ賣捌キ又ハ貸與讓與シタル者ハ其代價ヲ

追徴シ其酒類ノ石數ニ相當スル造石稅三倍ノ金額ヲ科スヘシ

但シ第二十一條但書ノ場合ニ於テハ此限リニ非ラス

第三十二條 酒類ヲ隱蔽シタル者ハ其酒類ヲ沒收シ其酒類ノ石數ニ相當スル造石稅三倍ノ

金額ヲ科スヘシ

但(明治十五年三月二十二日第十七號布告ヲ以テ但書ヲ削除ス)

第三十三條 檢査未済ノ酒類ヲ自用ニ消糜シタル者ハ其石數ニ係ル造石稅ニ相當スル金額

ノ三倍ヲ科スヘシ

同前

同前

第三十四條 第十四條ノ届出ヲ怠リタル者第五條第七條第二十八條ヲ犯シタル者ハ一圓以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス(明治十六年八月四日第二十六號布告ヲ以テ第
十四條ノ下又ハ第二十二條ノ四字ヲ削除ス)
 第三十五條 「第六條第二十五條第二十六條第二十七條ヲ犯シタル者ハ貳圓以上貳拾圓以下ノ罰金ニ處ス」

(明治十六年八月卅日第二十六號布告ヲ以テ本條第二項ヲ左ノ如ク改正ス)第二十條第一項ヲ犯シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス仍ホ其器械ヲ沒收ス第二項ヲ犯シタル者ハ五圓以上百圓以下ノ罰金ニ處シ仍ホ其器械ヲ沒收ス

第三十六條 第十條第二項第二十一條第二十二條第二十三條第二項ヲ犯シタル者ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處シ其製造酒類ヲ沒收ス之ヲ賣捌キタル者ハ其代價ヲ追徴スヘシ但第二十三條第二項ノ酒類ハ總石數ヲ沒收ス

第三十七條 此規則ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ不論罪及ヒ減輕再犯加重數罪俱發ノ例ヲ用ヒス但刑法第七十五條第一項ノ場合ハ此限ニアラス

第三十八條 酒造營業者ノ家族雇人ニシテ其營業ニ係リ此規則ヲ犯シタル時ハ總テ其營業者ヲ處罰ス

(八六)酒造稅則附則(明治十九年七月二十八日勅令第六十號布告)

第一條 自家用料ノ酒類(飲料ニ用ヒ醬油等ニ混和シ及ヒ其他ノ用ニ供スルモノ)ヲ製造スル者ハ管廳へ届出製造免許鑑札ヲ受ケ鑑札料金八十錢ヲ納ムヘシ

第二條 免許ハ其年十月一日ヨリ翌年九月三十日迄ヲ以テ一期トス

第三條 自家用料ノ清酒ヲ製造スルヲ得ス

第四條 左ニ掲グル者ハ自家用料ノ酒類ヲ製造スルヲ得ス

酒類受御賣營業者

飲食店又ハ旅館營業者

前二項ノ營業者へ同居ノ者

第五條 自家用料ノ酒類ハ一家内ニ於テ一期製造高一石(二種以上製造スル者ハ其總石數ヲ合算ス)ハ超ユルヲ得

第六條 自家用料ノ酒類ハ其住居セル一家外ニ於テ之ヲ製造シ又ハ他ノ委托ヲ受ケ之ヲ製造スルヲ得ス

第七條 自家用料ノ爲メ製造シタル酒類ハ之ヲ賣捌クヲ得ス

第八條 免許鑑札ハ賣買讓與貸借スルヲ得ス

第九條 自家用料ノ酒類ヲ製造スル者ハ主任官隨時之ヲ検査スヘシ

第十條 第一條第三條第四條第五條第六條第七條ヲ犯シタル者ハ三圓以上三十圓以下ノ罰

金ニ處シ仍ホ製造酒類及ヒ容器ヲ沒收ス之ヲ賣捌キタル者ハ其代價ヲ追徴ス

第十一條 第八條ニ違ヒ鑑札ヲ貸渡讓渡タルモノハ其鑑札ヲ取揚ケ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處シ之ヲ借受買受讓受ケテ酒類ヲ製造シタル者第十條ニ依リ處分ス其未タ酒類ヲ製造セサル者ハ其罰鑑札ヲ貸渡賣渡讓渡タル者ニ同シ

第十二條 此規則ヲ犯シタル者ニハ本則第三十七條及ヒ第三十八條ヲ適用ス

○明治十九年八月二十四日大藏省令第二十七號

勅令第六十號ニ基キ自家用料酒類製造者心得左ノ通之ヲ定ム

第一項 酒造稅則附則第一條ノ屆書ニハ該期造酒ノ種目及ヒ製造見込石高ヲ記シテ差出ス

第二項 前項届出ノ後造酒種目ノ變換及ヒ製造高ヲ増減スルトキハ其時々管廳ニ届出

第三項 免許鑑札ヲ受ケタル者ハ自家用料酒製造ノ標札ヲ戶外ニ掲出スヘシ

第四項 免許鑑札ヲ失却毀損スルカ或ハ改名代替轉居セシトキハ其旨管廳ニ届出再渡又ハ書換ヲ請フヘシ

第五項 第一項免許屆書式第三項標札書式ハ府縣知事ノ定ムル所ニ據ル

第六項 第二項第三項第四項ヲ犯シタル者ハ一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス

○明治十六年十月二十三日第六十九號達

酒造稅則第四條第二項ニ據リ酒類製造免許ヲ受タル後非常ノ災害ニ罹リ酒類釀造元米諸器械等ヲ減損スルノ類ニシテ實際止ヲ得サルノ事故アルモノヲ除クノ外徒ラニ種々ノ口實ヲ設ケ制限石高ヨリ減却セシモノハ翌期營業ノ免許ヲ與ヘサル儀モ可有之候條詳細其事由ヲ具シ見込相立稟議ス可シ此旨相達候事

○明治十六年十二月十八日第四十二號布告

酢造營業者酢元ニ供スル爲メ酒類ヲ製造スル者ハ酒造稅則中第三條免許稅第四條第二項第三項ヲ除クノ外該稅則ニ準據スヘシ

第一項ニ從ヒ酒類ヲ製造スル者酒類ヲ販賣シ又ハ檢査未濟ノ酒類ヲ以テ酢ヲ製造スルヲ許サス犯ス者ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處シ現在ノ酒類及ヒ酢ヲ沒收ス其已ニ賣捌キタル者ハ代價ヲ追徴ス

第一項ニ從ヒ酒類ヲ製造スル者酢製成ノ上ハ管轄廳ニ届出ツヘシ違フ者ハ壹圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス

(八八) 醬麴營業稅則 (明治十三年九月廿七日)

醬麴營業稅則別冊ノ通相定本年十月一日ヨリ施行候條此旨布告候事

第一章 免許鑑札 營業稅

第一條 凡ソ釀造(釀造酒類ノモト)ヲ製造シテ營業セント欲スル者ハ其旨管廳ニ願出製造場一ヶ所毎ニ免許鑑札ヲ受ケ一期營業稅トシテ左ノ通り納ムヘシ

釀造營業稅 金五十圓

第二條 營業免許ハ其年十月一日ヨリ翌年九月三十日迄ヲ以テ一期トス

第三條 一期中何月ニ新規免許ヲ受ケルモ營業稅直ニ管廳ニ納ムヘシ

第四條 免許ヲ受ケタル者ハ其一期中販賣見込ノ石數毎年十月中管廳ニ届出ヘシ

第五條 販賣ノ節ハ其石數並ニ購求者居所姓名及ヒ年月日等遺漏ナク帳簿ニ記載シ置キ翌年十月中管廳ニ差出シ檢査ヲ受ケヘシ

「釀造及ヒ仕込米諸帳簿倉庫納屋等主任官隨時之ヲ檢査スヘシ」

第六條 免許鑑札賣買讓與スル時ハ雙方連印ノ願書ヲ管廳ニ差出シ書換ヲ請フヘシ

第七條 免許鑑札失却毀損スルカ或ハ代替改名轉居セシ時ハ管廳ニ願出再渡又ハ書換ヲ請フヘシ

第八條 免許ヲ受ケタル者ハ釀造賣捌所ト書シタル標札ニ免許鑑札ノ番號ヲ記載シ戶外ニ掲出スヘシ

第二章 禁令 罰令

明治十五年十二月十六日
第六十二號
以テ通告ヲ加フ

第九條 免許鑑札ハ貸借スルヲ許サス

第十條 免許鑑札ヲ受ケス釀造營業スル者ハ科料トシテ其營業稅二倍ノ金額ヲ徵スヘシ

第十一條 前明條ノ外販賣ノ節石數并ニ購求人ノ居所姓名等ノ帳記ヲ怠ルカ其他本則ニ違犯スル者ハ科料トシテ壹圓ヨリ少ナカラズ五十圓ヨリ多カラサル金額ヲ徵スヘシ

第十二條 釀造營業場ノ中ニ於テハ酒類受賣釀造受賣酢造營業ヲ爲シ又ハ酒類ヲ製造スルヲ許サス

第十三條 第十二條ヲ犯シタル者ハ五圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處シ仍ホ犯罪ニ係ル物品及ヒ器械ヲ沒收ス之ヲ賣捌キタル者ハ其代價ヲ追徵スヘシ

第十四條 此規則ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ不諭罪及ヒ減輕再犯加重數罪俱發ノ例ヲ用ヒス但刑法及第七十五條第一項ノ場合ハ此限ニアラズ

第十五條 釀造營業者ノ家族雇人ニシテ其營業ニ係リ此規則ヲ犯シタル時ハ其營業者ヲ處罰ス

十五年十二月十六日
第六十二號
以テ通告ヲ加フ

(八九)質屋取締條例(明治十七年三月九號布告)

第一條 質屋營業ヲ爲ス者ハ管轄廳(東京府ハ警視廳)ノ免許ヲ受クヘシ

第二條 質屋ハ質物臺帳ヲ備ヘ其紙數ヲ記シ所轄警察署ノ檢印ヲ受クヘシ

第六編 質屋取締條例

第三條 質物臺帳ニハ警察官ニ於テ質物貸金質入主及質入受戻入換ノ年月日ヲ調査スルニ
差支ナキ様記載スヘシ但証人ヲ要スルトキハ質入主及証人ノ實印ヲ押捺セシメ置クヘシ
第四條 身元詳ナラサル者ヨリ質物ヲ取ルコトヲ得ス但身元詳ナル者証人タルトキハ此限
ニアラス

第五條 十五年未滿ノ者白痴風癪者及雇人雇主ノ家ニアル者ヨリ質物ヲ取ルコトヲ得ス但父母後見人
雇主又ハ身元詳ナル者証人タルトキハ此限ニアラス
官應町村學校病院社寺會社ノ印章記載アル物品ハ其質入シ得ヘキコトヲ証明スル証人二
名以上アルニ非サレハ之ヲ質物ニ取ルコトヲ得ス
前二項ニ違背シタル者ハ警察官ノ命ニ依リ元利金ヲ償フコト無ク質物ヲ取戻サルコト
アルヘシ

第六條 盜罪詐欺取財ノ罪又ハ刑法第三百九十九條第四百一條ノ處斷ヲ受ケタル者ヨリ物
品ヲ質ニ取リ又ハ寄藏シタルトキハ直ニ所轄警察署ニ届出ヘシ
第七條 贖物ノ疑アル物品又ハ身柄不相應ト認メタル物品ヲ持來ル者アルトキハ直ニ所轄
警察署又ハ巡行ノ警察官巡查ニ密告スヘシ

第八條 流質物ヲ賣拂ハントスルトキハ五日以前ニ其物品目錄ヲ所轄警察署ニ差出スヘ
シ

第九條 流質物ヲ賣拂ヒタルトキハ警察官ニ於テ其物品代價及買主ヲ調査スルニ差支ナキ
様流質物賣拂帳ニ記載スヘシ

第十條 贖物ノ品觸アルトキハ到達シタル年月日時ヲ其品觸寫書ニ附記スヘシ
第十一條 品觸到達以後一年内ニ類似ノ物品ヲ質ニ取リ又ハ寄藏シタルトキ若シハ其以前
ノ質物及寄藏品中ニ類似ノ物品ヲ發見シタルトキハ直ニ所轄警察署ニ届出ヘシ

第十二條 質物臺帳流質物賣拂帳及品觸寫書十年間保存スヘシ若シ亡失シタルトキハ直ニ所轄
警察署ニ届出ヘシ

第十三條 警察官ハ何時タリトモ質屋ノ店舗ニ臨ミ質物及帳簿ノ検査ヲ爲シ時宜ニ依リ其
質物ヲ差押ヘ又ハ時々帳簿ヲ差出サシメ之ヲ検査スルコトアルヘシ質屋ハ之ヲ拒ムコトヲ得
ス

第十四條 此條例ニ違背シ又ハ詐偽ノ届出ヲ爲シタル者ハ二圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處
ス

第十五條 此條例ヲ一年内ニ再犯シタル者ハ行政ノ處分ヲ以テ其營業ヲ禁止シ又ハ停止ス
ルコトヲ得

第十六條 此條例ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ數罪俱發ノ例ヲ用ヒス

第十七條 營業上ニ付テハ家屬又ハ雇人ノ所爲ト雖モ營業者其責ニ任スヘシ

第十八條 此條例ヲ施行スルノ方法細則ハ警視總監知事東京府ヲ除ク縣令ニ於テ便宜取設ケ内務卿ニ届出ヘシ

(九〇)証券印稅規則(明治十七年五月一)

明治七年(七月)第八十一號布告証券印稅規則別冊ノ通改正シ明治十七年七月一日ヨリ施行ス

但明治八年(七月)第二百二十號布告ハ同日ヨリ廢止ス
右奉 勅旨布告候事

第一條 凡ソ財産ノ授受及ヒ契約ノ證明ニ用フル証券帳簿ハ此規則ニ循ヒ印紙ヲ貼用スヘシ

第二條 証券帳簿ヲ分テ二類ト爲シ其稅率ハ左ノ如シ

- 第一類
 - 一 左ニ掲クル所ノ証券帳簿ハ金高ノ有無多寡ニ拘ハラズ下ニ定ムル所ノ印紙ヲ貼用スヘシ
 - 一 但當坐預リ金引出小切手ハ大藏省ニ稅印ノ押捺ヲ請フコトヲ得
 - 一 一當坐預リ金引出小切手 印稅 五 厘
 - 一 委任狀 同 五 厘

- 一 金高記載ナキ約定證文 同 錢
- 一 遺物證文 同 錢
- 一 跡式讓證文 同 錢
- 一 讓與證文 同 錢
- 一 期限ヲ定メサル預リ金證文 同 錢
- 一 耕地小作證文 同 錢
- 一 雇人請合狀 同 錢
- 一 金高記載ナキ諸物品預リ證文 同 錢
- 一 金高記載ナキ諸物品借用證文 同 錢
- 一 地所預リ證文 同 錢
- 一 家屋預リ證文 同 錢
- 一 諸物品切手 同 錢
- 一 借地證文 同 錢
- 一 借家證文 同 錢
- 一 賣買仕切書 同 錢
- 一 保險證文 同 錢
- 一 諸會社株券 同 錢
- 一 送金手形 同 錢

- 一 金 錢 通帳 一年以内一冊ニ付
- 一 諸物品 通帳
- 一 諸物品 判取帳
- 一 結社約定書

同 一 錢
同 二十 錢

但結社約定書ニ金圓授受貸借ニ係ル條項アリテ之カ効力ヲ確定スル證書帳簿ハ金高記載ナシト雖モ第二類金高記載アル諸般ノ契約證書ニ準シ印紙ヲ貼用スヘシ

左ニ掲クル所ノ證書ハ金高五圓以上ノモノニ限り下ニ定ムル所ノ印紙ヲ貼用スヘシ

一 營業ニ關スル送狀 印稅 一 錢

一 營業ニ關スル請取書 同 一 錢

右諸證書ヲ通帳ト爲ストキハ都テ一年以内一冊ニ付一錢ノ印紙ヲ貼用スヘシ

第二類

- 左ニ掲クル所ノ證書ハ金高ノ多寡ニ隨ヒ下ニ定ム所ノ割合ヲ以テ印紙ヲ貼用スヘシ但爲替手形約束手形ハ手形用紙ヲ用フヘシ
- 一 金錢借用證文 印稅 壹 錢
- 一 地所 賣買證文 同 貳 錢
- 一 家屋 賣買證文 同 四 錢
- 一 金高記載 諸物品預リ證文 同 六 錢
- 一 金高記載 諸物品借用證文 同 八 錢

- 一 諸物品賣買證文 印稅 壹 錢
- 一 金錢定期預リ證文 同 貳 錢
- 一 金高記載アル諸般ノ契約證書 同 四 錢
- 一 金高壹圓以上貳拾圓未滿 同 六 錢
- 一 金高貳拾圓以上五拾圓未滿 同 八 錢
- 一 金高百圓以上百五拾圓未滿 同 拾 壹 錢
- 一 金高百貳拾圓以上三百圓未滿 同 拾 四 錢
- 一 金高三百圓以上四百圓未滿 同 貳 拾 六 錢
- 一 金高四百圓以上六百圓未滿 同 貳 拾 八 錢
- 一 金高六百圓以上八百圓未滿 同 三 拾 貳 錢
- 一 金高八百圓以上千圓未滿 同 三 拾 四 錢
- 一 金高千圓以上千四百圓未滿 同 四 拾 四 錢
- 一 金高千四百圓以上千七百圓未滿 同 五 拾 錢
- 一 金高千七百圓以上貳千圓未滿 同 五 拾 錢

金高貳千圓以上貳千五百圓未滿
 同 六拾錢
 金高貳千五百圓以上三千圓未滿
 同 七拾錢
 金高三千圓以上三千五百圓未滿
 同 八拾錢
 金高三千五百圓以上四千圓未滿
 同 九拾錢
 金高四千圓以上
 同 壹圓

右諸證書ヲ通帳ト爲スルハ其附込見積金高ニ隨ヒ下ニ定ムル所ノ印紙ヲ貼用スヘシ
 印稅 四錢

金高百圓未滿

一金錢當坐預リ證文

一質物預リ書

金高壹圓以上貳拾圓未滿

金高貳拾圓以上

右諸證書ヲ通帳ト爲スルハ其附込見積金高ニ隨ヒ下ニ定ムル所ノ印紙ヲ貼用スヘシ

金高百圓未滿

金高百圓以上

一爲替手形

一荷爲替手形

印稅 壹錢
 同 貳錢
 印稅 貳錢
 同 四錢

一荷爲替手形
 一約束手形

金高五拾圓未滿
 金高五拾圓以上百圓未滿
 金高百圓以上貳百圓未滿
 金高貳百圓以上五百圓未滿
 金高五百圓以上千圓未滿
 金高千圓以上貳千圓未滿
 金高貳千圓以上

印稅 壹錢
 同 貳錢
 同 四錢
 同 八錢
 同 拾五錢
 同 貳拾五錢
 同 五拾錢

第三條 前條ニ掲クル所ノ證書帳簿ト効用ヲ同フスルモノハ其名稱ニ拘ハラヌ稅率ニ照シ相當ノ印紙ヲ貼用スヘシ

第四條 印紙ヲ貼用スヘキ證書帳簿ニシテ第五條ノ手續ニ循ヒ印紙ヲ貼用セサルモノハ民事裁判上之ヲ受理セス但處罰ヲ受クル後印紙ヲ貼用シタルモノハ此限ニ在ラス

第五條 印紙ハ證書ノ差出人又ハ帳簿主ニ於テ證書ハ授受ノ前帳簿ハ使用ノ前ニ貼用シ證書帳簿記名ノ下ニ押捺スル印紙ヲ以テ證書帳簿ノ紙面ト印紙ノ彩紋トニカケテ消印スヘシ

第六條 印紙及手形用紙ノ種類定價ハ布達ヲ以テ之ヲ定ム

第七條 印紙及ヒ手形用紙ハ官ノ許可ヲ得タル賣捌所ニ非サレハ之ヲ賣捌クコトヲ得ス

第八條 印紙ヲ貼用スヘキ帳簿仕切書送り狀主任官之ヲ檢査スルコトアルヘシ

第九條 左ニ掲クル所ノ證書帳簿ハ印紙ヲ貼用スルコトヲ要セス

一官廳ヨリ差出ス證書帳簿

一官吏準官吏若シハ布告布達又ハ達ヲ以テ定メタル議員若シハ公立學校病院ニ從事スル

モノ各其職務ニ依テ用フル證書

一國庫金取扱所又ハ爲換方ヨリ官廳ニ差出ス預リ金ニ對スル抵當證書

一國庫金取扱所又ハ爲換方ヨリ官廳ニ對シタル諸上納金ノ預リ證書帳簿

一金員記載アル官吏ヨリノ命令書ニ對シ國庫金取扱所又ハ爲換方ヨリ差出ス證書

一諸上納金ニ付國庫金取扱所又ハ爲換方ヨリ納人ニ差出ス請取證書

一罹災救助金獻金寄附金ニ關シ人民ヨリ官廳ニ差出ス證書

第十條 第二類ノ帳簿ハ初丁ニ附込見積金高及ヒ使用期限紙數ヲ記載スヘシ但物品ノ授受

ニ關スルモノハ其代價ヲ記載スヘシ

第十一條 證書帳簿ニ稅率ノ異ナルモノヲ雜記スルキハ各相當ノ印紙ヲ貼用スヘシ

第十二條 印紙貼用濟第二類ノ帳簿見積金高又ハ使用期限ノ滿チタルキハ其旨該帳簿ニ記

載シ置主任官檢査ノ節ニ檢印ヲ受クヘシ

第十三條 前條ノ帳簿餘白アリテ尙之ヲ使用セントスルキハ第十條ノ手續ヲ以テ更ニ相當

ノ印紙ヲ貼用スヘシ

第十四條 第二類ノ帳簿見積高未ダ滿チサルカ又ハ使用期限未ダ盡キサルニ紙數盡キタル

キハ更ニ紙數ヲ增加スルコトヲ得此場合ニ於テハ其帳簿初丁見積金高又ハ期限ノ側ニ其事

由及ヒ増加シタル紙數ヲ記載スヘシ

第十五條 證書帳簿ニ外國貨幣ヲ以テ員數ヲ記載スルキハ內國ノ貨幣ニ改算シタル金高ヲ

附記シ相當ノ印紙ヲ貼用スヘシ

第十六條 取換セ證書ハ双方トモ相當ノ印紙ヲ貼用スヘシ

第十七條 證書ニ副證書ヲ附シ又ハ裏書等ヲ爲シ本證書ト効用ヲ異ニスルモノ若シハ金高

ニ増減ヲ生スルモノハ其副書又ハ其裏書ニ就キ更ニ相當ノ印紙ヲ貼用スヘシ

第十八條 此規則ヲ犯シ脱稅ニ係ルモノハ處罰ヲ受クル後證書帳簿ノ受取人ニ於テ相當ノ

印紙ヲ貼用スルコトヲ得

第十九條 印紙ヲ貼用スヘキ證書帳簿ニ之ヲ貼用セス若クハ貼用不足スル者及ヒ手形用紙

ヲ用キス若クハ不足稅ノ手形用紙ヲ用キタルモノハ脱稅高二十倍ノ料料又ハ罰金ニ處ス

其證書帳簿ヲ受取タルモノ亦同シ

第二十條 第十八條ノ場合ヲ除ク外第五條ノ手續ニ據テ消印ヲ爲サス又ハ他ノ印ヲ以テ消

印シタルモノハ印税高十倍ノ科料又ハ罰金ニ處ス其證書帳簿ヲ受取タルモノ亦同シ
 第廿一條 此規則ヲ犯シタル證書帳簿ニ請人証人トシテ加印シタル者ハ各正犯ニ係ル科料
 罰金ノ半額ニ相當スル科料又ハ罰金ニ處ス
 第廿二條 第八條ノ證書帳簿ノ檢査ヲ拒ミタルモノハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處
 ス

第廿三條 第十條及ヒ第十三條ヲ犯シタル者ハ二圓以上拾圓以下ノ罰金ニ處ス
 第廿四條 第十二條及ヒ第十四條ヲ犯シタルモノハ壹圓以上壹圓九十五錢以下ノ科料ニ處
 ス

第廿五條 第七條ヲ犯シタルモノハ所持ノ印紙及ヒ賣得金ヲ沒收シ五圓以上五十圓以下ノ
 罰金ニ處ス
 第廿六條 前數條ノ罪ヲ犯シタルモノハ刑法ノ不論罪及ヒ減輕再犯加重數罪俱發ノ例ヲ
 用ヒス

○明治十七年五月十日大藏省第五十六號告示
 本年五月第十一號布告證券印稅規則改正相成候ニ付證書帳簿へ印紙貼用ノ様式左之通相定
 候條此旨告示候事
 金高記載ノ證書印紙貼用様式

證書差出人ノ印

印紙 印紙	證
一金何百何拾圓	
右者、、、、、、、、、、、、、、、、、	
年月日	何ノ誰印
何ノ誰殿	

證書差出人ノ印

印紙	証
一金何圓何拾錢	
一金何拾圓	
合金何拾圓何拾錢	
右者、、、、、、、、、、、、、、、、、	
年月日	何ノ誰印
何ノ誰殿	

金高記載ナキ證書印紙貼用様式

第一類帳簿印紙貼用様式

證書差出人ノ印

何証文ノ事

印紙

今般何々、

年月日

何ノ誰印

第二類帳簿紙貼用様式

帳簿主ノ印

印紙

印紙

此帳簿附込見積金何千圓附込期

限何年何月ヨリ何年

何年何月マテ何年

紙數何百何拾何葉

年月日

何ノ誰印

第一類第二類帳簿附込印紙貼用様式

帳簿主ノ印

印紙

印紙

此帳簿附込期限本年限

印紙

印紙

此帳簿附込見積金何千圓附込期

限何年何月ヨリ何年

何年何月マテ何年

紙數何百何拾何葉

年月日

何ノ誰印

(九一)商標條例(明治十七年六月八日第十九號布告)

- 第一條 商標ハ農商務省ノ商標簿ニ登錄ヲ經タルキハ其所有主ニ於テ登錄ノ日ヨリ十五年間之ヲ專用スルノ權ヲ有ス可シ
- 第二條 商標ヲ專用セント欲スル者ハ願書ニ見本并明細書ヲ添ヘ登錄ヲ願出ツヘシ其明細書ニハ商標ノ説明、方法并其商品ノ名目種類ヲ詳記スヘシ其登錄ヲ經タル者ハ登錄証ヲ下付スヘシ
- 第三條 商標ノ登錄ヲ願出ツル者アルキハ願書ノ日付ヨリ二ヶ月間之ヲ留置其間ニ之ト抵觸スヘキ願書到達セサレハ之ヲ登錄ス可シ若シ二人以上同一又ハ相紛ハシキ商標ヲ同一種類ノ商品ニ專用センカ爲メ登錄ヲ願出ツル者アリ抵觸スルキハ其願書日附ノ後ナル者ヲ却下ス其日附同シキ者ハ共ニ之ヲ却下ス可シ
- 第四條 登錄商標ハ農商務卿ニ於テ衆庶ノ觀覽ニ供スル爲メ便宜ノ方法ヲ定ムヘシ
- 第五條 左ノ商標ハ登錄ヲ願出ツルヲ得ス
 - 一 己ニ登錄セル商標ト同一又ハ相紛ヲハシキ商標ニシテ同一種類ノ商品ニ用フル者
 - 二 地名人名家號會社名ノミヲ以テスル者又ハ商品普通ノ名稱或ハ内外國ノ旗章ノミヲ以テスル者

- 三 同業者普通ニ用ヒ又ハ商業上慣用セル目印ヲ以テスル者
- 四 新ニ使用スル商標ニシテ本條例頒布以前ヨリ現ニ使用者アル商標ト同一又ハ相紛ヲハシキ商標ヲ同一種類ノ商品ニ用フル者
- 第六條 登錄商標主其專用年限中轉籍轉居又ハ氏名ヲ變換シタルトキ及廢業シ又ハ休業一ケ年ニ及ヒタルキハ三ヶ月以内ニ之ヲ届出ツヘシ
- 第七條 登錄商標專用年限中其相續者ニ於テ其業ヲ相續シタルキハ三ヶ月以内ニ之ヲ届出ツヘシ
- 第八條 登錄商標主其商標ノ專用權ヲ他人ニ讓與又ハ分與セントスルキハ更ニ其登錄ヲ願出ツヘシ但專用年限ハ最初登錄ノ日ヨリ通算スヘシ
- 第九條 登錄商標ヲ他ノ種類ノ商品ニ兼用若クハ轉用シ又ハ之ヲ改正セントスルキハ更ニ其登錄ヲ願出ツヘシ
- 前項ノ場合ニ於テハ第三條ニ依テ處分スヘシ
- 第十條 登錄商標專用滿期ノ後之ヲ續用セントスル者ハ滿期三ヶ月前ニ更ニ其登錄ヲ願出ツ可シ
- 第十一條 登錄証ヲ毀損遺失シタルキハ其再渡ヲ願出ツヘシ
- 第十二條 商標ヲ登錄セシ後第五條ニ觸レ又ハ登錄願書及見本明細書ニ相違ノ事實アルコト

トテ發見シタルキハ其登録無効ニ販シ登録書ヲ返納セシムヘシ
第十三條 登録商標主其業ヲ廢シタルキハ廢業ノ日ヨリ其專用權ヲ失ス休業三ヶ年ニ及フ者亦同シ

第十四條 「商標」ノ登録ニ係ル願書ニハ左ノ區別ニ從ヒ證券印紙ヲ貼用ス可シ

一 商標ノ登録登錄商標ノ兼用轉用又ハ改正及登錄證ノ再渡 一 圓

二 登錄商標ノ滿期續用 五 圓

一 商標ノ登録 金 十 圓

二 登録商標兼用轉用又ハ改正ノ登録 金 五 圓

三 登録商標ノ讓與又ハ分與ノ登録 金 五 圓

第十五條 登録商標主其專用權ヲ侵サレタルキハ之ヲ告訴シ并要償ノ訴ヲ爲スヲ得

第十六條 登録商標ヲ偽造シテ使用シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四拾圓以下ノ罰金ヲ附加ス其盗用シタル者ハ一等ヲ減ス

第十七條 登録商標ニ相紛ラハシキ商標ヲ造リテ使用シタル者ハ十五日以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ貳圓以上貳拾圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第十八條 第十六條第十七條ノ違犯ニ係ル商標ヲ附シタル商品ヲ情ヲ知テ販賣シタル者ハ

四圓以上四拾圓以下ノ罰金ニ處ス

第十九條 第十六條第十七條第十八條ノ場合ニ於テハ仍ホ違犯ノ商標ヲ沒收ス其商品ト分離スヘカラサルモノハ商品ヲ破毀セシム

第二十條 詐偽ノ所爲ヲ以テ商標ノ登録ヲ得及商標ノ登録ヲ詐稱シタル者ハ十五日以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ貳圓以上貳拾圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二十一條 第六條第七條ノ届出ヲ其期限内ニ爲サ、ル者ハ壹圓以上壹圓九拾五錢以下ノ科料ニ處ス

第二十二條 此ノ條例ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ數罪俱發ノ例ヲ用ヒス

第二十三條 第十六條ヨリ第十八條ニ至ルノ罪ハ登録商標主ノ告訴ヲ待テ其罪ヲ論ス

第二十四條 登録商標主告訴ヲ爲シタルキハ裁判官ニ於テ仮ニ其告訴ニ係ル商標ヲ附シタル商品ノ發賣ヲ停止スルヲ得

附則

本條例頒布以前使用スル商標ヲ專用セント欲スル者ハ本條例施行ノ日ヨリ六ヶ月間ニ於テ其登録ヲ願出ツヘシ其願書ハ本條例施行ノ日ヨリ八月間之ヲ留置其間ニ之ト牴觸ス可キ願書到達セサレハ之ヲ登録ス可シ

若シ二人以上同一又ハ相紛ラハシキ商標ヲ同一種類ノ商品ニ專用センカ爲メ登録ヲ願出ツ

ル者アリ抵觸スルキハ其願書日ノ前後ニ拘ハラヌ農商務卿ニ於テ其商標ノ使用最久シキト
認定スルモノヲ登録シテ其他ヲ却下ス可シ
本條例第三條ニ依リ處分ス可キ願書ト雖モ本條例施行ノ日ヨリ八ヶ月間之ヲ留置附則第一
項ニ依リ願出ルモノニ抵觸スルキハ其願書日附ノ前後ニ拘ハラヌ之ヲ却下ス可シ
前二項ノ場合ニ於テ願書ヲ却下スルキハ其手数料ヲ返ヘス
本條例頒布以前使用スル商標ニシテ現ニ其同業者ニ専用ノ効アルモノハ商業上慣用セル目
印ト雖モ其登録ヲ願出ルヲ得

(九) 商標登録願手續 (明治十六年六月七)

- 第一條 商標ニ關スル願書届書ハ都テ地方廳ヲ經テ農商務省ニ差出ス可シ
- 第二條 「商標ノ登録ヲ願出ツルキハ商標見本五枚ヲ添ヘ願書通明細書二通ヲ差出ス可シ
- 第三條 一箇ノ商標ヲ二種以上ノ商品ニ用ヒンカ爲メ又ハ三箇以上ノ商標ヲ一種ノ商品ニ
用ヒンカ爲メ登録ヲ願出ツルキハ其商品一種又ハ商標一箇毎ニ各別ノ願書及明細書ヲ差
出ス可シ
- 第四條 條例第七條ニ據リ相續ヲ届出ツルキ其死亡後相續ニ係ル者ハ相續者并身元詳ナル
証人二名以上連署シ其生存中ノ相續ニ係ル者ハ登録商標主相續者連署ス可シ

明治十八年一月
四號布告
補テ以テ增

明治廿年
五月五日
農商務省
令第一號
布告ヲ以テ
テ改正同
行ヨリ施行

第五條 「條例第八條ニ據リ商標ノ讓與分與ヲ願出ツルキハ讓主ヨリ約定書本書ヲ添ヘ願書
一通ヲ差出ス可シ
其登録ヲ經タルトキハ約定書本書ニ登録済ノ証印ヲ捺シ之ヲ下付ス可シ」

第六條 條例第九條ニ據リ登録商標ノ轉用兼用及改正ヲ願出ツルキハ第二條ニ準據ス可シ
「條例第十條第十一條ニ據リ商標ノ續用及登録証ノ再渡ヲ願出ツルトキハ願書一通ヲ差
出ス可シ」

第七條 「商標ノ登録ヲ願出ル者及登録商標ノ兼用轉用改正讓與又ハ分與ヲ願出ル者ハ其登
録ヲ届ヘキ旨ノ通知ヲ得タル日ヨリ三十日以内ニ其登録料ヲ納ム可シ此期限内ニ登録
料ヲ納メサルトキハ其願出無効タル可シ但己ヲ得サル事由アリテ延期シタルモノト認ム
ルトキハ此限ニアラス」

第八條 登録願書ヲ却下スルキハ其理由ヲ指示スヘシ

第九條 「商標登録願書ノ訂正ニ關シ達ヲ受ケタルトキハ其日ヨリ十五日以内ニ明細書ノ
訂正ニ關シ達ヲ受ケタルトキハ其日附ヨリ三箇月以内ニ訂正書又ハ答辯書ヲ出ス可シ此
期限内ニ之ヲ出サ、ルトキハ其出願無効タル可シ但己ヲ得サル事由アリテ延期シタルモ
ノト認ムルトキハ此限ニアラス」

第十條 「商標登録願人ハ專賣特許局ノ達ニ隨ヒ其商標ノ木版又ハ鉛版ヲ差出ス可シ其達

追加

改正

同前

同前

ノ日附ヨリ六箇月以内ニ之ヲ差出サ、ルトキハ其出願無効ナル可シ但己ヲ得サル事由アリテ延期シタルモノト認ムルトキハ此限ニアラス

第十一條 登録商標ヲ使用スル商品ノ種類ヲ定ムルコト左ノ如シ但願人ニ於テ其種類ヲ判知シ難モノハ農商務省ニ於テ之ヲ判定スヘシ

商品ノ種類

第一種

化學品及藥劑

酸類 鹽類 「アルカリ」 漂白粉 護膜 樹脂膠 磷 石礆 酒精 「グリセリン」 「キナエン」 「モルヒチ」 丁幾劑 舍利別 煎劑 丸藥 膏藥 藥油 麝香 丁子 等

第二種

染料及顏料

藍玉 藍靛 紫根 紅朱 丹 綠青 燒青 洋靛 白粉 胡粉 藤黃等

第三種

塗料

漆 鐵漆 「ペンキ」 澁 靴墨等

第四種

香料及燃料

香油 髮膏 香袋 香水 炷香 線香 燻香等

第五種

金屬及其半加工品

銑鉄 鍛鉄 鋼鉄 條鉄 鉄葉 鉄板 銅 銅板 銅鉄線 鉛 鉛板 亞鉛 亞鉛板 錫 合金等

第六種

金屬ノ製品

鑄物 打物 彫鏤品及編物等

第七種

利器及尖刃器

鎌 鋸 鑿 錐 鑿 針 釘 剪刀 小刀 剃刀 庖丁 鷹嘴等

第八種

貴金屬及其製品(アルミニウム金ニツケル銀ノ製品モ此中ニ屬ス)

黄金 銀 四分一 紫銅其他貴金屬ノ合金鍍品及彫鏤品等

第九種

珠玉及其彫鏤品

第十種

珊瑚珠 眞珠 瑪瑙 水晶 黃玉 碧玉等 及其模造品

礦物類(但石炭ハ第五十一種ニ屬ス)

第十一種

石材及其製品並彫鏤品

石板石 大理石 砥石 石器等及其模造品

第十二種

漆喰類

漆喰 「セメント」 石膏等

第十三種

陶磁器類

諸種ノ陶磁器 土器 埴埴 瓦 煉化石等

第十四種

七寶燒

第十五種

玻璃及其製品

玻璃壺 玻璃管 彩色玻璃等

第十六種

機械類

紡績機 裁縫機 製糖機 印刷機械其他諸製造機械 蒸氣ノ機關及罐等

第十七種

農工器具

鋤 鍬 唐箕 熊手 釘拔 鉄鎚 繩墨等

第十八種

學術上ノ器械類

理化學 醫術及測量等ノ器械

第十九種

度量權衡

第二十種

運送用ノ車類

- 第二十一種 荷車 馬車 人力車 自轉車等
- 樂器
- 第二十二種 琴 三味線 胡弓 笛等
- 時計及其付屬品
- 第二十三種 銃砲 彈丸 火藥 烟火類
- 第二十四種 蠶種紙 繭
- 第二十五種 真綿及木棉綿
- 第二十六種 生絲 絹絲及天蠶絲 (琴絲 金絲 銀絲等) 此中ニ屬ス
- 第二十七種 綿絲

- 第二十八種 毛絲
- 第二十九種 麻絲
- 第三十種 絹絲物
- 第三十一種 木棉織物
- 第三十二種 毛織物
- 第三十三種 麻織物
- 第三十四種 絹綿麻毛外ノ織物及各種ノ交織物
- 第三十五種 絲類ノ編物及組物

「レース」打紐 網等
第三十六種

被服

諸種ノ衣服 織物製帽子 手套 足袋 織物製雨衣 袴 目利安等
第三十七種

釀造物及飲料

諸種ノ酒 酢、醬油 蜜柑水 曹達水等
第三十八種

砂糖

諸種ノ砂糖 糖蜜 蜂蜜等
第三十九種

菓子及麵包類

菓子及麵包類

干菓子 蒸菓子 掛ヶ物 西洋菓子 飴 砂糖漬等
第四十種

茶及咖啡類

第四十一種

煙草類

第四十二種

穀類菜種子及菓物類

五穀 蔬菜 草 菓實 種子 根球等
第四十三種

挽粉澱粉及其製品

諸種ノ挽粉 澱粉 麪類 湯波 蒟蒻 凍豆腐 凍蒟蒻等
第四十四種

味噌 膏物及漬物類

第四十五種

肉類海草ノ貯藏食品

鯉節 鰯 乾鮑 海苔 昆布 佃煮 罐詰 雲丹諸種ノ鹹製品等
第四十六種

牛乳製品

凝乳 乳油 乳餅 乳粉等
第四十七種

煙具及袋物

諸種ノ煙管 煙袋 煙管筒 懷中物等

第四十八種

紙及其製品

諸種ノ紙 色紙 短冊 擬革紙 油紙 澁紙 書簡筒 張文匣 一開張 元結等

第四十九種

筆墨類

筆 墨 朱墨 印肉 墨汁 石筆 鉛筆 洋筆等

第五十種

皮革及其製品

馬具 革包 文匣 革帶 靴等

第五十一種

燃料

諸種ノ炭 附木 摺附木 燈心等

第五十二種

油蠟類

諸種ノ油 蠟 蠟燭 脂肪等

第五十三種

肥料

干鰯 餅粕 油粕 骨粉等

第五十四種

木竹材

第五十五種

木竹籐製品及其漆塗蒔繪品類

指物 挽物 曲物 桶類 編物 組物等

第五十六

角甲牙類ノ製品

第五十七種

藁及草ノ製品

疊表 藁 編笠 繩 麥藁細工等

第五十八種

傘杖及履物

諸種ノ傘杖下駄草履鼻緒等

第五十九種

扇子及團扇

第六十種

提燈及「ランプ」類

第六十一種

齒磨及洗粉

第六十二種

刷子類

第六十三種

玩具類

第六十四種

花簪 鞠 碁 將碁 人形 獨樂 楊弓 押繪 造花 骨牌等

第六十五種

錦繪及寫真類
書籍新聞紙雜誌類

通知

「第十二條 商標ニ關スル諸願書式及明細書文例等ハ別ニ告示ス可シ」

(九三)醬油稅則(明治十八年五月九日第十號布告)

但東京府管轄伊豆七島小笠原島函館縣沖繩縣札幌縣根室縣ハ當分之ヲ施行セス

右奉 勅旨布告候事

第一條 凡ソ醬油溜リヲ併稱スヲ製造シテ營業セント欲スル者ハ其旨管廳ニ願出製造場一箇所毎

ニ免許鑑札ヲ受クヘシ

第二條 免許ヲ受ケタル者ハ左ノ通營業稅及ヒ造石稅ヲ納ムヘシ

營業稅

製造場一箇所ニ付

金五圓

造石稅

製造高壹石ニ付

金一圓

第三條 免許鑑札ヲ失却毀損スルカ或ハ代替改名轉居セントキハ管廳ニ届出其再渡又ハ書換ヲ請フヘシ

第四條 醬油製造人廢業スルトキハ管廳ニ届出免許鑑札ヲ還納スヘシ

第五條 免許鑑札ハ貸借買賣及ヒ讓受讓渡ヲ爲スコトヲ得ス

第六條 營業稅ハ一箇年ヲ二期ニ分テ前半年分ハ其年一月三十一日限後半年分ハ同ク七月三十一日限之ヲ納ムヘシ但新ニ開業スル者ハ免許鑑札ヲ受クルトキ其半年分ノ營業稅ヲ

納ムヘシ

第七條 造石税ハ左ノ期限ニ從ヒ之ヲ納ムヘシ但廢業スル者ハ其節之ヲ納ムヘシ

第一期 五月三十一日限

第二期 一月一日ヨリ四月中檢査濟石數ニ係ル稅額
九月三十日限

第三期 五月一日ヨリ八月中檢査濟石數ニ係ル稅額
翌年一月三十一日限

九月一日ヨリ十二月中檢査濟石數ニ係ル稅額

第八條 醬油ハ製成ノ後五日以内ニ管廳ニ届出檢査ヲ受クヘシ

第九條 廢業ノ際未製成ノ醬油ヲ所持スル者ハ其節管廳ニ届出檢査ヲ受ケ其石數ニ就キ納稅スヘシ但之ヲ同業者ニ賣渡シ又ハ二箇所以上ニ於テ製造スル者其一箇所以上ヲ廢シ尙ホ存スル所ノ製造場ニ之ヲ移ス者ハ其旨届出製成ノ上其製成者ニ於テ第八條ニ從ヒ檢査ヲ受クヘシ

第十條 檢査未濟ノ醬油ト檢査既濟ノ醬油トヲ混和スル者ハ其混和ノ日ヨリ五日以内ニ其旨管廳ニ届出更ニ總石數ヲ以テ檢査ヲ受ケ納稅スヘシ

第十一條 檢査既濟ノ醬油其造石稅納期內ニ非常ノ損害ニ罹リテ廢棄ニ屬シ若クハ腐敗シタルトキハ直ニ管廳ニ申出檢査ヲ受ケ該造石稅ノ免除ヲ請フトヲ得

第十三條 外國ニ輸出スル醬油ハ輸出ノ節稅關ニ於テ檢査ヲ受ケ置輸入港稅關ノ陸揚免狀若クハ其他ノ證憑ト爲ルヘキ書類ニ在留領事ノ檢印ヲ受ケ之ヲ當初輸出ノ稅關ニ差出シ其造石稅ニ相當スル金額ノ下戻ヲ請フトヲ得但造石稅ノ下戻ヲ受ケタル醬油ヲ再輸入シタルトキハ更ニ其金額ヲ納ムヘシ

第十三條 醬油製造人ハ左ノ帳簿ヲ調製スヘシ

醬油製造原品買入帳

醬油仕込帳

醬油賣上帳

第十四條 醬油製造用ノ容器ハ使用以前管廳ニ届出檢査ヲ受クヘシ

第十五條 醬油搾リ器械ニハ主任官ノ封緘ヲ受ケ置使用スルトキハ其旨申出開封ヲ請フト但過誤等ニテ封緘ヲ毀損シタルトキハ直ニ管廳ニ届出更ニ封緘ヲ請フヘシ

第十六條 醬油製造人ハ毎年一月三十一日迄ニ其年製造見込ノ石數並ニ其製造方法ヲ管廳ニ届出ヘシ新ニ開業セシ者ハ免許ヲ受ケタル翌日ヨリ十五日以内ニ之ヲ届出ヘシ但見込石數ノ増減並ニ製造方法ノ變換ハ其時々届出ヘシ

第十七條 醬油製造ニ屬スル倉庫納屋並ニ諸器械ハ營業免許ヲ受ケタルトキ直ニ之ヲ管廳

ニ届出ヘン但増減ハ其時々届出ヘン
第十八條 醬油製造人ハ他ノ依托ヲ受ケテ醬油ヲ代造シ又ハ同業者ニ非サル者ニ醬油ヲ製造スル爲メ製造場ヲ貸スコトヲ許サス

第十九條 醬油製造人ハ自家用料ニ充ル醬油ト雖モ此規則ニ從ヒ檢査ヲ受ケ其造石税ヲ納ムヘシ

第二十條 醬油製造人卸賣又ハ小賣ヲ以テ營業トスル者ハ自家用料ノ醬油ヲ製造スルコトヲ得ス

第二十一條 醬油營業人ニ非スシテ自家用料ノ醬油ヲ製造スル者ハ同居ノ家族雇人一人ニ付一箇年一斗五升ノ割合ヲ超ユルコトヲ得ス

第二十二條 醬油製造人ノ醬油仕込高並ニ仕込ニ屬スル豆麥其他ノ原品及ヒ營業ニ關スル諸帳簿ハ主任官隨時之ヲ檢査スルコトアルヘシ

第二十三條 主任官ニ於テ此規則ニ關シ犯罪アリト認知シ又ハ思料スルトキハ其場所ニ立入り證憑取調ノ處分ヲ爲スコトヲ得但其主任タルノ證票ヲ携帯スヘシ

第二十四條 第一條ニ違ヒ免許鑑札受ケズシテ醬油ヲ製造シタル者ハ五圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處シ仍ホ現在ノ醬油及ヒ製造器械ヲ沒收ス既ニ賣捌キタル者ハ其代金ヲ追徵ス

第二十五條 醬油ニ違ヒ卸賣人小賣人ニ於テ醬油ヲ製造シタル者亦本條ニ據リ處分ス

第二十六條 醬油ヲ隱藏シタル者ハ製成ト未製成トニ拘ハラズ其石數ニ相當スル造石税三倍ノ罰金ニ處シ仍ホ其犯罪ニ係ル醬油及ヒ容器ヲ沒收ス既ニ賣捌キタル者ハ其代金ヲ追徵ス但檢査既濟ノ醬油ト檢査未濟ノ醬油トヲ混和ノ隱藏シタル者ハ其總石數ニ就テ論ス

第二十七條 第八條第九條第十條ノ檢査ヲ受ケスシテ醬油ヲ賣捌貸渡讓渡又ハ自用シタル者ハ其造石税ノ三倍ニ相當スル罰金ニ處シ仍ホ其代金ヲ追徵ス

第二十八條 第十八條ニ違ヒ他ノ依托ヲ受ケテ醬油ヲ代造シ又ハ製造場ヲ貸シタル者又ハ其醬油及ヒ容器ヲ沒收ス

第二十九條 第五條ニ違ヒ免許鑑札ヲ賣買貸借及ヒ讓受讓渡シタル者第十三條ニ違ヒ帳簿ヲ調製セス若シハ帳簿ノ登記ヲ詐リタル者第十四條ニ違ヒ檢査ヲ受ケスシテ容器ヲ使用シタル者又ハ第十五條ニ違ヒ開封ヲ爲シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第三十條 第三條第四條第八條第九條第十條第十五條但書第十六條又ハ第十七條ノ届出ヲ怠リタル者ハ一圓以上二圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス

第三十一條 此規則ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ不諭罪及ヒ減輕再犯加重數罪俱發ノ例ヲ用ヒス

第三十二條 醬油製造人ノ家族雇人ニシテ其營業ニ係リ此規則ヲ犯シタルトキハ其營業者ニ處罰ス

(九四)獸醫免許規則(明治十八年八月二十二日第二十八號布告)

- 第一條 獸醫ハ獸醫學術ノ試験ヲ受ケ農商務卿ヨリ開業免狀ヲ得タル者トス
- 第二條 開業免狀ヲ得ントスル者ハ試験及第證書ヲ以テ地方廳ヲ經由シテ農商務省ニ願出ツルヘシ
- 第三條 官立及府縣立ノ獸醫學校若クハ農學校ニ於テ獸醫學ノ卒業證書ヲ得タル者其證書ヲ以テ開業免狀ヲ得ントコトヲ願出ツルトキハ農商務卿ハ試験ヲ要セステ免狀ヲ授與スルコトアルヘシ
- 第四條 外國ノ獸醫學校若クハ農學校ニ於テ獸醫學ヲ卒業シタル者或ハ外國ニ於テ獸醫ノ開業免許ヲ得タル者其卒業證書又ハ開業證書ヲ以テ開業免狀ヲ得ントコトヲ願出ツルトキハ農商務卿ハ其證書ヲ審査シ試験ヲ要セスシテ免狀ヲ授與スルコトアルヘシ
- 第五條 獸醫ニ乏シキ地ニ於テハ府知事縣令ノ具狀ニヨリ農商務卿ハ獸醫學術ノ試験ヲ經サル者ト雖其履歷ニヨリ假ニ開業免狀ヲ授與スルコトアルヘシ
- 第六條 開業免狀ヲ得ル者ハ免狀下付ノ節手数料金一圓ヲ納ムヘシ
- 第七條 開業免狀ヲ得タル者ノ氏名本籍ハ農商務省ノ獸醫籍ニ登錄シ時々之ヲ公告スヘシ
- 第八條 開業免狀ヲ毀損亡失シ又ハ氏名本籍ノ變換ニヨリ免狀ノ書換ヲ願フ者ハ事由ヲ記シ地方廳ヲ經由シテ農商務省ニ願出ツルヘシ

地方廳ヲ經由シテ農商務省ニ願出ツルヘシ

- 第九條 開業免狀ノ書換ヲ願フ者ハ免狀下付ノ節手数料金二十五錢ヲ納ムヘシ
- 第十條 獸醫廢業又ハ死亡シタルトキハ地方廳ヲ經由シテ其開業免狀ヲ農商務省ニ返納スルヘシ
- 第十一條 獸醫其業ニ關シ犯罪若クハ不正ノ行爲アルトキハ農商務卿其業ヲ停止若クハ禁止スルコトアルヘシ但其事開業免狀ヲ得ルノ前ニ在リト雖モ本條ニ準シ處分スルコトアルヘシ
- 第十二條 前條ニ據リ獸醫業禁止ノ處分ヲ受ケタル者アルトキハ地方廳ニ於テ直チニ其開業免狀ヲ取上ケ之ヲ農商務省ニ返納スヘシ其停止ノ處分ニ係ルモノハ幾年月日間停業シタル旨ヲ開業免狀ニ裏書シ廳印ヲ捺シテ之ヲ本人ニ下付スヘシ
- 第十三條 農商務卿ハ獸醫業禁止ノ處分ヲ爲シタル後ト雖モ本人ノ行狀ヲ調査シ特ニ其禁止ヲ解クコトアルヘシ
- 第十四條 官許ヲ得スシテ獸醫ノ業ヲ爲シタル者ハ五圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處スルヘシ

(九五)種痘規則(明治十八年十一月九日)

種痘規則左ノ通規定シ明治十九年一月一日ヨリ施行ス

但明治九年內務省甲第八號及甲第十六號布達ハ此規則施行ノ日ヨリ廢止ス

第一條 種痘ハ小兒出生後滿一年以内ニ之ヲ行フヘシ若シ不善感ナルトキハ更ニ一週年内ニ再三種ヲ行フヘシ

第二條 種痘ハ善感後ト雖モ五年乃至七年ニ再種ヲ行ヒ再種後五年乃至七年ニ三種ヲ行フヘシ

第三條 天然痘流行ノ兆アルトキハ第一條第二條ノ期限ニ拘ハラヌ掛官吏ノ指定シタル期日内ニ種痘ヲ行フヘシ

第四條 種痘ヲ受クヘキ者病氣或ハ事故アリテ第一條第二條第三條ノ時期ニ種痘ヲ行フコト能ハサルトキ病氣ハ醫師ノ診斷書事故ハ親戚又ハ隣保ノ證印ヲ爲シタル證書ヲ副ヘ戶長役場ニ届出ヘシ

第五條 種痘ヲ受ケシ者ハ醫師ノ指定シタル日ニ於テ檢診ヲ受ケ痘漿採取ヲ要スルトキハ之ヲ拒ムコトヲ得ス

第六條 種痘濟ノ者ハ醫師ヨリ種痘證ヲ受領シ戶長役場ニ届出ヘシ

但天然痘ニ罹リタル者ハ醫師ヨリ其證ヲ受領シ本條ニ準スヘシ

第七條 十六歲未滿ノ者尊長後見人若クハ雇主等ニシテ現ニ其幼者ヲ監督スル者ハ前各條ノ責ニ任スヘシ

國貧育兒院等へ入院ノ者ハ該主長ニ於テ前各條ノ責ニ任スヘシ

第八條 醫師ハ種痘ノ善感不善感ヲ檢診シ種痘證ヲ付與スヘシ

但天然痘ニ罹リタル者ヲ治療シタルトキハ本條ニ準シ其證ヲ付與スヘシ

第九條 第一條第二條第三條第四條第五條第六條及第八條ヲ犯シタル者ハ五錢以上五十錢以下ノ科料ニ處ス

第十條 府知事縣令ハ種痘明細表ヲ製シ毎年一月七月ノ兩度內務卿ニ報告スヘシ

第十一條 此規則ヲ施行スル方法細則ハ府知事縣令ニ於テ便宜取設ケ內務卿ニ届出ヘシ

(九六) 獸類傳染病豫防規則 (明治十九年九月十五日)

獸類傳染病豫防規則左ノ通制定シ明治二十年一月一日ヨリ施行ス

但明治九年內務省乙第二十號達其他獸類ノ傳染病ニ關スル從前ノ達類ハ本規則施行ノ日ヨリ總テ廢止ス

第一條 此規則ニ稱スル獸類トハ牛馬羊豕ヲ謂ヒ傳染病トハ左ノ諸病ヲ謂フ

一 牛疫

二 炭疽熱

三 鼻疽及皮疽

四 傳染性胸肺膜炎
五 傳染性雞口瘡
六 羊痘

第二條 獸類傳染病ニ罹リタルトキ若クハ其症候ノ疑アルトキハ所有者又ハ管理者ハ其患蓄ト健蓄トヲ隔離シ獸醫ヲシテ患蓄及之ニ接近シタル獸類ヲ診察セシムヘシ

第三條 獸醫ハ獸類ヲ診察シ傳染病ト鑑定シタルトキハ所有者又ハ管理者ト連署シ直ニ警察署及戶長役場ニ届出ヘシ

第四條 獸醫牛疫ト診断シタルトキハ警察官吏及獸醫立會ノ上所有者又ハ管理者ニ於テ之ヲ撲殺スヘシ

第五條 第四條ノ場合ニ於テハ三人以上ノ評價ヲ以テ發病前ノ價格ヲ定メ所有者ニ左ノ手當金ヲ下付スヘシ

評價金二十五圓マテ	手當金評價十分ノ四
評價金五十圓マテ	同 十分ノ三
評價金百圓マテ	同 十分ノ二
評價金二百五十圓マテ	同 十分ノ一
評價金五百圓マテ	同 十五分ノ一
評價金千圓マテ	同 二十五分ノ一

第六條 獸醫傳染病蔓延ノ兆候アリト認ムルトキハ直ニ其旨ヲ警察署及戶長役場ニ届出ツ

第七條 第三條ノ届ヲ受ケタル戶長役場ニ於テハ其旨ヲ患畜所在ノ近傍ヘ榜示スヘシ

第八條 傳染病畜ノ全癒又ハ斃死シタルトキ若クハ傳染病畜ヲ撲殺シタルトキハ其所有者又ハ管理者ハ獸醫ノ診斷書ヲ添ヘ直ニ警察署及戶長役場ニ届出ツヘシ

第九條 傳染病ニ罹リテ斃死シ又ハ傳染病ニ由リテ撲殺シタル獸類並ニ其排泄物及之ニ觸レタル飼料褥草等ハ警察官吏ノ指定シタル場所ニ於テ燒棄スルカ又ハ消毒法ヲ施シ深六尺以上ノ坑ヲ掘リテ埋没スヘシ但埋没シタル場所ハ十二箇年ノ後ニアラサレハ發掘スルヲ得ス

第十條 傳染病畜及其排泄物ニ觸レタル物品若クハ看護者ハ勿論其患畜ノ在リシ場所ハ獸類ノ所有者又ハ管理者ニ於テ消毒法ヲ行フヘシ

第十一條 道路ニ於テ傳染病ニ罹リタル獸類若クハ其死体ハ警察官吏ノ指定シタル場所ニアラサレハ轉移スルヲ許サス

第十二條 傳染病ノ流行ニ際シ警視總監北海道廳長官府縣知事ハ獸類市場ノ開設及斃牛馬化成ニ關スル營業ヲ停止スルヲ得但本條ノ場合ニ於テハ停止又ハ解停ノ都度其旨ヲ農商務大臣ニ届出ツヘシ